

採 蓮

Siren

第二五号

No.25

目次

Contents

採蓮のいわれ 4

The Implication of “Siren” 5

資料紹介 歌川国峰旧蔵資料 田辺昌子 7

Introducing material: Material from the former collection of Utagawa Kunimune Tanabe Masako 17

所蔵作品紹介・前川千帆の写生帖 西山純子 19

Introducing works from the Collection: Sketchbooks of Maekawa Senpan (Abstract) Nishiyama Junko 61

令和3（2021）年度 利用者数 40

令和3（2021）年度 市民ギャラリー・いなげの活動 32

令和3（2021）年度 千葉市美術館の活動 2

採蓮のいわれ

蓮は古来の画題でありそれを描いた名画が多い。その花は清浄無垢、また枯れては寂寥の情をもたらす。

千葉は古代蓮の種が発掘され現代に命を復活した町であり、奇しくも千葉市美術館は古には蓮池（はずいけ）と呼ばれ蓮の漂う池を埋立てたといういわれの繁華街に位置する。音通する *sound* は美声をして船乗りを誘惑し難破させるギリシャ神話の海の精である。蓮を採るが如く古今の美を紡ぎ、妖精の如く人を魅惑する芸術に就いて論ずべく本誌の題を定めた。

千葉市美術館

The Implication of “Siren”

The lotus has been the theme of painting, and there many master works which delineate it. Its flower is pure and innocent, and gives the feeling of loneliness and silence after it is withered. Chiba is where ancient lotus was discovered and its life was reinstated. Coincidentally, the Chiba City Museum of Art is located on a street made by reclaiming the lotus field called Lotus Pond (Hasu-ike) in ancient times. *Siren* has same phonetic expression as Siren in Greek mythology who lured mariners to their destruction. The name of the bulletin was decided with the intention to weave the beauties of both present and ancient times as if harvesting the lotus and to discuss the arts which lure us like a siren.

Chiba City Museum of Art

資料紹介 歌川国峰旧蔵資料

田辺 昌子

本稿では、江戸時代後期の浮世絵界最大の勢力であった歌川派の血脈にあたる絵師、歌川国峰（一八六一—一九四三）の子孫より寄贈された作品および資料を紹介する（註一）。

国峰は、江戸時代末期に亀戸に生まれ、明治時代から昭和初期に活躍した絵師である。姓は勝田氏、名は銀之助と伝えられ、画号に梅蝶楼、また今回寄贈された資料から豊山という号も用いていたことがわかった。国峰の母は、幕末の歌川派を牽引して活躍した浮世絵師歌川国貞（二七八六—一八六五、三代歌川豊国※自称は二代（註三）の娘お勝であり、父は三代豊国の門人にあたる二代歌川国久（一八三二—一九一）、兄は香蝶楼歌川豊宣（一八五九—一八六）である。

国峰は、明治十四年（一八八一）刊『夜討曾我狩場曙』をはじめ、挿絵画家としての活躍が目立つ。明治十八年から五年間は京都日出新聞、その後大阪毎日新聞、都新聞（東京）に入って紙面に筆を執っている。明治二十五年頃再び大阪毎日新聞へ入社するものの、明治三十四年（一九〇一）頃には帰京し、その後は肉筆画制作を行った。兄の豊宣もまた新聞雑誌の挿絵を手掛けており、印刷や写真の技術が導入され、木版画による浮世絵が衰退する時期にあった近代における歌川派絵師の活動の様相を知ることができる（註三）。

以下に挙げる国峰旧蔵作品十六件は、その確かな伝来を念頭に、歌川派の継

承について考察するに有益な作品を選び収蔵したものである。

一、三代歌川豊国《歌川豊春自画之写》（文化九年（一八二二）作の写し）

紙本着色 一幅 三六・五×二六・九cm 弘化元年（一八四四）以降

（落款）「行年七十八翁 文化九壬申七月吉日 元祖一龍斎歌川豊春自画之写」「昌樹」（朱文鼎形印）「豊」「国」（朱文連印）

現在確認される唯一の豊春像としても貴重である。落款により、七十八歳という高齢に達した歌川豊春（一七三五—一八一四）の自画像を写した図であることがわかる。皺やたるみの目立つ老齢の姿で描かれた豊春は、左手に經典、右手に数珠を提げている。本図の姿の通り、鼎形印の「昌樹」は、豊春の剃髪後の号と考えられている（註四）。

その左横の小さな連印「豊」「国」が、実際これを写した絵師のものと考えられるわけであるが、可能性としては初代豊国も考えられるものの、国峰の遺品



という伝来、また江戸時代後期の叢書『燕石十種』『戯作者六家撰』に見るように、三代豊国が肖像画に長けた絵師であったことからすると、三代とするのが妥当と思われる。そうだとすれば、国貞が豊国を襲名した弘化元年（一八四四）以降に写された肖像画ということになる。「昌樹」の印は、原本にも捺された印を引き継いでいたものか、あるいは新たに印刻したものということになる。

二、歌川国貞《豊国先生四十三像》

絹本着色 一幅 七八・〇×三四・四cm 文化八年（一八一二）頃

（落款）「豊国先生時四十三像」「門人国貞沐手敬并写」「国貞」（朱文鼎形印）

国貞（のちの三代豊国）の筆になる師豊国の四十三歳時の肖像とされる。歌川派のマークである「年玉印」を表した黒羽織に袴姿で、腕を組んだ姿で描かれている。その前には太い煙管と煙草入、刀（脇差か）の上に載せるように手控帳を置いている。少し眉が吊り上がり鼻筋の通った顔立ちで、壮年の覇気のある姿と感じさせる。落款はないが、左記に挙げる箱書から、国貞の筆になるものと認識される。豊国四十三歳時であれば、弟子の国貞としては若い時代の作品となるが、十分に才能を認められ、本格的に錦絵の役者絵を始めた時期である。『燕石十種』『戯作者六家撰』では、国貞による肖像画が挿図となっており、この中にも「豊国肖像」がある。同じ人物と認識される似顔であるが、本図と較べるとややふつくらした顔で、年玉印の黒羽織も同じだが、ここでは刀を挿している。

実は、この肖像画は、もともと「四」の二代歌川国久《三代歌川豊国肖像》が現在取められている箱に入っていたものらしい。その箱書が大変興味深い内容であるので紹介しておきたい。

（箱蓋表）「歌川豊国先生四十三像 門人国貞筆 一幅」

（箱蓋裏）「火中出現 師之像 天保十五甲辰睦月七日 名印共 伊賀屋老母ヨリ受 国貞改 二代目豊国蔵」（印文不明）（白文方印）

（箱底裏）「此画像文政十三丑年三月廿一日佐久間町より出火致 北風強殊の外大火と相成、其節類焼致火中より取出し、外宮焼失ひ如斯紙中薫り候に付、表具直し外宮再拵し候者也 天保十二丑年九月 いがや勘右衛門」

箱蓋裏に「火中出現 師之像」とあるのは、箱底裏に老舗の版元伊賀屋勘右衛門が天保十二年（一八一二）に書き付けたように、火災に遭いながらも残った作品であることを意味している。本図の画面の大きなシミも、「如斯紙中薫り候」とある被災した時のものであろう。「文政十三年」とあるが、実際は文政十二年（一八二九）丑年、三月二十一日の文政の大火のことと思われ、記述の通り神田佐久間町より出火、北風により延焼して大きな被害となった。大火当



（箱蓋表）



（箱蓋裏）



（箱底裏）

時伊賀屋は大伝馬町にあり、佐久間町にも近く、国貞の作品も出版した関係から、この肖像は国貞のもとに戻されることになったのであろう。箱蓋裏では、国貞が豊国を襲名した天保十五年（一八四四）一月に、「伊賀屋老母」（勘右衛門の妻か）からこの像を受領したと記している。

三、歌川国輝《三代歌川豊国像》

絹本着色 一幅 八九・二×三四・〇cm （画）弘化二年／（賛）文久二年（一八六二）頃

（賛および落款）「一向に弥陀へませし気の安さ 只何事も南無阿弥陀仏

当戊 七十七歳 豊国」（年玉朱印）「豊国」（白文円印）

「予耳順の年門人国輝画て 送りこしぬ」

賛は、三代豊国で、記された句は、その死絵（錦絵）に同じ句が記されていることから、辞世の句として知られている。この図に賛をした時すでに七十七歳という高齢であった三代豊国は、その二年後の元治元年（一八六四）に没している。しかし絵は、自分が「耳順の年」に門人の国輝が描いて送った肖像ということで、三代豊国数え六十歳時の肖像ということになる。つまり六十歳時に描かれた肖像に、七十七歳の三代豊国が辞世の句を記して残したということなのであろう。



「補記」右に挙げた一―三の肖像画は、現状表装を同じくし、共に箱に納めて三幅対として伝えられており、その箱の表裏には、左記のように墨書されている。

（箱蓋表）

宗家 歌川豊春乃像

初代 歌川豊国乃像

二代 歌川豊国乃像

（箱蓋裏）

二代豊国乃孫

歌川国峰藏品 「歌川国峰」（朱文方印）

※この印は、「十四」に挙げる《歌川派印章》の中に含まれる。

この箱書のとおり、歌川派の始祖豊春、その弟子で中興の祖豊国、国峰の祖父であり、幕末の浮世絵界を牽引した三代豊国（自称は二代豊国）の肖像を、三尊として崇める意図があつて、国峰自身が三幅対としてまとめたものと考えられる。



（箱蓋表）



（箱蓋裏）

四、二代歌川国久《三代歌川豊国肖像》

絹本着色 一幅 七九・〇×三〇・五 cm 江戸時代末期

（落款）「国久筆」・「国久」（白文方印）

※この印は、「十四」に挙げる《歌川派印章》の中に含まれる。

箱は現状二、歌川国貞《豊国先生四十三像》の元の箱に収められている。国久には初代と二代がいるが、三代豊国の門に幼少より入り、その次女かつと結婚した、国峰の父にあたる二代（一八三二—一九一）が描いたものと見て良い。三代豊国の像とする文字情報はないが、剃髪の高齢の座像は、他の肖像とも共通するところがあり、来歴からもその可能性が高い。右手に数珠を持つており、国久の活躍期から考えても、晩年の姿を描いた肖像と考えられる。



五、歌川豊春《鍾馗図》

紙本着色 一幅 八三・一×三一・八 cm 江戸時代 十八世紀末期

（落款）「龍斎豊春画」（花押）

鍾馗が、人形を操って家々を回る傀儡師の格好で描かれている。からくりの箱の上に乗っているのは手に鉦を持った鬼の人形で、これが動いて鉦を打ち鳴らす仕掛けを想定しているらしい。鍾馗が退治するはずの鬼を操るユーモラスな図である。軽妙に描かれた図であるが、バランスの良い描写は、絵師の確かな力量を示している。



六、初代歌川豊国《芸妓図》（山東京山賛）

紙本墨画淡彩 一幅 九九・七×三七・九 cm 文政（二八一—三〇）前期

（落款）「豊国醉筆」（花押）

（賛）「三味せんの糸の一二をあらそふて 世にうたはるゝ歌川の筆 山東京山席上」

戯作者山東京山（一七六九—一八五八）が賛を書いた洒落た芸妓の図である。背を見せて見返るような姿の芸妓は、軽妙な筆致で描かれている。京山の落款に「席上」、豊国の落款に「醉筆」とあることから、酒宴の席で、ほろ酔いの豊国が絵を描き、同席の京山が賛をしたという状況があったものと思われる、同じ年齢でもある当時人気の二人の親しい関係も想像できる。



七、初代歌川豊国錦絵貼付／三代歌川豊国署名《四代目沢村宗十郎の梅の由兵衛》

紙本 一幅(仮表装) 三八・五×二三・五cm

(錦絵)文化七年(一八一〇)(三代豊国書付)嘉永二年(一八四九)
(書付)

文化七庚午歳春狂言

梅のよし兵衛

四代目 澤村宗十郎

古 豊国画

此にしき絵は、ふるき屏風張替致し候折から下張の中より見出し、ことごとく破れしをつくろひ、やうやく半にととのみぬとて奉候よしを、かひ付てよと経万子の需いなみかたかつたなき筆に誌之(読点は筆者による)

時二

嘉永二酉林鐘

香蝶楼

二世豊国 「豊国貞印」(白文方印)

由来を記した三代豊国の書付によれば、屏風の下張の中に混じっていた初代



豊国の錦絵の紙片を取り置いて師系に伝えようとしたものである。捨ててもおかしくないわずかな紙片をこのように取り置く点に、すでに没していた師先代の豊国への敬慕が感じられる。

この錦絵の完品を早稲田大学演劇博物館が所蔵しているの、図版を挙げておく。この図では「梅よしへ 澤村源之助」と画中に記されているが、源之助は文化八年(一八一二)に四代目澤村宗十郎を襲名しており、三代豊国は襲名後の名を記したことになる。



初代歌川豊国
《梅よしへ 澤村源之助》
大判錦絵 早稲田大学演劇博物館蔵

八、歌川国峰《立雛図》

紙本着色 一幅 一一・二×三四・六cm 昭和四年(一九二九)

(落款)「国峰」・「歌川」(朱文円印)

(箱表)「雛之図」

(箱蓋表)「昭和四年秋 歌川国峰」「豊山画印」(白文方印)「国峰」(朱文方印)

上巳(桃)

の節句の雛図、端午の節句のための鍾馗図は、子どもの成長を願う行事が盛んになった江戸時代において需要の多い画題となり、歌川派の浮世絵師も多くこれを手がけている。本図もそのような伝統を受け継いだ作品とい

える。金泥を用い、赤系の色を抑えた淡い色合いの格調ある雛図で、上部には色紙形が描かれている。現在雛人形を飾る時、関東では女雛を右に置くことが多いが、歌川派の雛図では本図のように多くが女雛を左にして描いている。



九、歌川国峰《騎龍観音》

絹本着色 一幅 一一九・六×四二・〇 cm 大正―昭和初期

(落款)「国峰」・「歌川」(白文方印)「豊山」(朱文方印)

騎龍観音は、龍を操り、雷雨を呼び起こし大地に恵をもたらすという御利益から信仰されてきた。墨のにじみを生かして表した黒雲の中から立ち現れた観音は、經典と蓮の蕾を持ち、龍は稲妻と共にスピード感を持って表現されている。



十、歌川国峰《山内一豊》

絹本着色 一幅(仮表装) 一三二・五 cm 大正―昭和初期

(落款)「国峰」・「歌川」(白文方印)「豊山」(朱文方印)

仮表装の裏に「山内一豊図」と記される。一豊の妻千代の内助の功のエピソード

ードとしてよく知られる場面で、高価な名馬を一豊に買ってもらうために、千代が鏡箱から金を出し、資金とするよう差し出している。これをきつかけに出世するという展開であるが、この場面では傍に鞍が置かれ、ひびの入ったままの壁が、この家が裕福でないことを示す。挿絵画家としても活躍した国峰らしく、物語の場面を説明する絵としての要素を備えている。



十一、歌川国峰《暫図》

絹本着色 一幅(仮表装) 一二二・〇×三七・三 cm 大正 昭和初期

(落款)「国峰」・「歌川」(朱文円印)

市川團十郎の暫の扮えを、正面から捉えて描いた迫力のある図である。役者絵をよくした歌川派らしい典型的な團十郎の暫図で、似顔として描いたわけではないようにも見えるが、国峰の活躍期からあえてあげるとすれば、名優九代目の團十郎(一八三八―一九〇三)が想定される。次項「十二」のような九代目團十郎自身の作品を所蔵していたことも考慮されよう。



十二、九代目市川團十郎《市川團十郎の暫》

絹本着色 一幅 九九・〇×三〇・〇cm 明治時代

（賛）

霜の朝出人 酔のなま乾き

大概の友は年比秘蔵せられし故豊国翁の

熟畫はからす一覽する事を得たるに例の癖出て

頻りに望候て対に亡父の倂慕候て もしや

御譲りにもならむかと口走りしに速に贈り給りておのれに

此図を模写してよと仰今更いなみかた

嗚呼なる様筆をもて多口作を償んとてかへつて

一倍の罰を醸すのみ

夜雨庵三升述

（落款）「豊国筆團洲写并題」「印文不明」（朱文方印）「劇場（印文不明）」

（白文方印）「印文不明」（白文方印）

落款および賛により、（三代）豊国の画を團洲こと九代目市川團十郎が写した暫図であることがわかる。夜雨庵は九代目の号である。賛にはその経緯が詳しく記されており、ある年秘蔵されていた豊国の亡き父（七代目團十郎）の絵を譲ってくれないかと口走ったところ、すぐに贈られたものの、此を模写するよう言われ拒否できずに描いたという作品である。

洒落た瓢箪模様の中に「谷」とある軸端は、明治時代の角彫師尾崎谷斎（一八



三五―九四）による細工かという。

十三、《歌川豊国硯》

一石 二八・五×八・五×三・〇cm 江戸時代後期

自然の形を生かした硯に、木材で蓋が付いており、金蒔絵で「（年玉印）祖豊国遺硯」と示される。すなわち初代豊国所用の硯として継承され、豊国没後に蓋を作成して大切に保管されてきたものであろう。



十四、《歌川派印章》

四八顆 江戸時代後期―昭和

国峰の使用印を中心に、父の国久、長女の歌川若菜（婚姻後城谷姓）など、近親の絵師の印が残されたもの。「国貞」の印もある。「一陽斎」「香蝶楼」の印もあるが、国貞の孫であり国峰の兄にあたる歌川豊宣も同じ号を用いており、豊宣の印の可能性が高い。印影は、14―15頁の表参照。

① 国峰の印



② 国峰の印「豊山」



③ その他 歌川派関係印



「若菜会印」



「歌川氏印」
(若菜使用印)



「若菜」



「若菜」



(一〜三の作品の箱蓋裏に捺されている印)

④ その他 用途または印文の不明は印



「峰春」



「国久」
(四の作品に捺されている印)



「峰重」



「一陽斎」



「城谷」



「香蝶楼」



「城谷」



「城谷」



「香蝶」



「城谷」



「国貞」



「歌川証版」



十五、久保田米僊《鍾馗図》

絹本墨画淡彩 一幅 一二〇・七×三三・五cm 明治十八年(一八八五)

(落款)「米僊」「印文不明」(朱文方印)

(賛)

「□峰」(朱文長方印)

一斤忠魂不可招 夢中有敕賜官袍

生雖不食千鍾粟 死亦常為萬國豪

乙酉夏日 蘆山老人書「蘆山人」(朱文円印)「千松林」(朱文方印)



十六、(無款)《金太郎図》

紙本着色 一幅 七六・八×三六・〇cm 江戸時代後期

強い子に育つようにという親の願いも反映された金太郎像は、広く需要があったと思われ、江戸時代を通して多く制作された。名のある浮世絵師が描いたとは限らず、このような無款の作品も多く存在しており、広く町絵師が手掛けた人気主題であった。



(註一) 国峰の子孫にあたる海堀周造氏、立田佳子氏より令和三年度千葉市美術館に寄贈された。

(註二) 国貞は、弘化元年(一八四四)に豊国を襲名し、二代豊国と自称するが、実際には同門の歌川豊重(生没年不詳)が二代を襲名していたため、現在三代豊国として区別している。本稿でも、基本的に三代豊国と記述するが、署名はその表記通りに書き起している。

(註三) 『浮世絵大事典』岡本祐美「歌川国峰」の項参照。東京堂出版 平成二〇年

(註四) 飯島虚心『浮世絵師歌川列伝 上巻』(明治二〇年代成立)玉林晴朗校訂本 畝傍書房 昭和十六年

(謝辞) 本稿執筆にあたり、一部画賛の読みに関して浅野秀剛氏に助言をいただきました。また、ご寄贈いただきました海堀周造氏、立田佳子氏に心より感謝申し上げます。

Introducing material: Material from the former collection of Utagawa Kunimine

Tanabe Masako

This paper introduces the artworks and various material gifted by the descendants of Utagawa Kunimine (1861-1943), artist of the Utagawa School lineage that was the greatest influence in the world of Ukiyo-e of the later Edo period.

Kunimine was born in Kameido at the end of the Edo period, and was an artist active from Meiji until the early Showa era. His family name is said to have been Katsuta, and his first name Ginnosuke, with an artist name of Baichoro. He also used the pseudonym Houzan, as learnt from the material gifted on this occasion. Kunimine's mother was Okatsu, daughter of the Ukiyo-e artist who was active as the driving force of the Utagawa School during the Bakumatsu period, Utagawa Kunisada (1786-1865), also known as Utagawa Toyokuni III. His father was Utagawa Kunihisa II (1832-91), pupil of Utagawa Toyokuni III, while his older brother was Kochoro Utagawa Toyonobu (1859-86).

Kunimine stands out through his activities as illustrator for works including *Yochi Soga Kariba no Akebono* published in 1881 (Meiji 14). For five years from 1885, he joined, and took to illustrating for, the *Kyoto Hinode Shinbun*, followed by *Osaka Mainichi Shinbun* and *Miyako Shinbun* (Tokyo) newspapers. He once more joined the Osaka Mainichi Shinbun in 1892, although returned to Kyoto in around 1901 and engaged in producing hand paintings. His older brother Toyonobu was also involved in illustrating for newspapers and magazines, and their work tells us of the phase of Utagawa School-artists' activities in the modern age, when printing and photographic technology was introduced and woodblock-printed Ukiyo-e art began to wane.

(Translated by Barbara Cross)

所蔵作品紹介・前川千帆の写生帖

西山 純子



図1 (写生帖を手にした自画像)
『満蒙風物即興』屏より
昭和15年(1940)
アオイ書房刊／個人蔵

■はじめに

前川千帆(まえかわ・せんぼん 一八八八—一九六〇)は、近代日本を代表する創作版画家として知られる(図1)。はじめ漫画家として名を成すが、かたわら木版画を手がけ、昭和十年(一九三五)頃からは版画に軸足を移し、その清澄かつユーモラスな造形が高く評価されるに至った。千葉市美術館は、千帆が大正期末から戦後にかけて使用した写生帖三十冊を所蔵している。当館では令和三年(二〇二一)、前川千帆の大コレクションを有する公益財団法人平木浮世絵財団の全面的な協力のもと「平木コレクション」による前川千帆展の開催がない(註1)、写生帖もあわせて展示したが、三五〇点を超える大回顧展だったこともあり、版画作品との関連を中心にごく簡単に紹介するにとどま

った。そこで本稿では、展覧会後に判明した事柄や訂正事項も含め、写生帖各冊の概要や他の仕事との対応関係について現時点でわかる限りを述べ、また記載された文章についても一部の紹介を試みたい。

■写生帖三十冊の概要

千帆の生涯と版業については、既刊のふたつの展覧会図録を参照されたい(註2)。千帆が昭和十三年(一九三八)から住んだ東京都中野区宮里町の家は、同二十年五月の空襲で全焼して家蔵の作品や資料はすべて失われ、戦前・戦中の写生帖についても、戦局が悪化するなか、友人の厚意で愛媛県八幡浜の銀行金庫に避難させた草花の写生帖を除き、すべて焼失したとされている(註3)。

当館所蔵の写生帖は、平成十二年度に購入した。巾着に入った状態で(図2)一括購入したものだが、巾着が千帆生前のものかどうかも含め、残念ながら来歴は不明である。表紙に千帆の手で取材地や年代が記された帖が多いが、番号はふられていない。現在の番号



図2 写生帖と収納されていた巾着

は、当館で収集するにあたり、おおよその制作順で仮に付したものである。ただし使用時期は短く絞れるものもあれば長きにわたると思われるものもあり、また展覧会の開催と今回の再調査により、順序にはかなりの修正すべき点が見いだされた。それについては後述する。

使用された期間は、日付などから判断し得る限り、大正十二年（一九二三）から昭和三十三年までの三十五年間にわたる。千帆が三十五歳から七十歳の頃にあたり、多半は版画家転向以降の資料ということになる。約半数が焼失したはずの戦中までのものであり、また残る半数以外にも戦後の写生帖は存在したと思われるが、なぜこの三十冊がまとめて保管されていたのかはわからない。だが既述のとおり戦中までの資料がほぼ失われたとされるなか、戦前期を伝える貴重な記録であることは疑いない。加えて、戦争末期の昭和二十年四月に岡山へ疎開した際携行し^{（註4）}、終戦以降も五年を過ごした岡山で使用した写生帖が含まれる事実を考え合わせるならば、千帆と移動をともし、その晩年まで傍にあった一群であることは推測できる。

■各冊の概要

三十冊を一覧表にし、基本的なデータをまとめた（表1）。関連作品として、木版画と雑誌の挿図を中心にわかる限り記載したが、連作『版画浴泉譜』が特に目立つ結果となった^{（註5）}。ただし関連の仕方にはばらつきがあり、下絵と言えるものから大まかな構図のみのもの、断片としか言えないものまでさまざま存在する。また写生帖は当然ながら発表を想定しておらず、千帆の場合も概して整然とは使われていない。上下が混在し、切り取りや白紙があり、本来の右開き／左開きとは別に、どこからどちらの方向に使われたのか判断が難しいものもある。文字も右縦書きと左縦書きが混ざり、独特の略字や走り書きのた

め判読できない、あるいは読みに迷う箇所も少なくない。

表1を補完すべく、以下各冊を簡単に紹介する。作品に関連するため温泉を主とする旅の概略にもふれ、図版は『図録二〇二』で紹介しなかったものを中心とする。

□写生帖 no. 1

三十冊のうち最も早い時期の写生帖で、関東大震災直後の東京を鉛筆で速写したスケッチに始まる。当時千帆は千駄ヶ谷に住んでおり、幸い被災は免れた^{（註6）}。関東大震災に際しては、千帆もメンバーであった日本漫画会の同人が震災直後の明治神宮外苑に集合して展覧会の開催を決定した事実があり^{（註7）}、これに関連するものと考えられる。スケッチは十四枚にわたって続き、これらのスケッチから大正十二年十一月に開催された日本漫画会主催「震災画展覧会」の出品作が生まれ、同会が出版した『大震災画集』にも収録されている。千帆の視線は焼跡や瓦礫とともに犠牲者にも注がれ、焼死体を描いた生々しい図（図3、4）も存在するが、展覧会では発表を控えたようだ。『画集』にも掲載

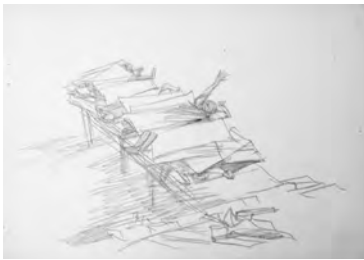


図3 写生帖no.1より



図4 写生帖no.1より 「屍橋の焼屍体」

はない。

本帖には他に、琵琶湖周辺（関ヶ原、賤ヶ岳、余呉湖、竹生島）への旅と、諏訪湖への旅のスケッチが収められている。前者の時期については、関連する木版画《雪の余呉湖》を大正十三年十一月の日本創作版画協会第六回展に出品しており、また雪の季節であることから、同年春以前と思われる（註8）。水彩が賦された雄大な山々が印象的である（図5）。後者については、表紙および内容から大正十五年二―三月の旅とわかる。見聞きしたものを羅列した覚え書きがあるが（図6）、これは全写生帖に通底し、また後年の連作『版画浴泉譜』とも共通する千帆独特の語法であるので、一部不詳ながら引いておく。

御柱祭の標柱赤く塗った大柱、

駅頭に建つ、

罐人形の店、

四囲の山は雪、湖は少波、

ボートは未だ倉の中、

若さぎ、鮎、蜆とり、

細い舟に大い肥料桶二ツ

風が出ると湖を漕ぐ肥料半貫動揺の

為め溢れると百姓の云草、

諏訪名物唄

諏訪の名物かりん初霜蜆のお汁

トテモゴサリマス

おめ様ホンマニ□いてくだそ□へ

駅より鷺の湯へ俵、三十銭

畔の薺、よもぎ、

「初霜」とあるのは菓子の名。後年の『閑中閑本 第一冊 文献惣糖帖』（註9）



図5 写生帖no.1より「関ヶ原の山」

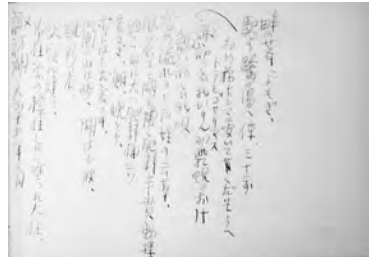


図6 写生帖no.1より
「諏訪湖 大正十五年三月」

に見るように、千帆は大の甘党であった。また「おめ様……」と、土地言葉の音声を集めるらしいのは、やはり後年の『閑中閑本 第二十冊 街頭雑音帖』を予告する、千帆らしい関心のありようと言える。

□写生帖 no. 2

昭和四年二月の新潟県への旅（長岡、湯沢温泉、十日町、寺泊）の行程図から始まる（図7）。千帆の写生帖にはかような行程図が散見されるが、いずれも漫画の筆致を活かした軽妙なイラストになっている。同行は漫画家仲間の水島爾保布、田中比左良、宮尾しげを、中島六郎、京屋金介。長岡で「永田氏」のアテンドを受けている。長岡は人の背よりも高く雪が積もり（図8）、雪の好きな千帆（註9）は嬉々としてその風俗―雪下駄や橇、蕨香にかんじき、笠と蓑をつけて雪かきする人々―を写している。土地の菓子や「ねぎいらぬかのー」と言った物売りの声を記録し、温泉に興じる様子は、後年まで変わらぬ千帆らしい姿である（註11）。

梅園や庭園のスケッチをはさんで、昌平橋、月島、本所工場地帯などの復興



図7 写生帖no.2より



図9 写生帖no.2より

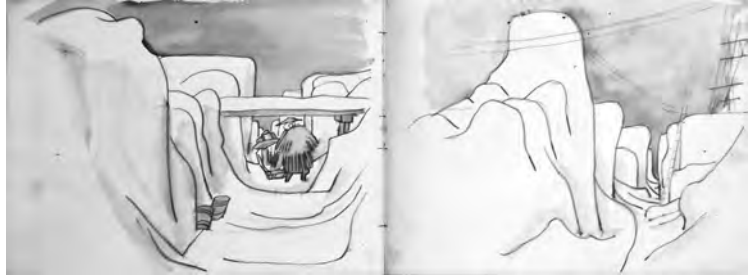


図8 写生帖no.2より

後の景色がある。これらは、昭和三年十月に結成した卓上社で制作した『新東京百景創作版画』関連と思われる。続いて、『新東京百景』と同じく創作版画倶楽部が頒布した『日本風景版画 軽井沢之部』のためのスケッチがある(註12)。実際に制作された五点とは異なる、当初の構想らしき覚え書きが添えられているのが興味深い(註13)。

本帖はさらに、同年六月の二度目の新潟県への旅の記録を取める。やはり行

程図があり、長岡、栃尾、今町、小千谷、新津、両津、佐渡、相川、小木、寺泊などを訪れたことがわかる。同行は池部鈞、水島爾保布、幸内純一、清水対岳坊、細木原青起、宮尾しげを。今町では大風合戦を見物し(図9)、長岡から山奥に分け入った虫亀村では牛の角突きを楽しみ、佐渡では鉱山を訪れている。祭や郷土芸能への関心は他の写生帖にも共通するところで、佐渡の下り羽やおけさ、野呂松人形を描き留めている。この旅は、雑誌『婦女界』の「漫画紀行 越後から佐渡へ」(池部・細木原・宮尾との共著)の取材であったと考えられる。

最後に、鉛筆によるラフな風景写生が数枚ある。なかに別府の砂場温泉や由布岳があり、由布岳には「七月廿一日」と添記されている。『日本新八景版画別府』(創作版画倶楽部)の取材であろうか。総じて充実の一冊と言え、後年の『閑中閑本』でも図柄が使用されている。

□写生帖 no. 3

何葉かの東京風景(「目白文化村」、鬼子母神の茶店と思われる雑司ヶ谷の一景、「千住新橋」)に始まるのは、写生帖 no. 2と同じく『新東京百景創作版画』の取材と思われるが、本帖の大部分を占めるのは、昭和四年九月の山陰と隠岐への旅のスケッチである。同行は水島爾保布、清水対岳(坊)、宮尾しげを、近藤飴ん(ン)坊、細木原青起。行程図で旅の詳細がわかるので略述してみると、十五日の夜行で東京を発って翌朝京都に入り、写生は宮津から始まる。同地では「湾内舟を浮べて月見」、「十四夜の月よし」と、風流な夜を楽しんでいる。一宮の籠神社で狛犬を描くなどして(図10)、十七日に京都を離れ、山陰本線で翌朝松江に入ったようである。松江では折あしく修繕中の松江大橋や八重垣神社を訪れ、大山をのぞみ、千鳥城(松江城)の天守閣に上っている(図11)。宍道湖畔の臨川亭では「法眼栄川筆」の福祿寿を模写し、湯町では宍道湖を見



図10 写生帖no.3より



図12 写生帖no.3より
行程図および「後鳥羽院天皇行在所趾」



図11 写生帖no.3より

ながら温泉につかる。十九日は日御碕、宇龍港、福性寺を訪れ、二十日に境港から松浦丸に乗船し、翌朝隠岐を訪れる(図12)。黒木御所跡(後醍醐天皇行在所跡)や玉若酢命神社、飯山古墳を巡り、貴重な駅鈴にも注目している。再興が中断している隠岐国分寺では手が落ちたままの仁王像に絵心を誘われ、付記して「国分寺の趾蕭條としてよし秋草乱れ咲く中に礎石あり」と綴る。二十二日に西郷港から隠岐丸に乗って翌朝境港に入り、美保の関や皆生温泉を巡って二十四日の東京都着、翌日の夕方東京に戻っている。帖末に、隠岐の方言による風の呼び方が採集されているのが目を惹く。この旅が何らかの仕事に関連するのかについてはまだ確認できていないが、後年の『閑中閑本』では図柄が用いられている。

□ 写生帖 no. 4

「三月十八日代々木西原」と記された造成地の光景から始まる。千帆は昭和三年の三月頃代々木山谷町三一六に転居しており、そこから西原までは二キロにも満たない。本帖は昭和五年の旅をメインとし、『図録二〇二一』においても同年のものと紹介したが、転居を機に使い始めたとするのが妥当かもしれない。であれば「三月卅一日」に堂ヶ島温泉を訪れたのは同年と考えられ、宿から望む溪谷のスケッチや、長尾峠を遠望するスケッチが残されている。続く断片的な都会スケッチも、昭和四年に発表された『工場地帯1』『工場地帯2』の草稿と考えてよいのだろう。

次に、表紙の情報から昭和五年とわかる法師温泉への旅がある。五月二日の朝上野を発ち、後閑からは自動車である。「桜、李、春の花盛り雨中佳し」と雨の旅を楽しみ、今もある「長寿館」のスケッチを残す(図13)。湯については、「古風な浴場」と満足げた。翌三日には三国峠からの眺めを何葉か写し(図14)、次のような感想を綴っている。

五月三日快晴、沢に沿ふて上る、

一里で三国頂上、途中の沢に雪残る、

こぶしの花多し、頂上の風強し、

越後の方は霞む、その中に苗場山の雪、

上州側と一ヶ月の差あり、

旧道の見へるところよし、

法師温泉から新潟県へ抜けたと見え、四日には魚沼市の大湯共同湯を訪ねる。大湯道より駒ヶ岳と中の岳を仰ぐ図を残し(図15)、遙かな未丈岳の残雪も描き留めている。

同年同月には長野県にも出かけて十日に長野図書館で、十一日に松本高校講堂で講演を行なったらしく、吉井勇、安成二郎、竹久夢二、山崎斌とともに自



図13 写生帖no.4より「法師温泉浴槽」



図15 写生帖no.4より
「大湯道より駒ヶ岳と／中の岳を見る」



図14 写生帖no.4より
「五月三日／三国峠より／苗場山を望む」



図16 写生帖no.4より「番場峠の上の池」

らの名を記している(註14)。この時の写生には「有明駅より／雲をかむる有明」「番場峠の上の池」「麻積のプラットホームよりアルフス連峯」などとモチーフが細かく明記され(図16)、また「番場はよいところ」で始まる番場節の歌詞が採集されているのが千帆らしい。

本帖の後半は草花の鉛筆スケッチに多くが割かれ、なかに牛の速写やいくつかの『新東京百景創作版画』のラフスケッチがはさまれている。表1に示した

とおり関連作品は多く、美術雑誌のふたつの挿絵付きエッセイにも結実している。また法師温泉にはこの後幾度も訪れ、同地に取材した木版画が、アオイ書房主・志茂太郎に『版画浴泉譜』を発想させるきっかけとなった(註15)。千帆にあつては重要な旅であり、それを記録した重要な写生帖と言えるだろう。

□ 写生帖 no. 5

昭和五年五月の大島への旅に始まる。海を隔てて富士山を遠望する鉛筆スケッチから、「伊豆七島眺望」や、三原山とおぼしき噴煙をあげる山のスケッチへと展開する。大島の風俗の女たちや「波浮の港」の歌詞が採集されるが、描き込まれた写生は多くない。

続く同年六月の旅は信州である。同行は服部亮英、宮尾しげを。「幸内田中不参加」とのメモがあり、幸内純一と田中比左良も同行予定だったと思われる。まず訪れた上山田温泉について「六月の山青黒い／梅雨で雲去来よし、駅前の村、中央の水流よろし／上山田清風園に吉川英治変名してかくれある」と書き、梅雨空の第一印象とともに同宿の流行作家の名を書き留めている。表紙に「信州温泉」と記されているとおり温泉をメインとした旅で、山田温泉、湯田中温泉、渋温泉、上林温泉、野沢温泉を訪れており、それらのスケッチは後年『版画浴泉譜』に結実している(図17)。途中「角間温泉に横山大観の別荘あり、広荘なり」とも書き残しており、穂波温泉や湯田中温泉の佐久間象山の碑・資料への言及もある(註16)。

さらに、同年七月の伊豆西海岸への旅が続く。文字から訪れた場所を拾うと、堂ヶ島、烏帽子山、手石、大瀬、石廊崎、妻良、須崎、下田といったところである。行程図によれば二十八日に沼津から伊豆半島を巡り、三十日に三島から帰京したと読める(図18)。同行は高口、池部鈞、水島爾保布、池田永治、服部亮英、細木原青起か。この旅では彩色を施した写生を数多く残し、いくつ



図17 写生帖no.5より「安代大湯」



図18 写生帖no.5より

かの一枚摺に結実させたほか、雑誌『旅』の「漫画 伊豆漫画行」（水島爾保布との共著）も世に出している。あるいは同誌のための取材の旅だったかもしれない。

□写生帖 no. 6

表紙を別紙が覆っており、もとの題字は「知多半島／榛名雪／塩田」と読めるが、塩田以外は内容と一致しない。遠刈田温泉の共同湯の景色に始まり、秋保温泉、赤湯温泉、青根温泉のスケッチがメインの写生帖である。文字情報は乏しく行程図もなく、この旅の経路は明らかではない。あるいはひとつの旅ではないのかもしれない。また、青根温泉については昭和十六年二月の日付とともに覚え書きがあり、遠刈田とともに同年の『版画浴泉譜』の一図となるが、本帖には昭和九十年の『第五野外小品 河』や同十年の『小部屋』と推定される作品もあり（図19）、使用された時期が絞れない。さらに、中盤に四国への旅の行程図と塩田に関連したスケッチや切り抜きの貼り込みが続く頁があり、上下も著しくばらばらで、再考の余地を残す写生帖である。とはいえ、遠刈田



図19 写生帖no.6より

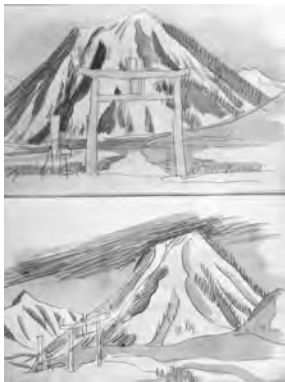


図20 写生帖no.6より

温泉のスケッチには次のような文字が添えられ、客としてばかりでなく、観察者として鄙びた温泉地の暮らしに向き合う千帆の眼差しを伝える註17。

三年廃湯の跡、
婆さん洗濯、
寛より湯、
干ものを買う婆、
馬のり湯治客、
荷もつの上の子供、
共同湯三棟、
床やも同居、

秋保、赤湯、青根温泉にも同様な覚え書きがあり、秋保へは「こわれ電車一時間揺られ」たと書き、赤湯では雪のなかで「赤い頭巾の女の子／ハコ櫓で遊ぶ男の子」に注目している。また青根では雪で閑散とした温泉地の「清冽な青い湯、杉のいゝ色の森」に喜び、何行にもわたって目にした光景や土地の人に聞いた話を列記し、「雪の中に流れるラヂオニュース 山は静寂」と結んでいる。

る。特記される絵としては、『冬の湖』の下絵など、一連の美しい水彩があるのが印象深い(図20)。

□写生帖 no. 7

黒部峡谷への秋の旅に始まる。「黒部峡谷行」と題する頁があり、十一月五日から十日までの旅程と同行者(水島爾保布、池部鈞、細木原青起、服部亮英、池田永治、森川)がわかる^{註17}。時期については、昭和六年春の春陽会展出品作『登山軌道』との関連が推測されることから、昭和五年と判断した。この旅では、五日夜に上野を発つて翌日の朝糸魚川につき、その後富山県に入つて小川温泉、宮崎海岸、泊、三日市、宇奈月温泉、黒部峡谷、黒薙温泉、鐘釣温泉などを訪れている。往路の汽車は寝台がなく眠れないが、軽井沢近くで霜の降りた景色に月が映えるのを見て「この夜良し」と書く。六日には糸魚川で相馬御風と会つたようであり、また六日と七日に「半切労働」と記すのは、滞在先の求めに応じて揮毫したという意味である。毎晩のように「歓迎宴」との記述があり、著名な漫画家たちへの歓待ぶりが想像される。一方鐘釣温泉では、以下のようなつぶやきを残す。宴とは対照的な、静かな温泉の愉しみである。

鐘釣温泉／嵐風呂、／湯口木の葉まいおちる、／夜／月明／谷を距て、／断がいに／対す／紅葉／満山、／雨ふれば／傘をさして／湯槽まで／雨か、り／冷めたし

本帖が収めるいまひとつの旅は、真冬の北海道である。同行者は記されていない。一月十日に上野を発つが、黒部への旅の後であるから昭和六年のことであろう(この旅に取材したと思しき『噴火湾』が、やはり同年春の春陽会展に出品されている)。大雪のため汽車も汽船も遅れ、翌日の午後二時半に函館入りしている。その後小樽、札幌、定山溪、白老、登別を訪れ、帰路は青森から温



図21 写生帖no.7より



図22 写生帖no.7より

海、新津を周つて十九日に上野へ帰着した。橇や角巻の女、塗り下駄といった雪国の風物を写し、小樽では馬橇(図21)や雪かき、鯉場で働く女性たち(図22)を描いている。白老ではアイヌの家を訪れたようで、登別では浴客を観察することも忘れていない。本帖の写生は概して鉛筆による簡単なものが多いが、橇のスケッチが『第四野外小品』の二作で使われている。また『小豆袋と女(北海道)』の関連スケッチがあり、取材地は小樽と考えられる。北海道で目にした景物は印象的だったのであろう、さらに後年の『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』の素材にもなっている。

□写生帖 no. 8

表紙には「戸隠山昭和十、三、／山中湖昭和十三、七」とあるが、前半と後半に富士五湖のスケッチが分かれ、間に戸隠の記録がはさまる並びになっている。戸隠への旅では、上野から「ハレ、あた、か」な北塩尻に入る。この旅の目的地は、貼付された新聞記事から、山崎斌が南条村に開いた月明塾とわか

る。山崎とは京城日報社以来の親交があり、山崎が昭和十三年に『月明』を創



図23 写生帖no.8より
「月明村塾」



図24 写生帖no.8より



図25 写生帖no.8より



図26 写生帖no.8より 「本栖湖」

刊した際には、千帆も同人に名を連ねている註り。妻みさをが山崎の従姉妹という間柄でもあった。千帆は月明塾で女性たちが染や織に動しむ様子を見学した(図23)他、姨捨山や戸隠神社、裾花峠などを訪れている。道中、日本アルプスや浅間山が美しく見えたようだ。旅の覚え書きにはみそさざえ、かけす、うそ、啄木鳥といった鳥の名も数多く記録され、「六月初夏の鳴鳥の壮観想像に余りあり」と空想を展げている。帖末に鳥の写生が見えるのはこの時のものであろうか(図24)。また姨捨山の桂と月見堂は、以後繰り返し描くモチーフとなった(図25)。

いまひとつの旅では、山中湖の一高寮に三泊している。同行は創作版画家の恩地孝四郎、藤森静雄、山口進(註20)。既述のとおり千帆は漫画家仲間と連れ立つことが多く、版画家仲間との旅は珍しい。山中湖だけでなく西湖や精進湖、本栖湖も訪れ、充実した写生を数多く残している(図26)。真夏でも「追がに風涼しい富士の麓で、湖にボートをだしては夏草を採集し、湖畔の祭や夜の富士登山の灯にも出会った、楽しい旅だったようである。なお本帖には、《版画浴泉譜 川治》と構図が共通する川治温泉や鬼怒川の風景も残るが、後年のものと考えられ、使用された時期は再考を要する。

□写生帖no.9

上下が著しくまちまちで、白紙も多く混在する。表題はなく、裏表紙に小さく「昭和十二年」とあるが、実際は昭和十一、十二、十五年の記録が残されている。写生時期と場所がわかるものを抜き出してみると以下になる。

昭和十一年六月二日

鬼押出、六里ヶ原

昭和十一年九月

「よき形の藁葺家」

昭和十二年春

武蔵嵐山

昭和十二年三月十九—二十日

苗木城址

昭和十二年四月十三日

名古屋城

昭和十二年五月十八—十九日

法師温泉

昭和十五年秋

石神井三宝池

他に年月の記載のない「桶狭間附近」があり、名古屋行の一連と思われる。また「石神井三宝池」の近くに「世田谷豪徳寺付近」とあるのは、昭和十五年の写生と推測できる。

本帖からは名古屋城に取材した二点の大作や、戦後の《石神井三宝池》(『一木集』)、《浅間山鬼押出し》が生まれている。再びの法師温泉では格子状に線

の引かれたスケッチがあり(図27)、大作に展開したと想像される。昭和十二年秋の日本版画協会第六回展に出品した《法師温泉》が該当するのかもしれない。法師温泉ではまた、まとまつた言葉も残している。質素で清潔な温泉を好み、それを支える人々の日常を尊ぶ千帆の眼差しをよく伝えるので引いておく。

磧に河鹿鳴く、夜の浴場、嵐気迫り静寂、

女湯より月さし星よくみへる、

山の風清しく吹き込む、

一年一度の大掃除直後にて浴槽底石キレイ、

天井の木組みもホースにて洗った由頗る清潔、

依然としてランプ、

山の水豊富に流れ溢れる、

両日とも掃除にてたゞみたゞく

以前の建増沢山あり

十八日は白い雲去来する

夜半より烈風吹く、

月よし、

鳥の声案外に少し、

蠅沢山居る、

猿が京案内所にケマン草美し、

おたまき盛り、

桜未だ散り残るものあり、

法師の下に沿ふ林道新緑よし、

緑色の日光、山草沢山にて応接にいとまなし、

途中の山野に羊多く飼はれ 芝犬居る

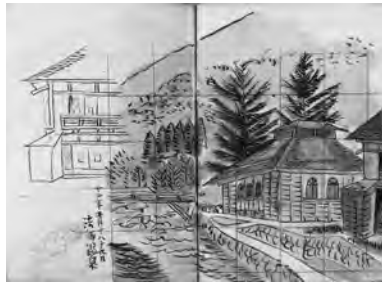


図27 写生帖no.9より
「十二年五月十八十九日／法師温泉」

□ 写生帖 no. 10

表紙・裏表紙の両方に、内容の重なる表題を有する。他の写生帖と同様上下が定まらず、描き始めの特定も困難であるが、ふたつの旅が収められているのは表題のとおりである。

昭和十二年六月の伊豆と大島・新島・式根島への旅は、簡単な鉛筆スケッチを残すのみである。七日に出発して下加茂温泉に一泊し、大島のおんこや役行者窟、乳が崎の灯台を写すが、他にも写生帖が存在したか。同年千帆は、雑誌『旅』第十四卷第八号の特集「島の涼風線 五大漫画家ユーモアコンクール」に「大島拝見」を寄稿しており、そのための取材であったと考えられる。同文に「我々の一行」との記述があるから、他の四名―細木原青起・池部鈞・水島爾保布・池田永(二) 治も同行したに違いない。

いまひとつの旅は昭和十五年十月、何度目かの法師温泉行である(図28)。紅葉が見頃で美しいが、「三国越の風寒し、黄い葉を捲き落し来る、／夕刻甚だ冷へる」と書き、秋の早い到来を実感している。谷川岳の眺望を期待したが



図28 写生帖no.10より
「無多胡溪谷/流木/十月十六日」



図29 写生帖no.10より

果たせなかったようで、まないた岳のスケッチには「谷川は許可されず／エハカキもうれず」との覚え書きがある(図29)。詳細は不明だが、時世を考えると、野外での写生が防諜のため制限されたからではないかと推測される。

□写生帖 no. 11

昭和十三年の朝鮮への旅に始まる。十月十一日に下関から昌慶丸に乗って翌日午後六時釜山に降り立ち、以後大邱、伽耶山海印寺、公州、扶余、儒城温泉、京城、元山、清津、羅南、朱乙、永安、城津、平壤、開城、水原を訪れる。この旅の主目的は、京城三越で十四日から十六日まで開催された「池部鈞、水島爾保布、前川千帆、宮尾しげを、細木原青起漫画作品展」であり、会場へは十四日に出向いている。同行は細木原。開城で宮尾と合流しており、あとのメンバーには言及がない。二十一日には京城に「仁義に来」た中西立頃の弟と会い、二十三日に大島勝太郎に見送られて朝鮮を離れている。多くの写生が残り、細密かつ鮮麗な図も少なくない(図30)。

他の写生帖と同様本帖も上下がまちまちで、前後関係も一部定かでないのだが、表紙の情報に従うならば、次の旅は同年十一月の日光戦場ヶ原行である。十八日の日付が見えるが文字情報は乏しく、色味の覚え書きが大部分である。鉛筆のみ、あるいは鉛筆と水彩による風景画が八図ほど展開している。

次に来る旅は、昭和十四年一月の庄内旅行である。元日は米沢で迎え、翌日は新庄を訪れている。風景よりも、雪国の女性風俗を愛らしく描いたスケッチが多く、「鶴岡附近」と記された一図は、著名な《三角ずきん》の下絵になったと思われる(図31)。「防寒に着てゐるものいろいろ／きまりなし」との覚え書きがあり、同じ庄内地方でもさまざまな風俗や着こなしが存在することに好奇心を抱き、楽しむ様子が伝わる。

そして最後に昭和十五年九月の松の山温泉行がある。スケッチに添えて、温



図30 写生帖no.11より 「西門」



図32 写生帖no.11より 「松の山」



図31 写生帖no.11より 「鶴岡附近」

泉場の景観や「温泉節」「温泉小うた」などの写真が貼付されている。すでに森山悦乃氏が指摘したとおり^{註21}、《版画浴泉譜 松の山》は貼付された写真の構図を利用してゐる。スケッチは完成度の高いものが多い(図32)、また文字によっても感興が記されている。

温泉場甚だ古風の建築にて面白し、質朴な自炊客多し、毎朝朝市立つ由、

往来へ針金をはり夜具を干す、竿にて突き上げる手際、十日町より直通のバス

あり、冬期深雪にて交通至難の由、

湯治場風景親しみ溢れてよし

凌雲閣は五丁手前の新築、文化的大建築、

塩類泉にて相当熱し、

附近農家 葛の葉を干して馬糧に

松山鏡の傳説あり、蓄へる由 たくさん軒壁につるす(註22)

松の山ではさらに、獅子舞と思われる図や、松の山神楽の軽妙な写生も残している。楽しい旅だったのであろう。総じて充実した写生帖と言え、最後に、二葉ほど東京のスケッチを見る(「荻窪」「小金井の桜古木」)。

□写生帖 no. 12

昭和十四年五月から六月にかけての北満洲・蒙古への旅のスケッチを収める。同行は水島爾保布、坂(阪)本、森島、小野佐世男^{註23}。この旅の印象は、昭和十五年にアオイ書房から『滿蒙風物即興』として書籍が刊行されている。五十のテーマからなる同書と照合したところ、本帖に三十九の下絵あるいは関連スケッチが存在した。順番は前後し、人物を加えるなどアレンジは施されているが、同書のあとがきに「殊に当時の画興の減殺されん事を虞れて、殆どスケッチブックそのまゝに修飾を加へず、聊か粗雑の感なき能はずですが、旅中の新鮮な感覚、その生々しさに、むしろ重点を於いて 素材をありのまゝに披瀝したものです、滿蒙の黄土の匂がする処が身上です」とあるとおり、写生帖の描写を極力活かしている。本帖は貴重な記録と密度の高い絵を満載するものだが、本稿では『滿蒙』に収録されていない事項を中心に、ごく簡単に紹介するにとどめる(註24)。

『滿蒙』は「鮮満国境」から始まるが、写生帖では東京駅から出国までの様子や船上の風景で始まる(図33)。新潟から月山丸で清津に入り、図們江の国境を越えて五月二十五日に滿洲(開山屯)へ入った。行程図(図34)から日付と地名を手帆の表記のまま記すと、二十六―二十七日新京、二十八日吉林、二十九日ハルビン、三十日呼蘭、三十一日牡丹江、六月一日佳木斯、二日弥栄(移民村)、三日千振、七虎力、四―五日林口、六―八日ハルビン、九―十日黒河、十一日北安、十二日チチハル、十三―十五日ハイラル(海拉爾)、十六日滿洲

里、十七日ハイラル、十八―二十日新京。そして二十一日に奉天、二十二日に安東、二十三日に京城に戻り、釜山から金剛丸に乗船して二十五日に下関に着く。梅雨の東京に戻ったのは六月二十六日の夜であった。

「殆どスケッチブックそのまゝに」とは言うが、工場や発電所、大きな建物や広角でとらえた風景(図35)、警備の様子などは省かれており、時局に配慮したものと思われる。実際、黒龍江岸では「特務キカン頑として写生を許さず」との言葉も残している。また、『滿蒙』には本帖にない図があり、他からの切り貼りもあることから、写生帖は他にも存在したと思われる。

文字も多く、『滿蒙』に収められた以上の新鮮な印象が残されているのだが、紙幅の関係上ひとつだけ引用する。この旅の主目的だった千振の移民村の印象である。

六月三日 くもり



図35 写生帖no.12より
「北安郊外」



図33 写生帖no.12より
「五月二十二日ハレ」

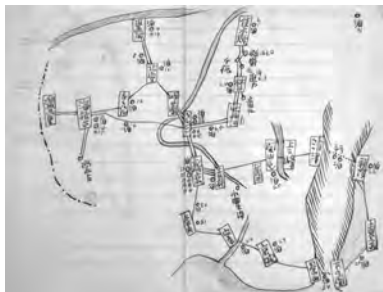


図34 写生帖no.12より

弥栄を発し千振郷に下車、
突如として寒し、

新潟区見学

松のや旅館小憩、水悪し

□口町長さん

午後の列車にて七虎力へ

□家駅下車、本部よりの

トラックを出張所待つ

おそろしく不潔□出張所

トラック扉こわれてゐる、コムバンドでとめる

一里余の小丘を越して走る、花盛り

兎、うづら飛び出つ、

満人の棺、骨散乱、

満州

寒さに対する認識は正

零下四〇、苦情を一ツも聞かず

乾燥してゐる、

内地へ旅して感冒にかゝると云ふ

□写生帖 no.13

背に「北陸」とあるとおり、福井県(芦原温泉、雄島、三国港)と石川県(和倉温泉、片山津温泉、山代温泉、粟津温泉、湯涌温泉、金沢)への旅の写生をメインとし、土肥温泉と東京近郊(奥多摩、有栖川公園、井の頭)の写生数葉が加わる構成である。北陸への旅では、和倉名物の奉燈餅や加賀名物の圓八あころ餅のラベルを貼付し、兼六園の八寸盆や、「二尺余」という和倉産の真



図36 写生帖no.13より「七尾まだら」



図37 写生帖no.13より「片山津/山代共同湯」

鱈の速写があるなど、食を堪能した様子である。また兼六園や九谷焼の色付けを写す図があり、和倉温泉のいで湯太鼓、七尾まだらや山中節にも取材しており、女性たちが踊る姿を描いた華やかな数葉もある(図36)。現地の手厚い接待を受けた、盛りだくさんの旅が想像される。

本帖については、昭和十六年の《版画浴泉譜 土肥》の下絵があり、「昭和十八年五月」の日付のある「有栖川公園」を含むことから、『図録二〇二二』では昭和十五―十八年頃としたが、今回改めて照合したところ、昭和二十七年に発行された『続統版画浴泉譜』の《芦原》と《湯涌》の下絵があるだけでなく、直接の下絵はないものの、『続統』の各図と一致する和倉、山代、山中、片山津に取材しており、山代、片山津については近い構図もあることが確認された(図37)。前年の昭和二十六年、千帆は『温泉』の「座談會 北陸温泉マンガ行」に参加しており(『温泉』については後述する)、本帖に記録された北陸の旅は戦後のもので考えられる。土肥についても同年の同誌に「土肥温泉」(山路閑古著・千帆画)の寄稿があり、本帖に残る土肥の図が戦後作の可能性もある。使用された時期については、なお検討を要する写生帖である。

□写生帖 no.14

スケッチブックではなく、罫線の入ったノートを使用している。表題のとおり三つの旅が記録されるが、彩色された頁が多く、罫線を意識させないほどに充実した図を多数収める写生帖である。

昭和十六年十月の裏磐梯への旅では、猪苗代、五色沼、小野川湖、檜原湖、川上温泉、中の沢温泉を訪れている。紅葉にはまだ早かったようだが、山道を歩きながら好きな野草を見だし、スケッチを残す(図38)。名前も数多く書き留めている。

山道に沢山ある

ぐみの赤い実

かめばしぶし

あぎのきりんさう

はゝこくさの白いもの

けんのしやうこの

赤味ある花

鳶もみぢ

空には美しいうろこ

雲ひろがる

芒の銀の穂

うめばちさう

下は一面の芒原

中の沢温泉の、誰もいない湯殿を描いた一図が印象的である(図39)。戦後の名作《浴場B》(昭和二十六年)の取材地は、あるいはここかと思わせる。

翌年の三月十一日には奥多摩の吉野梅林を訪れている。「快晴花四五分／川の北側既に満開」と書いており、戦中に心洗われる思いだったのではないだろう

うか(図40)。この時のスケッチから、『吉野梅林』と『奥多摩吉野梅林』の二作が生まれている。

同じ月の二十八日、恩地孝四郎、志茂太郎とともに軍道紙の紙漉場を見学している。行程は五日市からバスである。完成度の高い写生が十二図あり、鉛筆の上から墨で清書が施されている(図41)。戦中、木版画家にとつて欠かせない和紙が不足するなか、紙漉きへの関心はひとしおだったであろう。実際千帆は、紙漉きを学びながら、この時期自ら紙作りを試みている(註2)。自製は失敗に終わるが、本帖の記録はno.15とともに戦後の『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』に結実することとなった。



図40 写生帖no.14より「吉野梅林」



図38 写生帖no.14より



図41 写生帖no.14より



図39 写生帖no.14より

□写生帖 no. 15

紙漉きの図に始まる。「烏山」とあるので那須烏山の紙漉き場と思われ、表紙によれば昭和十七年四月の取材である。ただし、写生は二葉のみである。

ついで、同年同月の中国地方への旅が記録される。まずは岡山。同地出身の志茂太郎との旅だが、行程図に「志茂氏の差配 松岡氏」とあり、志茂が手配した案内人もいたようである。志茂の郷里（久米郡稲岡南村）に近い誕生寺を訪れているが、千帆は三年後、志茂とともにこの地に疎開することになる。その後奥津温泉、大鈞温泉、津山、湯原温泉、島根県に入り温泉津温泉、湯抱温泉、海潮温泉、松江、鷺の湯温泉、三朝温泉を巡っている。この旅でも変わらず湯を楽しみ、本帖から『続版画浴泉譜』の三図が生まれている。志茂とは前年に『版画浴泉譜』を共作した仲であるから、道中次作の構想についても語り合ったであろう。温泉津を「夢二好みの古い港町」と書き、洋風建築の共同浴場を鮮やかに描く頁が印象深い（図42）（註26）。また松江では、岩坂の出雲民藝紙工房を見学している（図43）。

温泉三昧の旅をしつつも、時は戦中である。十八日の松江では空襲警報に遭い、十九日には三朝温泉で東京の空襲を耳にし、志茂が中野の自宅に電話して安否を確認している。千帆の家もまた中野にあった。

宿の女中ラヂオにて東京空襲の報ありしを語る、

車中新聞を見てや、愁眉を開くものあり、

上井より三朝岩崎投宿、

正午又空襲警報あり、

午後志茂氏中野に電ワかけて様子判明する、（註27）

同じ年の十一月には湖北を訪ねる。拾える地名は飯の浦（長浜）と塩津のみ。鉛筆とペンによる走り描きの写生が四葉しかないのは、他にも写生帖が存在したということだろうか。



図43 写生帖no.15より



図42 写生帖no.15より
「温泉津共同浴場」

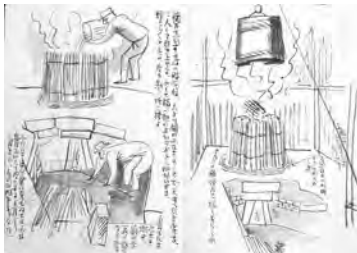


図44 写生帖no.15より

翌年二月、埼玉県小川町の製紙指導所を訪ねる。詳細なスケッチが残り（図44）、同所の「久世氏」から聞いた話も書き留めている。和紙を代用品として生産していた戦時下の製紙所の様子が垣間見える。小川町の和紙は、かの風船爆弾の開発・製造にも関わっていた。

小川町の抄紙は目下温床用（油加工）《四枚がけ》と軍用のもの（この分少し小さく長型）

材料は統制会社より渡る、パルプ粉砕やも分業

千帆は十七年から翌年にかけて（写生帖 no. 14 および no. 15）、四か所で紙漉／製紙を見学したことになる。これらの見聞は、第五回新文展に出品した佳作

《紙漉場》にも結実したが、同時にいかに千帆が画材の問題から気を離せない状況にいたかも想像させる。

□写生帖 no. 16

昭和十八年四月の会津への旅に始まる。湯の上温泉と熱湯温泉を巡る二泊三日の旅だが写生は多く、緻密に描かれた図も少なからずある(図45)。またこの旅でも湯を楽しみつつ、土地の暮らしの細部に目を凝らしている。たとえば会津若松では次のように書く。

若松辺り農夫馬を曳きて働く、田甫にてタイ肥を
処理してゐる農婦を所々に見る、山畑に大勢焚火
してあたつてゐる、雪ふるけしき、田の草を焼く、

未だ女の人毛布を皆着てゐる、町の人は足駄穿きなり、
新湯の露天湯吹雪の中て入る、夕闇迫り裸電燈

にて川の音をきゝ乍ら大によし、少しぬるいがいかん、

内湯もあり、川所々に潭をなし途中絶景の所

あり、寝ぎめの床を想はせるものあり、

水の色美し、

駅より五六町あり、

同年の五月下旬には、九州と四国を広く旅している。行程図から、熊本県の内牧温泉、阿蘇、栃の木温泉、湯の児温泉、鹿児島県の指宿温泉、霧島温泉を巡り、フェリーで愛媛県に入つて八幡浜、松山を訪れ、高浜から帰京したとわかる。熊本で雄大な山景を描く(図46)他、多くの言葉も残し、天候や景観、目にふれる花々、温泉場や湯のありよう、人々の風俗などを、忘れまいとするかのように書き連ねている。

同じ年だろうか、十一月に長野を訪れる。目的は鹿沢温泉と沓掛温泉である。



図45 写生帖no.16より「熱塩／笹屋の浴場」



図46 写生帖no.16より「山頂より見た／杵島岳」

旅程については簡単な行程図があるのみだが、ふたつの温泉や角間峠、烏帽子岳を望む烏帽子見橋の写生が残り、いずれも力の入ったものである。「保福寺峠」と題された頁には、目にも耳にも鮮やかな旅の印象が綴られている(註28)。

峠の下り途、田を隔てゝ小高い丘の上

山羊を曳いた爺さん保福寺峠の下の村迄

柱太く土壁燦る、障子の灯の色あたらゝか、秋の夜

静かに秋の夜の更けるけはひ

共同浴場の人の声賑か 下駄の音

湯の音雨かと幾度も心配させる

山は紅く庭の樹々も秋色 屋根の上に散る紅葉

廊下階段に吹きこむ木の葉

渋柿枝もたわゝに赤く熟す

優れた写生を数多く収める本帖からは、『続版画浴泉譜』が七点も生まれている。なお本帖には、「廿四、十一月／金川」「廿四十一、十六知和」などと記録のある風景画も残り、疎開して以来戦後も五年ほど滞在していた岡山(後

述)で、余白を使用したと考えられる。

□写生帖 no. 17

岡山時代(後述)を経て、帰京した後の写生帖である。十一月の南紀、山陰、関西への旅の記録を収める。訪れたのは和歌山県の白浜、龍神、椿、鳥取県の東郷、兵庫県の湯村、城崎、有馬など、いずれも温泉地である。優れた写生を数多く含み、『続続版画浴泉譜』が五点生まれている。とはいえ白浜では、南国調の海的美観や湯を楽しむつつ、「都会 大阪勢力の雑音旗団体客引群 社用 族写真族／アベック新婚族／大商店の招待旅行族／赤いリボン／車中より酒 もり」と、戦後観光地化する温泉場への嘆きを吐露している(図47)。椿温泉でも「和風洋風混合して次から次へと建てた家／椿温泉の発展過程を表して雑然」と書き、湯村においても、次のような手厳しい評を連ねている(図48)。

川を前に山を背にした田舎の湯の街雑然

共同湯夜の賑やかさ子供の声 湯気の中に十五日の月

活動小屋のビラ橋の上まで煙の様な湯気

温泉を利用して川岸で

洗濯炊事

大阪のラジオ万才調

浴槽の底より

照射するネオンの

色悪趣味の極致

温泉採点零

狭い街中を

大いバス通る

「温泉採点零」と書きつつ、湯気に月を見いだして自らを慰めるらしい千帆

である(註29)。なお本帖には年記が見当たらないが、『続続版画浴泉譜』や『温泉』との関連を考慮するなら、昭和二十六年と判断するのが妥当であり、後述する no. 18、19、21の後に置くべき写生帖であった。ここに訂正したい。

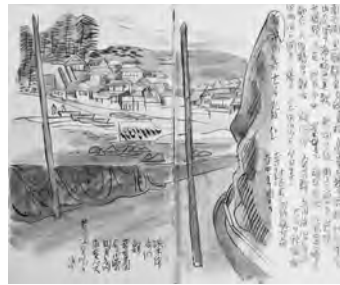


図47 写生帖no.17より「白浜」



図48 写生帖no.17より「湯村」

□写生帖 no. 18

戦後間もない時期の写生帖である。千帆は戦争末期の昭和二十年四月、志茂太郎の郷里岡山県久米郡稲岡南村山ノ城に妻とともに疎開した。自身にも妻にも縁のない土地だったが、既述のとおり昭和十七年に訪ねたことがあり(写生帖 no. 15)、親しみはあったと想像される。東京中野の家を空襲で失った千帆は、終戦後五年近くを岡山に過ごすことになり、本帖はその時期のものである。昭和二十二年から翌年にかけて県内に取材し、地名(あるいは集落名)としては北庄、弓削、筒井、大池(図49)、野呂、栗林公園、津山衆楽園(図50)を拾うことができる。三十冊のなかでは異質な帖と言え、千帆がしばしば描いた戯画的な人物が登場せず、文字情報もわずかであり、絵に徹している感がある。彩色がひときわ鮮やかである。帖中にただひとつ記された歌が、当時の千帆の心境を代弁するようである。

伐られたる巨き赤松大の字に道をふさげり即ちこえゆく



図49 写生帖no.18より
「22、2、13 大池」



図50 写生帖no.18より
「津山衆樂園／四月三十日」

□ 写生帖 no. 19

昭和二十五年五月の奥利根への旅と、同年六月の法師温泉への旅を中心に収める。本帖が岡山から東京に戻って最初の写生帖と思われる。また奥利根行は日本温泉協会の機関誌『温泉』(註30)の「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」の取材と考えられることから、戦後、メディア後援の大規模な旅が始まったことを示す記念すべき写生帖と言えよう。最初の頁に「今日好日」とあり、自由に旅のできる日常が戻った喜びを伝えるようである(図51)。奥利根行では湯檜曾温泉、宝川温泉を訪ねている。座談会の取材とすれば、池部鈞、宮尾しげと同行したか。湯檜曾では新緑を楽しみ、鮎だろうか、若楓を添えた川魚を写している。宝川では清流に面した露天風呂で、やはり新緑に映える清澄な湯を堪能している。そのあとに「五月十三日夕刻 沓掛 追分 五月廿九日」と付記のある風景が各一図あるが、一連の旅かどうかはわからない。

法師温泉行は、三十冊の写生帖から判明するだけでも四度目である。便利とは言えない地であることを考えるならば、よほど好きだったのであろう。こちらも瑞々しい新緑が写され(図52)、宿の二階から窓外の木々を望む眺めが、

左右反転して第九回日展出品作『温泉宿二階』に結実している。

本帖の末には、ステンシルと推測される植物の図がある(図53)。晩年、紙版を併用するようになる千帆の技法を考える上で興味深い。また帖の中央に折れ跡が残り、半分に折って携帯したと推測される。ポケットに突っ込み、絵心を誘われるたびに取り出す千帆の姿が彷彿とする。



図51 写生帖no.19より
「昭和廿五、／五、八九十、奥利根行」



図53 写生帖no.19より



図52 写生帖no.19より 「法師別館より」

□ 写生帖 no. 20

昭和二十七年三月の南紀への旅のスケッチを収める。この旅も『温泉』のた



図56 写生帖no.20より



図54 写生帖 no.20より 「鬼ヶ城の大洞窟」



図55 写生帖no.20より 「上の瀨」

めの取材と思われる(座談會 南紀の湯どころ)、同行は池部鈞、宮尾しげを、小野佐世男。主な訪問先は円月島、那智、文殊の湯、潮岬、勝浦温泉、瀨峡、湯の峰温泉、川湯温泉である。温泉のほか千畳敷や三段壁、橋杭岩、獅子岩、鬼ヶ城の大洞窟、浦島忘帰洞などのダイナミックな海景が残るが(図54)、概して絵・文字ともに荒々しく、彩色はほとんど見られず、まとまった文章もない。また青ボールペンが使われるのは、戦後から晩年にかけての写生帖の特徴

である。ただし、『統続版画浴泉譜』に収められることになる温泉と瀨峡の景に、千帆らしい生き生きとした筆致を見る(図55)。また終盤に「版画」と題された頁があり、『統続』を構成する「山代」や「芦原」「龍神」など、いくつかのタイトルが列記されるのは制作計画あるいは出品計画であろうか。

版画 ◎高宮の蜚 ○白骨黄葉

△山代 浜名湖斜陽

△芦原 ○宝珠花の風 穂高新雪

△竜神 ◎湯原月明 焼岳

余呉湖の雪、

◎阿蘇根子岳

さらに帖末、紀州雛や土地の菓子・煎餅や最中などがいくつも採録されているのは、六十代半ばになっても変わらない、千帆らしい眼差しのありようである(図56)。

□写生帖 no.21

昭和二十六年十月の長野県・岐阜県への旅の写生を取める。表紙に行程図があり、白骨温泉、中の湯温泉、上高地、平湯温泉を訪ねたことがわかる。本帖からは『統続版画浴泉譜』の四点が生まれているが、下絵はいずれも構図・色彩ともに完成度が高い(図57、58)。冒頭に「白骨の山は黄、紅、岱、緑、深緑」とあるとおり紅葉の盛りだったと見え、まさに錦秋の写生が続いて印象的である。「岱」は代赭の意であろうか。上高地では、記念写真を撮る若者たちの群れやバンガローに変貌した宿に驚き、平湯ではバスの開通によりパチンコ屋が進出して「由緒ある山の農村に汚点／惜むべし」と嘆く(註3)。それでも白骨では「山は静寂／白昼／瀬の音ばかり」と変わらぬ静けさを楽しむようであり、また快晴の中の湯では次のように記して、秋酣の温泉場のよき風情を伝え

ている(註32)。

日南(向の意か)ポッコ椽側 本をよみ昼寝によく静養 都会の雑音を忘る
白樺の黄葉食卓に飛ぶ

鬱気溪に湧く

露天湯 青空の下 深緑の湯 バスより見へる／木の間かくれ旅舎見ゆ

安房峠の登り口

熊野毛皮の敷もの

茸山の幸

溪に吹込み／吹上げる落葉甚だ興あり

いろいろの落葉

帖末には、鉛筆による珍しく長い文章が残されている。「第一次取材旅行を終りました」で始まり、今回の旅と『版画浴泉譜』の制作予定、十一月中旬に「紀州方面への第二次行」を決定したこと(写生帖no.17の記録がそれにあたるか)、『閑中閑本』の進行状況への言及があり、志茂太郎に宛てた手紙の草稿と考えられる。この中で千帆は、団体客が殺到し、パチンコ屋や娼婦が出現して激変した温泉地が絵にし難いことを訴え、「事情御賢察下さい」と書いている。



図57 写生帖no.21より「中の湯野天風呂」



図58 写生帖no.21より「平湯温泉」

「予算」という物言いや、宿代と交通費の高騰を理由に弁明する場面もあり、志茂が出資していた事実が示唆される。また戦後、人も風景も変わり、千帆の好む静かで質素な温泉地が少なくなつてゆくなかで制作された、『版画浴泉譜』の背景も物語つて貴重である。

□ 写生帖 no. 22

昭和二十八年三月の北海道・青森県への旅の写生を収める。訪問地は表紙に明記され、また列車の時刻や発着地、宿泊・昼食の場所を列記したリストの青焼が貼り込まれており、旅程の詳細が判明する。青ボールペンで風景や土地の人々を描いた頁が大部分であり、それが本帖の印象を決定づけている。

三日に「第十一青函丸」で函館に入る(図59)。湯の川温泉で「三十年前の記憶全然なし」と書くのは、写生帖no.7に残された昭和六年の旅のことであろうか。翌日、昆布駅から昆布温泉への交通手段は馬樞である。ニセコでは雪に覆われた雄大な山々にふれてニセコアンヌプリや羊蹄山を描き、長万部から洞爺温泉を巡った後、噴煙を上げる昭和南山にも感服して何図か残している。また登別の大湯沼では「廿年前と変りなし」と書くが、地獄谷では「記念写真や大勢／一列に並んで客をまつ、／この並び方整然と／しておもしろし」と、現代風俗にも好奇の目を向けている。七日に「白老のアイヌ酋長／宮本老夫妻特に盛装して苦小牧まで同乗」したとあるのは(図60)、昭和六年の旅での知己であろうか。その後定山溪を経て札幌で『温泉』の座談会をこなし(座談會 道南の温泉―日本風土漫畫會)、青森の浅虫温泉に一泊して帰京している。

なお本帖にはふたつの新聞記事が添付されている。ひとつは四人の漫画家の函館来訪を知らせる新聞記事で、この旅が池部鈞、宮尾しげお、小野佐世男との同行であり、また日本温泉協会の幹旋であったことが語られている。いまひとつは、浅虫温泉での座談会の新聞記事である(註33)。いずれもどの新聞かは

未調査であるが、千帆の旅の少なくとも一部が、複数のスポンサーに支えられていたことを示唆して貴重である。

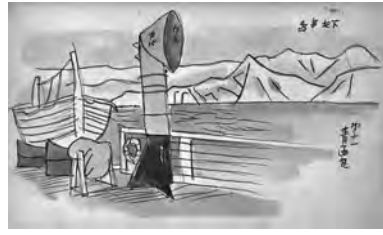


図59 写生帖no.22より「第十一／青函丸」



図60 写生帖no.22より

□ 写生帖 no. 23

昭和三十年の写生帖。はじめに、年記はないが同年と目される一月の宮城県・岩手県への旅の記録があり、作並温泉、鳴子温泉、瀬見温泉を巡っている。三月末には長野県を訪れる。同行は池部鈞、宮尾しげを、安斎秀夫。目的地は浅間温泉、湯田中温泉、戸倉温泉である。断片的な写生が多いが、美鈴湖からアルプスを遠望する、青ボールペンに淡彩の軽妙な図も残る(図61)。立ち寄った角間温泉では「前に来た時の印象より／づつと小さいものだったのに驚き、別所温泉でも「昔より明るくなつてゐる／湯緑色に見へる」と綴り、時の流れを痛感する千帆である。

四月には青梅の「ふじ家」や飯能の竹寺に遊んでいる。竹寺では精進料理を堪能して「猷立表甘種／實際はそれ以上」とメニューをすべて記録し、品書きも添付しているのが千帆らしい。八月には明星ヶ岳の大文字焼を見学し、箱根

小涌園も訪問している(註34)。

八月には、三月の旅と同じメンバーで新潟県の大湯温泉を訪ねている。栃尾又では「廿五年ふり／変つてない」との感想を述べる。この時大湯の野天湯を描いたスケッチから、同年の木版画《露天湯》が生まれている(図62)。

最後に、やはり年記がないがおそらく同年の宮城県、山形県、新潟県への旅が記録され、鬼首温泉、肘折温泉、湯田川温泉、瀬波温泉、高瀬温泉への訪問が判明する。本帖には、概して簡略ながら多くの写生が残され、『続続続版画浴泉譜』の作品六点が生まれている。終盤にこけしとこけしの作業場のスケッチがあり、『閑中閑本 第十六冊 鳴子こけし帖』にも結実している。さらに、『温泉』に関連記事が多いことも注目されるが、それについては後述する。



図61 写生帖no.23より



図62 写生帖no.23より「大湯野天湯」

□ 写生帖 no. 24

昭和二十七年と二十九年に使われた写生帖。前半と後半に二十九年のスケッチが分かれ、間に二十七年の記録がはさまる構成になっている。二十七年は十月に群馬県を訪れ、妙義、磯部温泉、榛名、薬師温泉、伊香保温泉、観音山遊



図63 写生帖no.24より「湖畔亭」



図64 写生帖no.24より「榛名神社／巫子舞」

園地などを巡っている。榛名湖畔に取材した宣材のような図が残り(図63)、榛名神社では巫女の舞も見学している(図64)。この旅も、『温泉』の「座談會 群馬の温泉を語る」の取材であつたと考えられる。また千帆が挿絵を描いた新聞あるいは雑誌のシリーズ記事が貼り込まれており、タイトル(「榛名湖」「妙義山」「磯部温泉」「榛名神社」「薬師温泉」「伊香保温泉」「観音山と遊園地」)が写生と一致する。掲載紙(誌)については未調査であるが、少なくともふたつのメディアの取材を兼ねていたことになる。

昭和二十九年には、十一月に福島県と宮城県を訪れている。同行は池部鈞、宮尾しげを、安斎秀夫。目的地は小原温泉、鎌先温泉、飯坂温泉、穴原温泉、天王寺温泉、土湯、東山温泉、岩代熱海温泉である。この旅もやはり『温泉』の「座談會 みちのくの湯の旅」の取材と思われる。青ボールペンによる簡略なスケッチが大半だが、『続統続版画浴泉譜』の三図に関連した言葉が残り、鎌先温泉については次のように印象を書き連ねている。

古風な家、高層、入り混り窓、椽交錯、石段、

湯治場風景、共同湯、自炊用野菜の店、媼さん、

頬かむり、後は岨につゞく、秋深み、鳥の声、

障子に柔かな陽、名物のさわし柿、

バス便あり、

ケーブル、

近くに石膏採取場、製鹽所あり、

共同湯、木造、

昔ながらの風情がよほど喜ばしかったのであろう、鎌先温泉のことは別の頁でも「この湯古風にて良し／家の混んだ所フク雑／野菜うりの媼さん／居る、自炊客／多し」と言葉を重ねている。

□写生帖 no. 25

昭和二十七年三月の「伊東の市場の浜」と題したスケッチから始まる。葛見神社の大樟や共同湯にも取材しているが、短い滞在あるいは日帰りだったか、写生は数葉のみである。以後多くの図を見るが、ランダムに使われたようで、いくつかの旅が入り組んで混在している。背文字と内容から判断すると、昭和三十三年六月の青森県への旅(岳温泉、湯段温泉、落合温泉、板留温泉)(図65)、同年十二月の箱根への旅(姥子温泉、宮の下、明星ヶ岳、木賀温泉、芦ノ湖)、時期不詳の北海道への旅(釧路、阿寒湖、温根湯温泉、川湯温泉、摩周湖)(図66)の記録である。このうち青森の旅は『温泉』の「岳と湯段、落合と板留」のための取材と思われる。スケッチは青森・箱根・北海道ともに良作があり、『続統続版画浴泉譜』に七点が結実している。覚え書きも多く、各温泉の印象を綴り、目にした植物の名を列記するなどしている。とりわけ青森県の岳温泉については、若い客が多いなかにも古風が残って心に響いたか、長く言葉を連ねている。

山に紅いうつぎ類咲く

日曜日で青年男女沢山来てゐる、

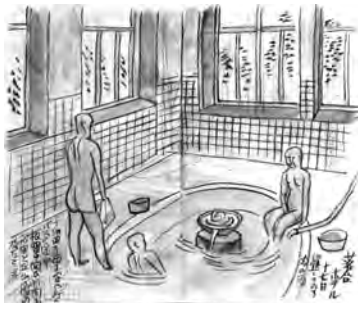


図65 写生帖no.25より「落合ホテル」



図66 写生帖no.25より「摩周湖展望台」

夕方皆引上げる元気でよし
道埃だらけ ガタガタにて散々に
もまれる
宿の軒下三段になつて燕の巢、新旧キツシリ
並んでゐる 燕沢山飛んでゐる
途中の高原よし
岩木神社の華表あり、
頂上480M、残雪少し、
弘前より見た形の方がよし
山菜、
古風な型の宿、浴舎を中に
囲いたつ、浴舎ペンキぬりてよろしからず
浴舎より流れる湯の道おもしろし
なお本帖には、旅と旅の間に国立競技場のトラックや観覧席をとらえた図、
聖火台とおぼしき図を描いた頁がある。国立競技場は昭和三十三年の竣工であ
るから、同年まで使われたと考えられる。

□ 写生帖 no. 26

昭和二十七年一月の大島への旅の記録に始まり、三十二年四月のスケッチ
「立川陸橋上より」、同月の塔の沢温泉と湯本温泉のスケッチ、十月の竹寺のス
ケッチ、十二月の熱海梅園のスケッチ、三十三年一月の青梅の「ふじ家」を描
いたスケッチを収める。三十二年以降のスケッチは、他の写生帖と同様、必ず
しも日付順には並んでいない。他、秋田民踊に関する雑誌の切り抜きと関連ス
ケッチがあるのは、昭和三十四年の新日展出品作《民踊》の準備と考えられる。

大島へは、池部釣や宮尾しげをらと
同行したと思われる。塔の沢温泉は、
取材日が一致するので、今回も『温泉』
の「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり」のた
めであつたろう。熱海では、熱海梅園
の写生に茂木惣兵衛が寄贈した梅園の
起源を付記している(図67)。また青梅
で書いたと思われる次のような文章か
らは、老いを意識せざるを得ない千帆
晩年の心境がかいまみえる。



図67 写生帖no.26より「熱海梅園」

劣へし吾耳にさへもろもろの禽の声に朝早く起覚む昨夜遅くまで三時頃迄
眠れず、それでも七時に雨戸をくる、東天既によあけ谷の木々に陽さす
くるみの巨木二三あり椽前の谷楓橋老木数株、

本館の軒に紅梅咲く、

本帖には整った図もあり、『続続続続版画浴泉譜』の下絵もあるが、粗い描
きぶりや判読しがたい文字が散見され、白紙も多い。三十冊の写生帖のなかで
は昭和三十三年の年記が最も新しく、文字や絵の乱れから判断しても、最晩年
の写生帖と考えられる。

□写生帖 no.27

本版で野草を摺刷した和紙を表紙に用い、背に「京都」と記した写生帖。旅の行程図はあるが略語のため拾えるのは「円山」「祇園」「桂」くらいである。日付のあるスケッチに昭和二十九年四月二十六日の「鷹ヶ峰へ行く路」「光悦寺の茶室の内の一ツ」「鷹ヶ峰にて」があり、日付のないものに「了寂院光悦日豫居士（光悦の墓石）」「祇園夜桜」がある。光悦を偲ぶ旅だったようだが写生は十図ほどしかなく、過半は白紙である。彩色のあるものも走り描きに近く、粗い印象は否めない（図68）。他の写生帖と同様裏表紙に住所と氏名を記すが、本帖では氏名に添えて「東京都杉並区上荻窪一の36／渡辺医院内」とあるのが注目される。この頃千帆は体調を崩して入院していたのだろうか。これまでの履歴には見当たらず、引き続き調査が必要である。



図68 写生帖 no.27より 「29.4.26 光悦寺の茶室の内の一ツ」

□写生帖 no.28

前半に昭和二十九年の近郊スケッチがあり、後半にだるまの制作工程のスケッチがある写生帖。終盤の十枚ほどは白紙である。近郊スケッチの季節は五月、モチーフは千川堤の葉桜、八成橋の菜の花（図69）、善福寺池。その後相模湖が描かれるが、「30.晩夏」とあるので別の季節であろう。いずれも青ボールペンで線描きし、水彩で彩色するのは後期の写生帖に通う特徴である。後半は、埼玉県越谷町大里で取材しただるまの制作工程の覚え書き。寸法や素材（色材、紙）、木型の様子、工程の詳細などが絵と文字で綴られている。自ら撮

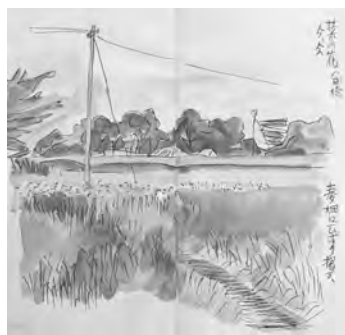


図69 写生帖no.28より 「菜の花」

ったとおぼしき写真が貼り込まれ、制作者の名前として「中村千代松」と書き残されている（図70）。だるま工房を訪ねた時期は不明だが、本帖の表紙に「近郊 だるま／1954.5」とあり、同年と考えてよいだろうか。この取材は昭和三十三年の『閑中閑本 第二十一冊 張子だるま帖』に結実している。

□写生帖 no.29

鉛筆による大まかな風景写生に始まり、数枚目にダム建設と学校移転に関する紛糾、「国道工事」「法師、大浴場の屋根修繕計画 31、夏」といった覚え書きがある。詳細は不明だが、近代化して変わりゆく風景への関心と嘆きを伝えるようである。ついで、湯島温泉（群馬県）を描いた年記のない十一月のスケッチがある。後に昭和三十一年二月に大倉山公園（神奈川県）の梅林を描いたスケッチが続くので、湯島行はその前年であろう。

次に記録されるのは宮城県、山形県、福島県を巡る十一月の旅である。晩年の写生帖には珍しく詳しい行程図があり（図71）、熱湯温泉、遠刈田温泉、峨々温泉、青根温泉、秋保温泉、作並温泉、天童温泉、上山温泉、野地温泉、五色沼、桧原湖などを訪ねている。充実したスケッチも数多く残している（図



図70 写生帖no.28より

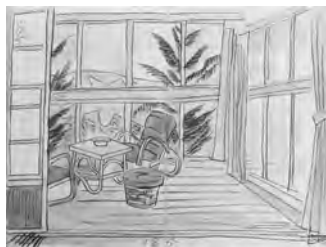


図73 写生帖no.29より



図71 写生帖no.29より



図74 写生帖no.29より
「秋田大湯」



図72 写生帖no.29より
「二十日/天童温泉場/バス終点」

72)。同行は宮尾しげを、他に「本名洋一氏」「佐藤孝也氏」の名もあるが不詳である。青根では「こけし工場」に足を運び、仙台では「炬バタは天江氏の酒バ、なし」などと書き、順調な取材ばかりではなかったことや、工事による足止めがままあつた事実も残されている。年記がないが、前後を考えると昭和三十一年の旅と考えてよいだろう。

昭和三十一年十二月二十日の浦安のスケッチをはさんで、三十二年五月の猿

ヶ京温泉(群馬県)への旅が続く。同行に「今村氏」とあるのは今村秀太郎だろうか。天狗の面の絵とともに、四首の歌が記されているので紹介しておく。

迦葉山の大きな天狗の赤き面その鼻いよいよ高くあるかな

上州の山の溪間の橡の樹は皆大木にして許多花咲く

五月晴の赤城の山の肩の辺にかすみて紅く山の雪見ゆ

漸くに芽ぐみし桑の稚き葉に初夏の雨柔く降る

猿ヶ京を記録した箇所には湯宿「桑原館」の平面図が貼り込まれた頁があり、裏面に制作年不詳の《山の見える部屋》の下絵があることから(図73)、この作品は昭和三十三年頃、新緑の猿ヶ京に取材したものと推定することができる。本帖にはさらに、同年(か)六―七月の宮城・盛岡・秋田・青森・福島県を巡る旅が記録されている。旅程の覚え書きによると鳴子温泉、平泉、湯瀬温泉、十和田湖、酸ヶ湯温泉、下風呂温泉、大湯温泉、那須八幡温泉を訪れている(図74)。

本帖には遠近合わせて六つもの旅が収録され、『続続続続版画浴泉譜』の三点に結実しているが、使われているのは過半までで、終盤の二十五枚ほどは白紙である。文字では、浦安のスケッチに添えられたものが印象に残る。いつもの千帆調で、目にふれたものを列記して詩のようである。

海苔干し場/貝を剥きある女連/風よけにかくれて、/新造船五色の/吹流し、坊主経よむ、/さしみのつまの青いもの/煮ると青くなる/めもさめるばかり/海底の貝を/さらへる籠/長い木の柄/三尺ばかり/川口の小家/皆くろいトタン/剥いた貝のすてバ/石灰工場、/江戸川放水路/若い衆ヒナタボツコ/爺さんは南ボツコ、/好天にてかすみて/富士見へず

□ 写生帖 no. 30

表紙に大きく「九州」とあり、訪問地が列記される写生帖。同行は池部鈞と

宮尾しげを、行程図によれば佐賀・長崎・熊本・大分県の順に巡っている。行程図にはまた、この旅が宮尾の川柳仲間である長崎の川柳家・池田可宵の肝煎りだったことが記され、さらに「仕事の事 旅行中にもいろいろあつて／まともらず、その上去来忌の為に色紙など廿枚／無條件にて奉仕する／最初宿にてかくべき色紙など30枚宛かいてみやけ（土産・引用者）にもつて行く」とも書いていて、アテンンドの返札としての色紙のあり方や、この場合は不首尾に終わったようだが旅先で次なる仕事が発生していた状況をうかがわせる。

本帖は彩色が施されず、終始ほぼ青ボールペンで描かれており、絵としての見どころは多くない。武雄温泉では「この丹塗の楼門／ネオンをつける／赤青俗悪」と批判し、温泉街での拡声器による呼び込みの声にも耐え難い様子である。長崎では爆心地を訪れ、「この辺一帯に／まだ荒涼の／感あり、／埃っぽい」と印象を綴るが、原爆資料館では「記念写真、／エハカキ屋など／沢山出てゐる、／資料は原爆の／放射熱に当りし／瓦、鉄などの／変形を並べ／図解写真／多く／死人などの／凄惨なもの一切なし」と、観光地化への疑問を呈している（図75）。総じてこの旅における千帆は批判的で、別府でも、夜の灯は美しいが「突堤の先端の／酒のネオン不可」と断じている。わずかに島原の白土湖では、清冽な水に心を慰めたようである。

本帖の末には、写生帖no.27と同様「渡辺医院内」と記されている。既述のとおり青ボールペンを専らとし、乱雑な印象もあり、やはり体調を崩して入院した一時期があつたと推測される。なお、表紙の数字に欠がありno.30としていたが、この旅も『温泉』の「座談会 北九州温泉めぐり」の取材と考えられ、昭和

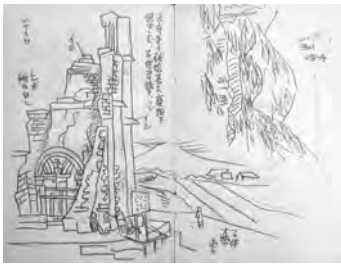


図75 写生帖no.30より

二十八年十一月に決行されたと判断できる。よって正しくはno.23—29より前に置くべき写生帖であつた。ここに訂正したい。

■写生帖から見えてきたこと

ここまで写生帖三十冊を概観し、前川千帆の年譜を補完し得る様々な出来事——とりわけ、小型のスケッチブックであるから当然ながら、旅の記録の数々とそのあらましを確認してきた。関連作品についても多くを特定するに至り、具体的には一枚摺、連作『版画浴泉譜』、同『閑中閑本』、雑誌の仕事に大別することができ、一枚摺では、制作時期や取材地が判明した作品も少なからず見いだされた。またごく一部ながら引いた文章からは、古風で質素な温泉への好みや、湯をとりまく自然と名もなき人々を温かく見つめる観察者としてのありかたも看取された。

言うまでもないことだが、写生帖に圧倒的に多く残されたのは、よくもこれだけ、と思わせるほどの温泉への旅であつた。そしてそれらは、ライフワークである『版画浴泉譜』に密接に関連していた。全百図のうち、写生帖に何らかの関連するスケッチが残るものは、実に五十八図を数えた。三十冊に残された旅（東京近郊を除く）は少なくとも七十を数え、そのほとんどが温泉に関わり、『浴泉譜』が正しく温泉三昧の日々から生まれたものであることが確認された。と同時に、戦後は近代化と観光地化により激変する温泉地への嘆きや絵にすることの難しさがたびたび綴られ、若き日に漫画家として最新風俗を活写していた千帆が、次第に現実と理想とのはざままで制作に悩むようになる姿もありありと観察された。

詳しくはふれなかったが、いまひとつのライフワークである『閑中閑本』とも繋がりが見られ、全二十七作のうち九作に関連するスケッチが見いだされ



図76 写生帖no.3より

た。『浴泉譜』と異なり『閑本』では取材時と時差のある例がままあり(註35)、各冊の構想を練るなかで、過去の写生帖に題材を求める千帆の姿が想像された。また『閑本』は岡山時代に第一―第七冊が手がけられたが、うち第三、四、六冊は、写生帖あつてこそ成立したものである。『第二十三冊 富士景観帖』など、複数の写生帖から図を抽出してまとめた例も数多くあり、写生帖が貴重な「ネタ帖」として機能したことがわかる。

こうした木版画、あるいは雑誌の挿画との関わりは、写生帖の造形のありようにも影響したと考えられる。千帆のスケッチは、基本的に陰影のない線画である。人が描かれるとすれば、漫画家千帆を彷彿とさせる戯画調であり、風景や風俗も軽妙な線描を主としている。そして鉛筆による速写に墨やペンで上描きし(図76)、一部に彩色を賦するのが多くの写生帖に共通する手法であつた。最初の大まかな描写から簡潔な線あるいは形を掬い、構図をまとめてゆくのは漫画家の作法とも言えるだろうが、木版あるいはイラストを想定した絵作りでもあつたろう。清書は帰宅してからの作業だったかもしれないし、後年に施したこともあつたかもしれない。

関連作品をめぐるもう一点述べたいのは、旅の同行者とその背景である。

既述のとおり千帆は昭和十年頃に漫画家の看板を下ろし、以来創作版画をメインに活動したが、写生帖から判明する限り漫画家時代の仲間と旅することがほとんどであつた。最もよく組んだ池部鈞・宮尾しげをとの旅は、写生帖から確認できるだけでも八件を数える(註36)。そしてそれらの旅の多くは、漫画家たちの温泉巡りとしてメディアが後援するものであつた。雑誌『婦女界』(婦女界出版社)や『旅』(日本交通公

社)の企画があり、特に頻繁だったのが戦後『温泉』(日本温泉協会)が設定した取材旅行である。千帆が参加した旅中の座談会や旅行記を『温泉』誌上に探したところ、昭和二十五年七月の「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」から三十二年十二月の「岳と湯段、落合と板留」まで、二十六件に上つた。そのリストに関連する写生帖と『版画浴泉譜』の作品を加えたのが表2である(註37)。戦後の写生帖の多くが『温泉』と繋がり、また少なからず『版画浴泉譜』に結実していることがわかる。各冊の概要で述べたとおり、写生帖の時期と順序は判断が難しいのだが、『温泉』の記事の順に合わせると自然に並ぶ感があり、現時点では空欄となっている昭和二十八年の「山陰の出湯を尋ねて」や三十一年の「座談会 宇奈月、平湯、下呂」についても、失われた写生帖の存在が想定される。版業を軸とすれば『浴泉譜』のために旅をしたと考えがちだが、『温泉』の企画から『浴泉譜』が派生した、つまり副産物という面もあつたことは認識されてよい。創作版画家が経済的に恵まれず、それだけでは生活できなかったことは千帆ほどの作家でも同様であつた。今回写生帖no.21に見るとおり志茂太郎の出資も明らかになったが、漫画家としてメディアに登場することは千帆にとって貴重な収入源であり、創作版画の仕事にも資していた事実を指摘しておきたい。

■回想の温泉―連載「温泉風物」と写生帖

いまひとつ、『温泉』との照合を進めるなかで注目された仕事を紹介しておきたい。最晩年の三年間、昭和三十三年―三十五年の連載「温泉風物」である。画と文を手がけた温泉案内であるが、すでに老境に入った千帆はもはや旅にでることなく過去の旅に取材している。近年の旅もあるが、多くは近代化せず、いまだ路線バスも観光バスも通っていない温泉地をとりあげ、湯に入ることと

酒を飲むことしか楽しめない湯場では、下戸の自分は退屈極まりない、などと自嘲しつつも楽しげに語っている。写生帖から判断する限り、千帆の大規模な旅は昭和三十二年までであり、連載はそれに代わるように始まるのだが、没後刊行分を除いた三十一本のうち、十九本に写生帖との関連が見いだされた(表3)。写生帖を参照した形跡のないものはほぼ漫画調の人物に限られ、使用率は高い。たとえば第二十六巻第九号の「法師」では写生帖 no. 4 にスケッチを採し、挿画に「まだ改造されない頃の法師の浴場」と記している。第二十七巻第八号の「上諏訪」の場合は、三十年以上前の写生帖 no. 1 にまで遡っている。とはいえ結びが生じるケースもあり、写生帖 no. 13 に材を求めた第二十八巻第十号の「山代」では、同温泉が「今も尚奥床しい古風を守つて」おり、それゆえのリピーターが多いと綴つた後、以下のように続けている。

ここまで書いたところで温泉八月号を見たら、この山代で今度観光センターというものが出来るという記事があつて驚いた。これは今迄書いて来た山代の最も山代らしからぬものだが、さすがの山代にも現代の新風がかくの如く吹き込んで来ているのかと驚いたのだ。この山代温泉にして既に然りだ。近代甚だめまぐるしく脱皮、変貌する活潑な温泉場を、古い記憶を辿つて書く事には大きい矛盾がある訳だ。到底動き躍進する温泉場を描く事は出来ない相談かも知れない。読者は寛容にして、この山代温泉にもこんないい面もあったという事を賢察されたい。従つて他の毎月つづけている温泉風物も同じである。

千帆の死は、本号が世に出た翌月、昭和三十五年十一月十七日のことであつた。翌年一月刊行の『温泉』には最後の原稿として「画と文 温泉風物(白浜)―遺稿」が掲載されたが、ここでも「大資本大規模な大温泉境になつて了つた」「隔世どころか、ここ程大きく変つた所は先ず他にはあるまい」といった語句が並び、自身のかつての旅と現状との乖離を吐露することになった。

『温泉』の発行人であり旅にもしばしば同行した安斎秀夫は、本号に「前川千帆先生のこと」を寄せ、ともにした北海道、北陸、山陰への旅や、千帆の無欲恬淡さや山菜好きの一面を披露している。そして亡くなる約ひと月前に届いた、十月二十日の最後の手紙を引用している。

小生目下下図の如く蛆上の鯉の心境、近日切腹手術の予定、とうとう病院の仲間入り、連日秋晴好日を窓より眺めて残念、手術したら、あと療養にどこか温泉へと考え中、どこそこいろいろ思い出して僅かに慰めていきます。

「切腹手術」で心臓を衰弱させた千帆は、そのまま帰らぬ人となつたのである。

連載「温泉風物」は、回想と現状との隔たりを露呈したとはいえ千帆の温泉観の集大成であり、また最晩年の日々における写生帖の重要性を証するものであつた。『浴泉譜』などで一度描いた図柄を焼き直した可能性も否定できないが、図柄の一致から、写生帖三十冊の少なくとも過半は最晩年の千帆が亡くなる間際まで繰つていた、手元にあつた一群と断定できる。安斎への手紙にあるとおり、病床でもありし日の旅を懐古しつつ、頭のなかで写生帖を繰つていたかもしれない。

■おわりに

当館が所蔵する前川千帆の写生帖三十冊を紹介し、関連作品を中心に概観した。焼失したとされる戦中までの写生帖がどのように残り、戦後の十数冊とともに伝来したのかは謎のままだが、千帆が最晩年まで手元に置いた貴重な一群であることは確認できた。千帆が残した膨大な仕事を考えれば、失われた写生帖の存在にも気付かされるが、三十冊を読み込むことで、見えてきたことも少

なからずある。「あわてものの熊さん」に代表される漫画で流行作家となった千帆は、昭和十年頃漫画家の看板を降ろして創作版画に軸足を移した。その事実には変わりはない。だが、写生帖からは木版画家としての作品―『版画浴泉譜』や『閑中閑本』、数々の一枚摺を支えた、古くは東京漫画会にまで遡る、漫画家時代の人脈を活かした旅という背景が浮かび上がる。とりわけ日本温泉協会との機関誌『温泉』の存在が重要であり、その後景には、戦後の好景気や座談会という形式の流行もあったであろう。千帆は、同誌第二十四巻第四号の「温泉宿へもの申す」のなかで、自身の旅には「温泉協会としての事前工作がしてあり、何処へ行っても大変な歓待で、お尻がクスグツたくなるような」と、「単独のお忍び」で行くものとの二種類があると書いている。従って、メディア主催の旅ばかりを強調すると偏りが生じるのも事実だが、千帆が両者の間でバランスをとりながら制作していたことは疑いない。木版画家前川千帆を語る時、漫画家時代からの流れの理解なくしては、版業を、また作家像をも見誤ることになるのだろう。

註

- 1 展覧会期…七月十三日(火)〜九月二十日(月祝)／入場者数…七、二八一人
- 2 『前川千帆名作展』図録(財団法人平木浮世絵財団リッカー美術館、一九七九年九月)および『平木コレクション』による。前川千帆展『図録 千葉市美術館、二〇二一年七月』。前者は千帆没後初の大幅回顧展の図録であり、また本稿でしばしば言及することになる『版画浴泉譜』全五冊の全図を掲載して貴重である。なお、後者について以下言及する場合は、『図録二〇二二』と略す。
- 3 前川千帆『閑中閑本 第十九冊 山野雑草帖』(日本愛書会、一九五七年夏の書きに「戦時中危く／なつた頃 友人の厚意で四国〆八幡浜の銀行の大金庫へ保護／してもらったおかげで今に重宝で／あり唯一の財産である／これはその中の抜粋である」と記されている。なお写生帖については、千帆自身による昭和初年の文章に「本函の中に堆高いスケッチブック」との言及があり(『画集・野外小品の味噌』版画CUBA 第一年第三号、一九二九年五月)、また吉田漱は「何百冊というスケッチブック」が「ほとんどみな戦災で失われ」と記している(前川千帆・その資質と作品『前川千帆名品展』図録、註2)。また千帆は二十代から日記をつけていたが、それも戦災で焼けたという(前川千帆『山村だより』

『藝術寫真研究』第二十四巻第十二号、一九六〇年十二月)。

たとえば昭和十六〜十八年に使用された写生帖 no. 14 と no. 15 をもとに、同二十二年岡山において、『閑中閑本 第三冊 記録紙遊帖』が完成している。

昭和十六年に第一作『版画浴泉譜』が版行され、三十四年の第五作『続統統版画浴泉譜』まで連刊された。各集に二十図を収め、総数は百図を数える。なお写生帖と『版画浴泉譜』の関係については、先行論文として森山悦乃「前川千帆と温泉 版画浴泉譜の世界」がある(『図録二〇二二』)。「版画浴泉譜」の各冊については『図録二〇二二』186、187、320―322を参照。

吉田前掲論文、註3

石子順『日本漫画史』上巻(大月書店、一九七九年)、一〇四頁

『図録二〇二二』の年譜において、琵琶湖を巡る旅を大正十五年早春と記載したが、ここに訂正した。

連作『閑中閑本』は戦後までもなく第一冊が完成し、昭和三十五年初夏の第二十六冊まで連刊された。千帆が亡くなる間際まで手がけられ、没後に未完成のまま刊行された第二十七冊を含め、連作『版画浴泉譜』とともに千帆の版業を代表するシリーズとなった。『閑中閑本』については『図録二〇二二』214―253、353、366を参照。

「まえがき」『閑中閑本 第四冊 北越雪見帖』(日本愛書会、昭和二十三年春)

吉田漱は千帆の温泉への関心について、大正十一年の日本創作版画協会第四回展に『別所温泉』を出品した頃からとしている(前掲論文、註3)。

軽井沢へは、昭和四年六月十六日の夜行で訪れている(『版画CUBA』第一年第四号、一九二九年八月)。

以下の八つのタイトルが列記されている…「旧軽井沢道」「浅間山 杓掛への橋の所、雪の景」「軽井沢町 夏」「落葉松と離山(道より)」「別荘より」「草津鉄道とコルフリグ」「三笠ホテル近辺」「白樺」。『日本風景版画 軽井沢之部』については『図録二〇二二』185を参照。この時の講演については、現時点では検証できていない。

森山前掲論文、註5、十八頁。なお志茂が見たという法師温泉に取材した木版画は、現時点では特定できていない。

このエピソードは後年の『温泉風物 湯田中、安代、渋』温泉』第二十八巻第五号(一九六〇年五月)でも披露されている。

『版画浴泉譜』遠刈田の文章に、一部が採用されている。

森川については不詳。

山崎斌『日本草木染譜』(染織と生活社、一九八六年 ※一九六一年刊の復刻)年譜より。千帆は山崎の著書の装幀・挿画も手がけ、山崎は昭和二十一年に抄紙を始めて千帆の『草木抄』を刊行するなど、親交は続いた。また千帆の死に際して山崎は、『前川千帆 版画を中心にしてのその画業 その他』(月明会出版部、一九六一年)を編み、その死を悼んでいる。

山口進は大正十四年から旧制第一高等学校の二高寮務掛として勤務し、一高画会で絵を教えており(『東京大学駒場博物館所蔵品展 饅頭・柏・オリブ 山口進の画業と交友』東

京大学駒場博物館、二〇一四年三月、その縁であろう。写生帖には「先行山口」とあり、山口が先に現地入りしていたことがわかる。

21 森山前掲論文、註5、二十一頁。

22 《版画浴泉譜 松の山》の文章に、一部が採用されている。

23 「坂本」は阪本牙城か、「森島」は森島直造か。

24 『満蒙風物即興』は国会図書館デジタルコレクションとしてインターネット公開されている。

25 前川千帆「抄紙即笑止」『書物展望』第十三卷第二号（一九四三年二月）。小野忠重も戦争末期の千帆について、「前川千帆は生漉和紙がほしくて、けんめいに再製紙を試みたが、うまくいかなかった、とものに話してくれた」と語っている（近代日本の版画『三彩社、一九七一年、九十七頁』）。

26 《続版画浴泉譜 温泉津》の文章でも「夢二が居たら喜びさうな」と書いている。

27 このエピソードは後年の『温泉風物三朝』『温泉』第二十八巻第四号（一九六〇年四月）でも紹介されている。

28 《続版画浴泉譜 沓掛》の文章に、一部が採用されている。

29 《続版画浴泉譜 湯村》の文章に、一部が採用されている。

30 日本温泉協会は、温泉の研究と振興を目的に、昭和四年十二月に設立された半官半民の団体。内務省と鉄道省の後援を受けており、昭和六年より社団法人となった。『温泉』はその機関誌として昭和五年四月に創刊され、戦中休刊するも昭和二十三年復刊した（『日本温泉協会70年記念誌』社団法人日本温泉協会、一九九九年）。千帆が旅をともした安斎秀夫は同誌の編集者である。千帆の旅と『温泉』の関係については後述。

31 《続版画浴泉譜 平湯》の文章に、一部が採用されている。

32 《続版画浴泉譜 中の湯》の文章に、一部が採用されている。

33 出席者は漫画家四名と安斎秀夫（『温泉』編集長、平田直司（東奥館社長））。

34 この訪問も『温泉』（箱根小涌谷点描（絵と文））、表1参照の取材であろう。

35 たとえば昭和四年の写生帖no.2と関連する昭和二十五年の『関中関本 第八冊 東西島々帖』、同五年のno.5と関連する昭和二十九年の『同 第十四冊 第二浴泉余情帖』、同五十六年のno.7に関連する三十三年の『同 第二十二冊 蝦夷風物帖』がある。

36 池部とは十一回、宮尾とは十三回旅をともし、兩名とともにしたのは八回を数える。写生帖no.23ではふたりの名を「池宮」と略記しており、常連ふりと親しさがしのばれる。

37 千帆が『温泉』の常連となった経緯は詳らかでないが、戦後復刊してまもない第十六巻第二号から宮尾しげをが参加し、以後頻繁に寄稿しており、その縁と考えてよいだろうか。なお『温泉』の取材先が『続続』『続続続』『続続続続版画浴泉譜』に關係することは、すでに森山悦乃氏の指摘がある。森山前掲論文、註5、十九頁。

表1 千葉市美術館所蔵・前川千帆の写生帖

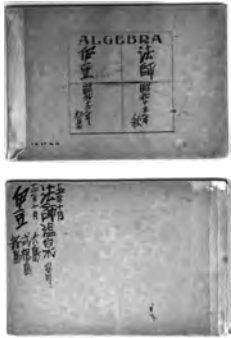
凡例：

- ・本表において「前川千帆展」とは「平木コレクションによる 前川千帆展」(2021年7月13日～9月20日、於千葉市美術館)をさす。
- ・作品名の後の3桁の数字は、『平木コレクションによる 前川千帆展』図録の出品番号である。
- ・雑誌記事の場合、特記がなければ執筆者は千帆である。
- ・「人名」とは、写生帖に記録のある人名である。詳細不詳の人名については「」付きで示した。

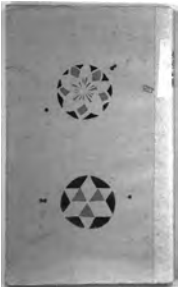
写生帖 no.1		使用時期	大正12～15年(1923～26)／35～38歳頃		
サイズ(cm)	13.0×18.5×0.5	技法	鉛筆、色鉛筆、ペン、水彩		
枚数	42枚	「前川千帆展」出品番号	054	『前川千帆展』掲載画像	054a(p.53), 054b(p.41)
表紙画像 		題字	震災／琵琶湖、竹生島／諏訪湖 大正十五年二月 東京千駄ヶ谷／五四九前川千帆		
		概要	関東大震災直後のスケッチ、大正13年春以前の琵琶湖周辺の旅(関ヶ原、賤ヶ岳、余呉湖、竹生島)のスケッチ、大正15年2～3月の諏訪湖への旅のスケッチ、カルタの下絵とおぼしき人物略画などを収める。		
		関連作品	『大震災画集』日本漫画会著、金尾文淵堂刊、大正12年、063 『画家の眼：震災画譜』黎明社編輯部編、黎明社刊、大正12年 ※堂本印象他著 《雪の余呉湖》木版多色摺、大正13年、037 『温泉風物 上諏訪』『温泉』第27巻第8号(昭和34年8月)		
		人名			
		備考・特記事項	左開き／2枚切り取られている。 文房堂製スケッチブック 終盤にカルタの下絵とおぼしき漫画調の人物略画が6枚ほど続くが、筆致の違いから後年のものと思われる。		
写生帖 no.2		使用時期	昭和4年(1929)／41歳頃		
サイズ(cm)	13.5×18.5×1.2	技法	鉛筆、ペン、水彩		
枚数	78枚	「前川千帆展」出品番号	129	『前川千帆展』掲載画像	129a, 129b(p.86)
表紙画像 		題字	越後の雪／二度めの越後／牛と風と／佐渡／軽井沢／別府		
		概要	昭和4年2月(15～21日)と6月(4～12日)の、二度の越後への旅のスケッチが中心。ほかに『新東京百景』や『日本風景版画 軽井沢之部』のためのスケッチ、別府への旅のスケッチなどを収める。		
		関連作品	《新東京百景 工場地帯(本所)》木版多色摺、昭和4年、084 『日本風景版画 軽井沢之部』木版多色摺、昭和4年、095 共著『特輯読み物(漫画紀行)越後から佐渡へ』『婦女界』第40巻第2号(昭和4年8月) 『閑中閑本 第四冊 北越雪見帖』木版多色摺、昭和23年、217 『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 『雪国』『山と溪谷』第131号(昭和25年4月)		
		人名	水島爾保布、田中比左良、宮尾しげを、中島六郎、京屋金介、「永田氏」、池部鈞、幸内純一、清水対岳坊、細木原青起		
		備考・特記事項	左開きのスケッチブックを右開きで使用したか／9枚ほど破り取られている。 文房堂製スケッチブック		
写生帖 no.3		使用時期	昭和4年(1929)／41歳頃		
サイズ(cm)	18.7×13.3×0.4	技法	鉛筆、墨、水彩		
枚数	40枚	「前川千帆展」出品番号	130	『前川千帆展』掲載画像	130a, 130b(p.86)
表紙画像 		題字	山陰と隠岐／昭和四年九月十五日／廿五日 宮津／天の橋立／松江／大社／日御碕／隠岐／立木観音／東京近景の一部／千住、雑司ヶ谷／目白 同行／水島爾保布／清水対岳／宮尾しげを／近藤飴ん坊／細木原青起／前川千帆		
		概要	何葉かの東京風景と、昭和4年9月(15～25日)の山陰と隠岐への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221		
		人名	水島爾保布、清水対岳(坊)、宮尾しげを、近藤飴ん(ン)坊、細木原青起		
		備考・特記事項	右開き		

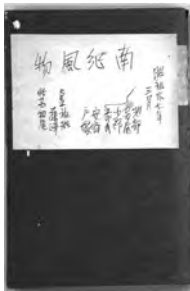
写生帖no.4		使用時期	昭和3-5年(1928-30)頃／40-42歳頃		
サイズ(cm)	19.5×14.2×0.7	技法	鉛筆、ペン、水彩		
枚数	55枚	「前川千帆展」出品番号	131	『前川千帆展』掲載画像	131a, 131b(p.87)
表紙画像 		題字	昭和五年／○上州法師、栃屋又／○信州講演行／○佐原／○台場／○芝浦／○函根		
		概要	昭和3年3月頃代々木山谷町に転居してまもなく使い始めた写生帖か。昭和5年5月(2～4日か)の法師温泉への旅、同年同月(10～14日)の長野県への講演旅行の際のスケッチ、《工場地帯1》《工場地帯2》『新東京百景』の草稿などを収める。		
		関連作品	《工場地帯1》木版墨摺、昭和4年、081／《工場地帯2》木版墨摺、昭和4年、082 《新東京百景 深川木場》木版多色摺、昭和5年、088／《同 水上公園(台場)》木版多色摺、昭和5年、089 《水郷》木版多色摺、昭和5年、097 《第五野外小品 草花》木版墨摺、昭和9年、077 《版画浴泉譜 法師》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219 「三国峠と清水トンネル」『美術新論』第5巻第7号(昭和5年7月) 「番場峠」『美之国』第6巻第7号(昭和5年7月) 「温泉風物 浅間」『温泉』第26巻第7号(昭和33年7月) 「温泉風物 法師」『温泉』第26巻第9号(昭和33年9月)		
		人名	吉井勇、安成二郎、竹久夢二、山崎斌		
		備考・特記事項	右開き／最後の1枚が切り取られている。		
写生帖no.5		使用時期	昭和5年(1930)／42歳頃		
サイズ(cm)	18.5×13.3×0.8	技法	鉛筆、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	64枚	「前川千帆展」出品番号	132	『前川千帆展』掲載画像	132(p.87)
表紙画像 		題字	伊豆大島 昭和五年五月／伊豆西海岸 七月／信州温泉 六月		
		概要	昭和5年5月の伊豆大島への旅、6月(25～28日)の信州温泉巡り、7月の伊豆西海岸への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《海》木版多色摺、制作年不詳、098／《伊豆海岸》木版多色摺、昭和5年頃、099 『いで湯の里 上山田』小冊子、昭和10年、196 《版画浴泉譜 戸倉》《同 野沢》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 《続版画浴泉譜 渋、安代》／《同 山田》木版多色摺、昭和19年、187(図版掲載なし) 『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 水島爾保布＋前川千帆「漫畫 伊豆漫畫行」『旅』第8巻第1号(昭和16年1月) 「温泉風物 湯田中、安代、渋」『温泉』第28巻第5号(昭和35年5月)		
		人名	吉川英治、横山大観、佐久間象山、服部亮英、宮尾しげを、「高口」、池部鈞、水島爾保布、池田永治、細木原青起		
		備考・特記事項	右開き／終盤に4枚ほど白紙あり 雑誌の切り抜きか、下田と大島を結ぶ「菊丸」や伊豆観光地の写真が貼付されている。		

写生帖no.6		使用時期	昭和9-16年(1934-41)頃／46-53歳頃		
サイズ(cm)	19.0×13.2×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	47枚	「前川千帆展」出品番号	201	『前川千帆展』掲載画像	201a, 201b(p.124)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	遠刈田温泉・秋保温泉(宮城県)、赤湯温泉(山形県)、青根温泉(宮城県)のスケッチが中心。途中に塩田の取材をしたとおぼしき四国への旅がはさまれる。青根温泉の覚書には昭和16年2月の日付が残るが、『第五野外小品』や『小部屋』といった昭和9-10年頃の作品の下絵もあり、長い期間にわたり使われたと考えられる。		
		関連作品	《第五野外小品 河》木版墨摺、昭和9-10年、077(図版掲載なし) 《小部屋》木版多色摺、昭和10年、148 《冬の湖》木版多色摺、制作年不詳、149 《版画浴泉譜 遠刈田》《同 青根》木版多色摺、昭和16年、186(《青根》は図版掲載なし)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／塩田に関する切り抜きが多く貼り込まれている。 表紙を別紙が包んでいる(もとの題字は「知多半島／榛名雪／塩田」)。		
写生帖no.7		使用時期	昭和5-6年(1930-31)頃／42-43歳頃		
サイズ(cm)	19.6×13.0×0.8	技法	鉛筆、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	54枚	「前川千帆展」出品番号	202	『前川千帆展』掲載画像	202a, 202b(p.124)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	昭和5年と思われる11月5-10日の黒部峡谷をメインにした旅と、昭和6年と思われる1月10-19日の北海道への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《炭鉱》木版多色摺、制作年不詳、102 《小豆袋と女(北海道)》木版多色摺、昭和6年頃、108 《第四野外小品 櫓》木版墨摺、昭和7年／《同 荷物櫓》木版墨摺、昭和8年、077(図版掲載なし) 《版画浴泉譜 黒雄》木版多色摺、昭和16年、186 『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』木版多色摺、昭和33年、235		
		人名	水島爾保布、池部鈞、細木原青起、服部亮英、池田永治、「森川」、相馬御風		
		備考・特記事項	右開き／終盤に8枚白紙あり、3枚ほど切り取りあり 「オカモトキイチ」(岡本帰一)NOTEBOOK		
写生帖no.8		使用時期	昭和10-13年(1935-38)頃／47-50歳頃		
サイズ(cm)	19.3×13.9×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	50枚	「前川千帆展」出品番号	203	『前川千帆展』掲載画像	203a, 203b(p.124)
表紙画像 		題字	戸隠山 昭和十、三、／山中湖 昭和十三、七		
		概要	昭和10年3月(17-18日)の戸隠への旅、昭和13年7月(13-16日)の富士五湖への旅のスケッチを中心に収めるが、後年とおぼしき川治温泉や鬼怒川のスケッチも含まれている。		
		関連作品	《姥捨山 月見堂》木版多色摺、制作年不詳 《姥捨》木版墨摺、昭和32年		
		人名	山崎斌、恩地孝四郎、藤森静雄、山口進		
		備考・特記事項	右開き／富士五湖の写真絵葉書や新聞・雑誌の切り抜きなどが貼り込まれている。		

写生帖no.9		使用時期	昭和11-15年(1936-40)／48-52歳頃		
サイズ(cm)	19.6×14.2×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	51枚	「前川千帆展」出品番号	204	『前川千帆展』掲載画像	204a, 204b(p.125)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	昭和11年6月の鬼押出や六里ヶ原への旅、昭和12年春の武蔵嵐山行き、同年3月の苗木城址への旅、同年4月の名古屋城への旅、同年5月の法師温泉への旅のスケッチ、昭和15年秋の石神井三宝池でのスケッチなどを収める。		
		関連作品	《名古屋城》木版多色摺、昭和12年、157／《名古屋城》木版多色摺、昭和13年、158 《一木集IV 石神井三宝池》木版墨摺、昭和23年、260 《浅間山鬼押出し》木版墨摺、昭和30年、297		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／裏表紙にペンで「昭和十二年」とあり		
写生帖no.10		使用時期	昭和12、15年(1937、40)／49、52歳頃		
サイズ(cm)	14.5×20.8×0.4	技法	鉛筆、ペン、水彩		
枚数	30枚	「前川千帆展」出品番号	205	『前川千帆展』掲載画像	205a, 205b(p.125)
表紙画像 		題字	伊豆 昭和十二年初夏／法師 昭和十五年秋 伊豆 新島 式根島 大島／十二年六月／法師温泉 谷川／十五年十月		
		概要	昭和12年6月(7～10日)の伊豆と大島・新島・式根島への旅、昭和15年10月(15～17日)の法師温泉への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	『閑中閑本 第八冊 東西島々帖』木版多色摺、昭和25年、221 「大島拝見」(「島の涼風線 五大漫画家ユーモアコンクール」より)『旅』第14巻第8号(昭和12年8月)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／3枚ほど切り取られている。		
写生帖no.11		使用時期	昭和13-15年(1938-40)／50-52歳頃		
サイズ(cm)	18.4×13.3×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	62枚	「前川千帆展」出品番号	206	『前川千帆展』掲載画像	206a, 206b, 206c, 206d(p.125)
表紙画像 		題字	朝鮮 昭和十三年十月／戦場ヶ原 昭和十三年十一月／荘内 昭和十四年正月／松の山温泉 昭和十五年 秋九月		
		概要	京城三越での漫画作品展に関連した昭和13年10月(11～23日)の朝鮮旅行、同年11月(18日前後)の日光戦場ヶ原への旅、昭和14年1月(1～5日)の庄内地方への旅、昭和15年9月(24～26日)の松の山温泉への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《版画浴泉譜 松の山》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 南賢治著『写真紀行 旅とふるさと』装幀 書籍、光人社、昭和17年、193 《三角ずきん》木版多色摺、制作年不詳、311		
		人名	前田東水、細木原青起、宮尾しげを、中西立頃(の弟)、大島勝太郎、「永田老」		
		備考・特記事項	右開き／2枚ほど切り取られている。 松の山温泉に関連して、景観や「温泉節」「温泉小うた」などの写真が貼付されている。		

写生帖no.12		使用時期	昭和14年(1939)／51歳頃		
サイズ(cm)	19.1×13.0×1.0	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	62枚	「前川千帆展」出品番号	207	『前川千帆展』掲載画像	207a, 207b, 207c(p.126)
表紙画像 		題字	昭和十四年初夏／五月二十二日／六月二十六日／北満蒙古		
		概要	昭和14年5月22日～6月26日の北満洲・蒙古への旅のスケッチを収める。その多くが翌年アオイ書房から刊行された『満蒙風物即興』にオリジナルに近い形で収録されている。		
		関連作品	《呼蘭聖母廟晨鐘樓》木版多色摺、昭和14年／《満洲初夏》木版墨摺、昭和14年／《新京の影画芝居》木版多色摺、昭和14年／《新京の影画芝居》木版・紙版併用多色摺、昭和33年、309 『満蒙風物即興』書籍、アオイ書房、昭和15年、184 水島爾保布+前川千帆「満蒙のぞき」『富士』第12巻第11号(昭和14年9月) 「満洲漫畫断片」『新満洲』第4巻第4号(昭和15年4月) 「満蒙畫帖の内より」『政界往来』第12巻第2号(昭和16年2月) 「見て来た満洲」『旅』第19巻第3号(昭和17年3月) 「北満旅帖の内より」『満洲の印象』風土研究会編 書籍、奉天・吐風書房刊、昭和19年		
		人名	水島爾保布、小野佐世男、池部鈞、細木原青起、宮尾しげを、森島(直造か)、浅田力造、坂本(牙城か)、「永田」、河合良成、「永田(息)」、「勝村氏」、森田久、平川守、今井一郎、「梅林氏」、「渡辺氏」、「矢野氏」、「大槻氏」、「阪水氏」、「貴福老人」、「領事松田氏」、「松永氏」、「手塚氏」、「佐藤氏」、「前田氏」、寺田瑛		
		備考・特記事項	右開き／1枚切り取りあり／他の紙に描いた絵や便箋に記した文章などが、数多く貼り込まれている。		
写生帖no.13		使用時期	昭和15～26年(1940～51)頃／52～63歳頃		
サイズ(cm)	19.2×13.0×0.8	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、青ボールペン		
枚数	28枚	「前川千帆展」出品番号	208	『前川千帆展』掲載画像	208a, 208b (p.126)
表紙画像 		題字	北陸		
		概要	北陸(福井県と石川県)の旅のスケッチ、数葉の東京近郊風景、土肥温泉のスケッチを含む。		
		関連作品	《版画浴泉譜 土肥》木版多色摺、昭和16年、186(図版掲載なし) 《続続版画浴泉譜 芦原》《同 湯涌》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 《公園の一隅》木版多色摺、昭和30年、296 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野左世男「座談會 北陸温泉マンガ行」『温泉』第19巻第6号(昭和26年6月) 山路閑古+前川千帆(画)「土肥温泉」『温泉』第19巻第11号(昭和26年11月) 「温泉風物 芦原」『温泉』第28巻第1号(昭和35年1月) 「温泉風物 山代」『温泉』第28巻第10号(昭和35年10月)		
		人名			
		備考・特記事項	右開き		
写生帖no.14		使用時期	昭和16～17年(1941～42)／53～54歳頃		
サイズ(cm)	19.8×15.6×0.5	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	36枚	「前川千帆展」出品番号	209	『前川千帆展』掲載画像	209a, 209b, 209c(p.127)
表紙画像 		題字	盤梯裏山 十六年秋／吉野梅林 十七年春／軍道紙漉 十七年春		
		概要	昭和16年10月(2～5日)の裏磐梯行、17年3月11日の奥多摩吉野梅林見物、同年3月28日の軍道紙漉の工程見学のスケッチを収める。		
		関連作品	《吉野梅林》木版多色摺、昭和18年、171／《奥多摩吉野梅林》木版多色摺、昭和18年頃、172 『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』木版多色摺、昭和22年、216 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219		
		人名	恩地孝四郎、志茂太郎		
		備考・特記事項	右開き／裏表紙に「丸公」(公定価格)マークあり。定価12銭。		

写生帖no.15		使用時期	昭和17-18年(1942-43)／54-55歳頃		
サイズ(cm)	21.0×15.0×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	38枚	「前川千帆展」出品番号	210	『前川千帆展』掲載画像	210a, 210b(p.127)
表紙画像 		題字	鳥山十七年四月／中國旅行十七年四月／湖北 十七年十一月／小川町製紙十八年二月		
		概要	昭和17年4月の那須烏山の紙漉場見学、同年4月(12～21日)の中国地方への旅、同年11月(3日の前後)の湖北への旅、18年2月23日の小川町の製紙指導所見学のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《紙漉場》木版多色摺、昭和17年、169 《続版画浴泉譜 三朝》《同 奥津大釣》《同 湯原砂吹》木版多色摺、昭和19年、187(《奥津大釣》《湯原砂吹》は図版掲載なし) 『閑中閑本 第三冊 記録紙漉帖』木版多色摺、昭和22年、216 『温泉風物 奥津・大釣』『温泉』第26巻第6号(昭和33年6月) 『温泉風物 温泉津』『温泉』第27巻第7号(昭和34年7月)		
		人名	志茂太郎、「松岡氏」、竹久夢二、安倍栄四郎、「久世氏」		
		備考・特記事項	左開き／2枚切り取りあり		
写生帖no.16		使用時期	昭和18、24年(1943、49)頃／55、61歳頃		
サイズ(cm)	21.1×13.9×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、色鉛筆		
枚数	38枚	「前川千帆展」出品番号	211	『前川千帆展』掲載画像	211a, 211b(p.127)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	昭和18年4月(14～16日)の会津への旅、同年5月(19～29日)の九州・四国への旅、同年(か)11月(4～7日)の長野県への旅のスケッチを中心に収める。疎開から戦後の五年間を暮らした岡山でも、昭和24年に使用した形跡がある。		
		関連作品	《続版画浴泉譜 会津湯の上》《同 鹿沢》《同 杵掛》《同 栃ノ木》《同 湯の児》《同 雲仙》《同 霧島》木版多色摺、昭和19年、187(《会津湯の上》《栃ノ木》《湯の児》《霧島》は図版掲載なし) 《日本女俗選 大原女》木版多色摺、昭和21年、259(図版掲載なし) 『閑中閑本 第六冊 温泉餘情帖』木版多色摺、昭和24年、219 「〈絵と文〉高原に湧く湯二つ」『旅』第29巻第7号(昭和30年7月) 『温泉風物 鹿沢』『温泉』第27巻第2号(昭和34年2月)		
		人名	中島謙吉、「牧水の歌碑建つ」(栄之尾にて)、西村弥三郎		
		備考・特記事項	左開き／2枚切り取りあり		
写生帖no.17		使用時期	昭和26年(1951)頃／63歳頃		
サイズ(cm)	20.0×11.9×0.4	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	20枚	「前川千帆展」出品番号	340	『前川千帆展』掲載画像	340a, 340b(p.189)
表紙画像 		題字	紀州山陰		
		概要	南紀、山陰、関西への旅の写生をおさめる。年記がないが、関連作品から昭和26年11月(8～16日)の旅と考えられる。		
		関連作品	《続続版画浴泉譜 龍神》《同 白浜》《同 椿》《同 湯村》《同 東郷》木版多色摺、昭和27年、320(《白浜》《東郷》は図版掲載なし) 「絵と文 湯村温泉(兵庫県)」『温泉』第20巻第3号(昭和27年3月) 「石見出雲のいで湯の里」『旅』第27巻第5号(昭和28年5月) 「南紀龍神行」『ホテルレビュー』第5巻第45号(昭和29年1月) 『温泉風物 竜神』『温泉』第27巻第3号(昭和34年3月) 『南紀漫画の旅』白濱観光協会、小冊子、昭和28年、338		
		人名			
		備考・特記事項	右開き／2枚切り取りあり		

写生帖no.18		使用時期	昭和22、23年(1947、48)／59、60歳頃		
サイズ(cm)	18.3×17.8×0.5	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	17枚	「前川千帆展」出品番号	267	『前川千帆展』掲載画像	267a, 267b(p.129)
表紙画像(裏表紙) 		題字	(表紙を欠く)		
		概要	疎開し、その後5年を過ごした岡山で使われた写生帖。県内の風景がスケッチされている。		
		関連作品			
		人名			
		備考・特記事項	右開き／表紙を欠き、また3枚ほど切り取られている。		
写生帖no.19		使用時期	昭和25年(1950)／62歳頃		
サイズ(cm)	15.0×17.6×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩		
枚数	18枚	「前川千帆展」出品番号	341	『前川千帆展』掲載画像	341a, 341b(p.189)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	昭和25年5月(8～10日か)の奥利根への旅と、同年6月(6～8日)の法師温泉への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《温泉宿二階》木版多色摺、昭和28年、279 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+山路閑古「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」『温泉』第18巻第7号(昭和25年7月)		
		人名			
		備考・特記事項	左開き／手製か／1枚切り取りあり／半分に折って使用したか、中央に折れ跡がある。		
写生帖no.20		使用時期	昭和27年(1952)／64歳頃		
サイズ(cm)	18.9×12.6×0.9	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩(か)		
枚数	67枚	「前川千帆展」出品番号	342	『前川千帆展』掲載画像	342a, 342b(p.189)
表紙画像 		題字	南紀風物／昭和廿七年三月／池部／宮尾／小野／前川／安斉／戸塚／天口子神納／藤崎／新宮細尾		
		概要	昭和27年3月(9～12日か)の南紀への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《浴泉》木版多色摺、制作年不詳、300 《統続版画浴泉譜 越の湯》《同 浦島》《同 湯の峯》《同 川湯》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 池部鈞+前川千帆+宮尾しげを+小野左世男「座談会 南紀の湯どころ」『温泉』第20巻第6号(昭和27年6月) 「温泉風物 湯の峯」『温泉』第26巻第11号(昭和33年11月) 「温泉風物 勝浦」『温泉』第28巻第8号(昭和35年8月) 「温泉風物 白浜(遺稿)」『温泉』第29巻第1号(昭和36年1月)		
		人名	池部鈞、宮尾しげを、小野佐世男、安斎秀夫、「戸塚」		
		備考・特記事項	右開き		
写生帖no.21		使用時期	昭和26年(1951)／63歳頃		
サイズ(cm)	18.9×12.3×0.6	技法	鉛筆、墨、ペン、水彩、青ボールペン		
枚数	20枚	「前川千帆展」出品番号	343	『前川千帆展』掲載画像	343a, 343b(p.190)
表紙画像 		題字	(旅程図+上高地・焼岳の地図貼付)		
		概要	昭和26年10月(2～6日)の長野県と岐阜県への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《統続版画浴泉譜 上高地》《同 中の湯》《同 白骨》《同 平湯》木版多色摺、昭和27年、320(図版掲載なし) 「温泉風物 白骨」『温泉』第27巻第10号(昭和34年10月)		
		備考・特記事項	右開き		

写生帖no.22		使用時期	昭和28年(1953)／65歳頃		
サイズ(cm)	20.3×12.5×0.8	技法	青ボールペン、鉛筆、水彩、色鉛筆		
枚数	36枚	「前川千帆展」出品番号	344	『前川千帆展』掲載画像	344a(p.190)
表紙画像 		題字	(昭和廿八年春 三月二日夜行)／○湯の川、○昆布、○洞爺、○登別、○定山溪、○札幌、○浅虫、／(三月十日夜行、十一日昼前上野)		
		概要	昭和28年3月(2～11日)の北海道と青森への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《昭和新年》木版多色摺、昭和29年、280 《続続続版画浴泉譜 昆布》《同 湯の川》《同 浅虫》木版多色摺、昭和31年、321(《湯の川》は図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十二冊 蝦夷風物帖』木版多色摺、昭和33年、235 池部鈞＋宮尾しげを＋前川千帆＋小野左世男「座談會 道南の温泉―日本風土漫畫會」『温泉』第21巻第6号(昭和28年6月) 「温泉風物 登別」『温泉』第28巻第3号(昭和35年3月)		
		人名	池部鈞、宮尾しげを、小野左世男、「宮本老夫妻」		
		備考・特記事項	右開き／新聞記事、雑誌記事、旅程の青焼の貼付、ホテルのパンフレットの挟込がある。		
写生帖no.23		使用時期	昭和30年(1955)／67歳頃		
サイズ(cm)	17.2×12.7×1.1	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩、色鉛筆		
枚数	56枚	「前川千帆展」出品番号	345	『前川千帆展』掲載画像	345a(p.190)
表紙画像 		題字	こけし 宮城 山形／小涌園、信州、大湯		
		概要	昭和30年1月(2～4日)の宮城県・岩手県への旅、3月(27～30日)の長野県への旅、8月(1～2日)の箱根小涌園訪問、同月(7～8日か)の新潟県への旅、10月(24～29日)の宮城県・山形県・新潟県への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《露天湯》木版墨摺、昭和30年、291 『閑中閑本 第十六冊 鳴子こけし帖』木版多色摺、昭和30年、229 《続続続版画浴泉譜 鬼首》《同 作並》《同 鳴子》《同 瀬見》《同 肘折》《同 高瀬》木版多色摺、昭和31年、321(《鳴子》以外図版掲載なし) 池部鈞＋宮尾しげを＋前川千帆＋下平廣恵「座談會 信州の温泉」『温泉』第23巻第6号(昭和30年6月) 池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを「箱根小涌谷点描(絵と文)」『温泉』第23巻第10号(昭和30年10月) 「鬼首と湯田川」『温泉』第23巻第12号(昭和30年12月) 「温泉風物 肘折」『温泉』第26巻第5号(昭和33年5月) 「温泉風物 鳴子」『温泉』第28巻第2号(昭和35年2月)		
		人名	「石井」、中島(謙吉か)、池部鈞、宮尾しげを、「鈴木ケン氏」、安斎秀夫、水島爾保布、「丹青社の渡辺」、「小宮山氏」		
		備考・特記事項	右開き／罫線あり		
写生帖no.24		使用時期	昭和27、29年(1952、54)／64、66歳頃		
サイズ(cm)	20.4×12.8×0.8	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	68枚	「前川千帆展」出品番号	346	『前川千帆展』掲載画像	346a, 346b(p.191)
表紙画像 		題字	妙義磯部榛名薬師伊香保高崎観音山、昭廿七、十、上旬／小原、鎌先、飯坂、穴原、天王寺、土湯、横内／野地／鷺倉、東山、岩代熱湯、昭和廿九、十一月下旬 ※背に「群馬 福島」とあり		
		概要	昭和27年10月(3～6日)の群馬県への旅、29年11月(22～26日)の福島県・宮城県への旅のスケッチを収める。		
		関連作品	《湖上レクリエーション》木版墨摺、昭和30年、292 《続続続版画浴泉譜 飯坂》《同 岩代、熱海》《同 東山》木版多色摺、昭和31年、321(図版掲載なし) 『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを＋小野佐世男＋味岡益太郎「座談會群馬の温泉を語る」『温泉』第20巻第12号(昭和27年12月) 池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを＋国分嘉米吉＋高橋源一「座談會 みちのくの湯の旅」『温泉』第23巻第2号(昭和30年2月)		
		人名	安斎秀夫、池部鈞、宮尾しげを		
		備考・特記事項	右開き／新聞または雑誌の切り抜きを多数貼り込んでいる。		

写生帖no.25		使用時期	昭和27、32、33年(1952、57、58)頃／64、69、70歳頃		
サイズ(cm)	18.9×11.2×0.8	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	40枚	「前川千帆展」出品番号	347	『前川千帆展』掲載画像	347a, 347b(p.191)
表紙画像 		題字	北海道 青森縣 箱根姥子 伊東		
		概要	昭和27年3月30日(前後)の伊東への旅、32年6月(16～18日頃)の青森県への旅、同年12月(16～17日)の箱根への旅、時期不詳の北海道への旅のスケッチを中心に収める。		
		関連作品	《統統統版画浴泉譜 阿寒》《同 川湯》《同 温根湯》《同 岳》《同 落合》《同 木賀》《同 姥子》木版多色摺、昭和34年、322(《阿寒》《木賀》以外は図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景観帖』木版多色摺、昭和34年、236 『岳と湯段、落合と板留』『温泉』第25巻第12号(昭和32年12月) 『温泉風物 岳』『温泉』第28巻第7号(昭和35年7月)		
		人名	西村秀一		
		備考・特記事項	右開き／何らかの書籍から、南賢治の温泉写真を2枚切り貼りしている。		
写生帖no.26		使用時期	昭和27、32、33年(1952、57、58)／64、69、70歳頃		
サイズ(cm)	19.4×11.2×1.0	技法	鉛筆、墨、青ボールペン、水彩		
枚数	27枚	「前川千帆展」出品番号	348	『前川千帆展』掲載画像	348a, 348b(p.191)
表紙画像 		題字	大島、竹寺、熱海梅園		
		概要	昭和27年1月(2～4日)の大島への旅のスケッチ、昭和32年4月8日の塔の沢温泉・湯本温泉のスケッチ、同年10月(28～29日)の竹寺のスケッチ、同年12月24日の熱海梅園のスケッチ、33年1月4日の青梅でのスケッチなどを収める。		
		関連作品	《民踊》木版・紙版併用多色摺、昭和34年、315 《屋敷の庭》拓摺、制作年不詳、318 《統統統版画浴泉譜 熱海》木版多色摺、昭和34年、322(図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景観帖』木版多色摺、昭和34年、236 「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり(絵と文)』『温泉』第25巻第5号(昭和32年5月) 『温泉風物 熱海』『温泉』第27巻第12号(昭和34年12月)		
		人名	鈴木活、海老名雄二、池部鈞、宮尾しげを、「新倉青年」、茂木惣兵衛、中島(謙吉か)、宮本(重良か)、本間(鉄雄か)、宮岡(貞三郎か)		
		備考・特記事項	左開き／秋田民踊に関する雑誌切り抜きや、別紙のスケッチ(昭和32年春の京都に取材か)が貼り込まれている。		
写生帖no.27		使用時期	昭和29年(1954)／66歳頃		
サイズ(cm)	18.2×9.0×0.6	技法	鉛筆、青ボールペン、水彩		
枚数	32枚	「前川千帆展」出品番号	349	『前川千帆展』掲載画像	349a, 349b(p.192)
表紙画像 		題字	京都		
		概要	昭和29年4月の京都への旅のスケッチを収める。		
		関連作品			
		人名	本阿弥光悦		
		備考・特記事項	右開き		

写生帖no.28		使用時期	昭和29年(1954)頃／66歳頃		
サイズ(cm)	18.3×9.5×0.5	技法	鉛筆、青ボールペン、水彩		
枚数	32枚	「前川千帆展」出品番号	350	『前川千帆展』掲載画像	350a, 350b(p.192)
表紙画像 		題字	近郊 だるま／1954.5.		
		概要	5月(5、8、10日頃)の東京近郊スケッチ、埼玉県越谷町大里でのだるま作り見学のスケッチを取る。		
		関連作品	『閑中閑本 第二十一冊 張子だるま帖』木版摺折本、昭和33年、234		
		人名	中村千代松		
		備考・特記事項	右開き／表見返・裏見返あり／だるまに取材した写真の貼込あり		
写生帖no.29		使用時期	昭和30-32年(1955-57)頃／67-69歳頃		
サイズ(cm)	12.7×18.3×0.7	技法	鉛筆、墨、ペン、青ボールペン、水彩		
枚数	63枚	「前川千帆展」出品番号	351	『前川千帆展』掲載画像	351a, 351b, 351c(p.193)
表紙画像 		題字	(無題)		
		概要	昭和30年(か)11月の群馬県湯島温泉のスケッチ、昭和31年2月3日の大倉山梅園のスケッチ、同年(か)11月(18～22日)の宮城県、山形県、福島県を巡る旅のスケッチ、昭和32年5月(23～25日)の群馬県猿ヶ京温泉のスケッチ、同年(か)6～7月(25～1日)にかけての宮城・盛岡・秋田・青森・福島県を巡る旅のスケッチなどを取る。		
		関連作品	《山の見える部屋》木版・紙版併用多色摺、制作年不詳、282 《続続続続版画浴泉譜 下風呂》《同 大湯》《同 峨々》木版多色摺、昭和31年、321(図版掲載なし) 『閑中閑本 第二十三冊 富士景観帖』木版多色摺、昭和34年、236		
		人名	佐藤仁右エ門(不忘閣)、宮尾しげを、「本名洋一氏」、「佐藤孝也氏」、天江富弥、今村(秀太郎か)		
		備考・特記事項	左開き／2枚破り取られている／《山の見える部屋》の下絵が貼り込まれている 文房堂製スケッチブック		
写生帖no.30		使用時期	昭和28年(1953)／65歳頃		
サイズ(cm)	18.8×12.7×0.7	技法	青ボールペン、鉛筆、墨		
枚数	44枚	「前川千帆展」出品番号	352	『前川千帆展』掲載画像	352a, 352b(p.193)
表紙画像 		題字	九州 28 10月 武雄／嬉野／長崎／小浜／雲仙／島原／戸下／杖立／別府		
		概要	佐賀県・長崎県・熊本県・大分県の温泉を巡った旅のスケッチを取る。昭和28年10～11月(21～1日)に訪れたと思われる。		
		関連作品	『閑中閑本 第十四冊 第二温泉餘情帖』木版多色摺、昭和29年、227 池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを「座談會 北九州温泉めぐり」『温泉』第22巻第1号(昭和29年1月) 「温泉風物 雲仙」『温泉』第28巻第11号(昭和30年11月)		
		人名	池部鈞、宮尾しげを、池田可宵、野中忠太		
		備考・特記事項	右開き／別紙に描いたスケッチや、雑誌の切り抜きと思われる温泉地の写真が、10枚ほど貼り込まれている。		

表2 『温泉』(日本温泉協会機関誌)の記事と写生帖、『版画浴泉譜』の対応関係

	巻号数	発行年月	記事名 ※著者の表記のないものは表1を参照	写生帖	写生帖の使用時期	関連する『版画浴泉譜』の作品
1	第18巻第7号	昭和25年7月	「座談会 川柳と漫画 温泉カクテル」	no.19	昭和25年	
2	第18巻第8号	昭和25年8月	宮尾しげを＋前川千帆「納涼漫画温泉のお化け」			
3	第18巻第10号	昭和25年10月	岸本水府＋前川千帆「温泉十二景」			
4	第19巻第6号	昭和26年6月	「座談会 北陸温泉マンガ行」	no.13	～昭和26年頃	『統統版画浴泉譜』—《芦原》《湯涌》
5	第19巻第11号	昭和26年11月	山路閑古＋前川千帆「土肥温泉」	no.13	～昭和26年頃	
6	第20巻第1号	昭和27年1月	池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを＋小野佐世男「温泉風土記」	no.13	～昭和26年頃	
7	第20巻第1号	昭和27年1月	天野弱平＋前川千帆「草津よいとこ」			
8	第20巻第3号	昭和27年3月	「絵と文 湯村温泉(兵庫県)」	no.17	昭和26年頃	『統統版画浴泉譜』—《湯村》
9	第20巻第6号	昭和27年6月	「座談会 南紀の湯どころ」	no.20	昭和27年	『統統版画浴泉譜』—《越の湯》《浦島》《湯の峯》《川湯》
10	第20巻第11号	昭和27年11月	前川千帆「伊東温泉で出陣料理を見る」			
11	第20巻第12号	昭和27年12月	「座談会 群馬の温泉を語る」	no.24	昭和27、29年	
12	第21巻第2号	昭和28年2月	池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを＋小野佐世男「山陰の出湯を訪ねて」			
13	第21巻第5号	昭和28年5月	前川千帆「温泉宿十景」			
14	第21巻第6号	昭和28年6月	「座談会 道南の温泉—日本風土漫画會」	no.22	昭和28年	『統統版画浴泉譜』—《昆布》《湯の川》《浅虫》
15	第21巻第8号	昭和28年8月	惣田勝雄＋前川千帆「八さんと熊さん」			
16	第21巻第11号	昭和28年11月	山野一郎＋前川千帆「温泉の想ひ出」			
17	第22巻第1号	昭和29年1月	「座談会 九州温泉めぐり」	no.30	昭和28年	
18	第22巻第4号	昭和29年4月	池部鈞＋前川千帆＋伊東温泉代表者「座談会 伊東みやげ」			
19	第23巻第2号	昭和30年2月	「座談会 みちのくの湯の旅」	no.24	昭和27、29年	『統統版画浴泉譜』—《飯坂》《岩代、熱海》《東山》
20	第23巻第6号	昭和30年6月	「座談会 信州の温泉」	no.23	昭和30年	
21	第23巻第10号	昭和30年10月	「箱根小涌谷点描(絵と文)」	no.23	昭和30年	
22	第23巻第12号	昭和30年12月	前川千帆「鬼首と湯田川」	no.23	昭和30年	『統統版画浴泉譜』—《鬼首》
23	第24巻第4号	昭和31年4月	前川千帆「温泉宿へもの申す(絵と文)」			
24	第24巻第8号	昭和31年8月	池部鈞＋前川千帆＋宮尾しげを「座談会 宇奈月、平湯、下呂」			
25	第25巻第5号	昭和32年5月	前川千帆「箱根塔之沢の阿弥陀寺まつり(絵と文)」	no.26	昭和27、32、33年	
26	第25巻第12号	昭和32年12月	前川千帆「岳と湯段、落合と板留」	no.25	昭和27、32、33年	『統統版画浴泉譜』—《岳》《落合》

表3 『温泉』（日本温泉協会機関誌）の連載「温泉風物」と写生帖の対応関係

	巻号数	発行年月	記事名 ※著者はすべて前川千帆	写生帖	温泉の取材時期	備考
1	第26巻第5号	昭和33年5月	「温泉風物 肘折」	no.23	昭和30年	
2	第26巻第6号	昭和33年6月	「温泉風物 奥津・大釣」			(洗濯する女性たちを描く)
3	第26巻第7号	昭和33年7月	「温泉風物 浅間」	no.4	昭和5年	
4	第26巻第8号	昭和33年8月	「温泉風物 土肥」			(裸の子供たちを描く)
5	第26巻第9号	昭和33年9月	「温泉風物 法師」	no.4	昭和5年	
6	第26巻第10号	昭和33年10月	「温泉風物 日光湯元」			(船上の人々をメインに描く)
7	第26巻第11号	昭和33年11月	「温泉風物 湯の峯」	no.20	昭和27年	
8	第26巻第12号	昭和33年12月	「温泉風物 別所」			(《版画浴泉譜 別所》と同じ図柄)
9	第27巻第1号	昭和34年1月	「温泉風物 青根」	no.6	昭和16年	
10	第27巻第2号	昭和34年2月	「温泉風物 鹿沢」	no.16	昭和18年	
11	第27巻第3号	昭和34年3月	「温泉風物 竜神」	no.17	昭和26年頃	
12	第27巻第4号	昭和34年4月	「温泉風物 栃尾又」			「お手曳き爺さん」
13	第27巻第5号	昭和34年5月	「温泉風物 指宿」			(砂湯に入る人々を描く)
14	第27巻第6号	昭和34年6月	「温泉風物 酸カ湯」			「酸ヶ湯温泉の奇人」
15	第27巻第7号	昭和34年7月	「温泉風物 温泉津」	no.15	昭和17年	
16	第27巻第8号	昭和34年8月	「温泉風物 上諏訪」	no.1	大正15年	
17	第27巻第9号	昭和34年9月	「温泉風物 梨木」			(落馬する千帆を描く)
18	第27巻第10号	昭和34年10月	「温泉風物 白骨」	no.21	昭和26年	
19	第27巻第11号	昭和34年11月	「温泉風物 平湯」			
20	第27巻第12号	昭和34年12月	「温泉風物 熱海」	no.26	昭和32年	
21	第28巻第1号	昭和35年1月	「温泉風物 芦原」	no.13	昭和26年	
22	第28巻第2号	昭和35年2月	「温泉風物 鳴子」	no.23	昭和30年	
23	第28巻第3号	昭和35年3月	「温泉風物 登別」	no.22	昭和28年	
24	第28巻第4号	昭和35年4月	「温泉風物 三朝」			
25	第28巻第5号	昭和35年5月	「温泉風物 湯田中・安代・渋」	no.5	昭和5年	
26	第28巻第6号	昭和35年6月	「温泉風物 別府」			(茹卵を作る人・それを見る人 を描く)
27	第28巻第7号	昭和35年7月	「温泉風物 岳」	no.25	昭和32年	
28	第28巻第8号	昭和35年8月	「温泉風物 勝浦」	no.20	昭和27年	
29	第28巻第9号	昭和35年9月	「温泉風物 那須八幡」			(馬に驚く人を描く)
30	第28巻第10号	昭和35年10月	「温泉風物 山代」	no.13	昭和26年	
31	第28巻第11号	昭和35年11月	「温泉風物 雲仙」	no.30	昭和28年	
32	第29巻第1号	昭和36年1月	「画と文 温泉風物(白浜)―遺稿」	no.20	昭和27年	

Introducing works from the Collection: Sketchbooks of Maekawa Senpan (Abstract)

Nishiyama Junko

Maekawa Senpan (1888-1960) is known as a leading *Sosaku hanga* (“creative print”) artist of modern-period Japan. Although he first found success as a Manga artist, he worked in parallel on woodblock prints. From around 1935 he turned to woodblock prints, and received high acclaim for his serene and at the same time, humorous creations. The Chiba City Museum of Art has 30 sketchbooks used by Senpan from the end of the Taisho Era (1912-1926) into the post-war period in its collection. This paper introduces them through a summary, and aims to shed light on related works and to reveal an image of the artist.

This paper begins by putting together basic data about the 30 sketchbooks in table format (period, technique, summary, related works). It next gives a short description of the content of each sketchbook, introduces important illustrations, and quotes accompanying notes that show his attitude as an artist. As a result, various events – in particular, several records of travel around hot springs – have been identified which can supplement Senpan’s biography. There have been many discoveries regarding related works, such as single prints and the series “*Hanga yokusen fu* (Hot spring notes, print collection)”, “*Kanchu kanpon* (Leisure time leisure books)”, and work for magazines. From Senpan’s notes, too, we can observe him warmly gazing upon the old-style, rustic hot springs, and those anonymous people keeping them in business. Then, post-war, we find him regretting the great changes to hot spring spots through modernization and tourism, and his concerns over the difficulty in portraying them.

The most important discovery in the sketchbooks is the record of many trips supported by media. Particularly remarkable is the coverage of trips for the magazine of the Japan Onsen Association, *Onsen*, and many of the works in “Hot spring notes, print collection” can be seen emerging from that project. “Hot spring notes, print collection”, then, ought to be considered the by-product of *Onsen*. Furthermore, comparison of the sketchbooks and *Onsen* reveals their close connection with the series “Onsen scenes and manners” in the same magazine which Senpan wrote in his last years. It has become clear that more than half of the 30 sketchbooks were to hand and referred to by Senpan just before his death, and as such are a valuable set of works.

Senpan had been a popular Manga artist represented by “*Awatemono no kuma-san*”, when in around 1935 he moved his axis to creative prints. There is no difference to this fact. However, a comprehensive view of the sketchbooks gives rise to a background of a media-backed journey making use of contacts from his time as Manga artist that date back as far as the Tokyo Manga Association, and which supported his work on “Hot spring notes, print collection”, “Leisure time leisure books”, and numerous single-sheet woodblocks prints. The conclusion is that the presence, here, of the magazine of the Japan Onsen Association, *Onsen*, is of particular importance, and understanding of the chain of events since his time as Manga artist is essential when discussing Maekawa Senpan, the woodblock print artist.

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第二五号

二〇二三年三月三〇日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

〒260-0003 千葉市中央区中央三丁目一〇―八
電話 〇四三―二二一―二三一一（代）

翻訳協力―バーバラ・クロス

制作― e r A

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.25

March 30, 2023

Edited and Published by

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba City, Chiba 260-0013 JAPAN

Phone. 043-221-2311

Translated by

Barbara Cross

Produced by

erA

ISSN 1343-148X

令和3(2021)年度利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
企画展	大・タイガー立石展	2,165	3,060	6,856	2,068									14,149	
	前川千帆展				2,029	2,398	2,855							7,282	
	江戸絵画と笑おう!				2,164	2,672	3,020							7,856	
	福田美蘭展							3,298	3,518	3,593				10,409	
	ジャポニスム展										3,971	9,133	5,165	18,269	
	第53回千葉市民美術展覧会												11,633	11,633	
	房総ゆかりの美術												14,083	14,083	
	常設展	千葉市美術館コレクション名品選 2020	205												205
千葉市美術館コレクション選 1		2,715	1,174											3,889	
千葉市美術館コレクション選 2			2,466	592										3,058	
千葉市美術館コレクション選 3				6,803	2,143									8,946	
千葉市美術館コレクション選 4					2,843	186								3,029	
千葉市美術館コレクション選 5						3,004	630							3,634	
千葉市美術館コレクション選 6							3,228	502						3,730	
千葉市美術館コレクション選 7								3,421						3,421	
千葉市美術館コレクション選 8									4,341	759				5,100	
千葉市美術館コレクション選 9										3,566				3,566	
千葉市美術館コレクション選 10											4,963	1,525		6,488	
千葉市美術館コレクション選 11												8,287	5,392	13,679	
千葉市美術館コレクション選 12												1,017	1,017		
展覧会観覧者数計(A)		5,085	6,700	14,251	11,247	8,260	9,733	7,221	7,859	7,918	8,934	18,945	37,290	143,443	
貸出施設利用者	市民ギャラリー	130	0	373	482	561	828	267	513	242	300	0	0	3,696	
	講座室	104	115	47	155	14	27	86	157	203	87	10	101	1,106	
	講堂	179	222	244	263	497	920	122	289	418	35	235	373	3,797	
	ワークショップルーム	119	38	50	91	0	60	273	130	113	70	115	30	1,089	
	市民アトリエ 1	13	16	14	23	0	29	16	35	53	42	0	22	263	
	市民アトリエ 2	41	16	90	19	55	17	30	74	84	54	34	56	570	
	さや堂ホール	229	135	190	280	1,066	1,677	142	401	1,924	155	129	62	6,390	
貸出施設利用者 計(B)		815	542	1,008	1,313	2,193	3,558	936	1,599	3,037	743	523	644	16,911	
その他事業利用者	美術ライブラリー(4階)、図書室(10階)	556	675	1,074	1,056	989	1,053	852	789	647	590	618	598	9,497	
	子どもアトリエ(4階)	396	622	845	633	764	958	835	953	840	730	1,065	1,222	9,863	
	講座・講演会等	0	53	68	35	0	0	43	53	0	8	246	0	506	
	コンサート・ワークショップ等	0	0	26	28	24	20	48	105	0	138	319	73	781	
	学校プログラム・実習等	0	26	94	0	19	30	154	48	0	62	74	0	507	
	さや堂イベント	0	0	0	0	0	0	0	0	0	61	145	0	206	
その他事業利用者 計(C)		952	1,376	2,107	1,752	1,796	2,061	1,932	1,948	1,487	1,589	2,467	1,893	21,360	
他施設利用者	託児ルーム	0	0	0	3	0	0	0	5	0	4	0	0	12	
	ミュージアムショップ売上人数	807	1,056	2,631	1,692	786	1,267	900	973	1,348	1,164	2,346	1,678	16,648	
	レストラン来客数	100	8	150	291	16	0	298	260	295	220	468	552	2,658	
	カフェ来客数	198	515	798	657	529	556	560	639	522	624	984	937	7,519	
	バル来客数	84	0	46	144	0	0	133	93	173	118	160	186	1,137	
他施設利用者 計(D)		1,189	1,579	3,625	2,787	1,331	1,823	1,891	1,970	2,338	2,130	3,958	3,353	27,974	
美術館 利用者 総計(A)+(B)+(C)+(D)		8,041	10,197	20,991	17,099	13,580	17,175	11,980	13,376	14,780	13,396	25,893	43,180	209,688	
市民ギャラリー・いなげ	企画展等の入場者・参加者	展示室利用者(E)	357	463	517	952	659	1,052	791	1,084	575	717	1,369	902	9,438
		制作室利用者(F)	278	211	276	387	1,031	878	439	1,143	246	1,252	1,523	577	8,241
		世界児童画展千葉県展				624									624
		千葉市中学校美術部展					633								633
		海の記憶を伝える稲毛アーカイブ展						1,226							1,226
		第5回いなげ八景水彩画コンクール展								859					859
		ギャラリー・いなげ新春展										523			523
		千葉ゆかりの作家展 瀧田清展											1,442		1,442
		近隣学校児童生徒作品展											1,286		1,286
		旧神谷伝兵衛稲毛別荘(G)	516	640	359	392	642	998	547	1,143	637	528	1,123	503	8,028
		ギャラリー庭園(H)	558	723	680	188	255	657	448	227	66	113	182	154	4,251
		市民ギャラリー・いなげ 利用者 総計(E)+(F)+(G)+(H)		1,709	2,037	1,832	1,919	2,587	3,585	2,225	3,597	1,524	2,610	4,197	2,136

(9) 利用者懇談会

＊施設に対する評価や新たなニーズの把握等を目的として、12月3日(金)に実施。利用者代表・地域の小中学校関係者・地元商店街関係者・地域NPO関係者でメンバーを構成した。

(10) 新たな文化プログラムとの連携

＊学芸員が「千の葉の芸術祭実行委員会」の実行委員として、「千の葉の芸術祭」の企画運営に参画した。また、コロナ禍での開催であり、旧神谷伝兵衛稲毛別荘が「千の葉の芸術祭」の写真芸術祭の展示会場、ギャラリー棟1階が「ななめな学校」連続ワークショップ成果展の展示・トークイベント会場となったことから、新型コロナウイルス感染症防止対策等協力を行い、安全安心な開催に努めた。



II 自主事業

講習会等の開催

講座名等			開催日	講師	参加者数 (人)	
①	山口マオ版画ワークショップ		開催中止	—	—	
②	写真撮影講座	オンライン写真講座 カメラを通して発見する 身近な世界	9/19(日) ～10/20(水)	白井綾(写真家)	10	
		夜景を撮る	開催中止	—	—	
③	創造海岸いなげ美術講座	色であそぼう 〇〇どうぶつ	12/11、12 (土、日)	NAMIKI(デザイナー)	15	
計					25	



② 広報誌「海気通信」 ※いなげお話会が中止のため発行中止

(イ) ホームページの充実

① ブログ、ツイッターでの発信



② web上からの問い合わせフォーム

③ 他団体ホームページに掲載

(ウ) ユーチューブでの動画配信

*千葉県民ギャラリー・いなげ全体の紹介動画と旧神谷伝兵衛稲毛別荘紹介動画の二つをユーチューブで配信した。



(8) ボランティアとの協働

*美術担当教諭や地域住民などによって組織し、当ギャラリーの講座、イベント等にご協力いただいた。

⑦ 花壇ボランティア (稲毛区民2人、若葉区民1人、計3人)

⑧ 芸術ボランティア (学校教員8人、その他4人、計12人)

⑤ 市内小中学校との連携

- a 世界児童画展参加 (小学校8校、中学校2校)
- b 近隣学校児童生徒作品展参加 (稲毛小学校、稲丘小学校、稲毛中学校)
- c 地域探訪 (小学校1校 中学校1校)
- d 中学校美術部展参加 (中学校19校)
- e 出前授業 (小学校1校)



⑥ 公民館との連携

稲毛公民館との連携事業「いなげ八景を描く」

5月1日、8日、15日(全て土)の全3回。15人参加。

千葉都市文化賞2017景観街づくり部門優秀賞を受賞した「いなげ八景」を巡り、稲毛の海辺の記憶を残す8つの名所とその歴史を紹介。小山博氏を講師に迎え、水彩画の下書きから着色までを行った。



⑦ 地域人材育成

市民が開催する講座やワークショップを支援し、サークル活動の立ち上げや継続を支援した。



(6) 施設貸出業務

(ア) 市民ギャラリー・いなげ施設貸出業務

施設名	開館日数(日)	入館者数(人)	利用団体数(団体)	施設利用率(%)
展示室	308	9,438	33	73.3
制作室	308	8,241	35	52.5

(イ) 旧神谷伝兵衛稲毛別荘の公開業務 (開館日数308日/入館者数8,028人)

(7) 広報

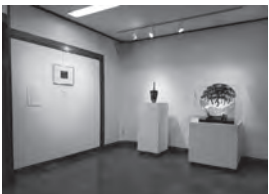
(ア) 印刷物の発行

① リーフレット

「いなげ de あーと 企画展とイベント・散策マップ」(事業概要)

「千葉市民ギャラリー・いなげ」(利用案内)

「旧神谷伝兵衛稲毛別荘」(利用案内)

10月	旧神谷伝兵衛稲毛別荘紹介動画上映	
11月	第5回いなげ八景水彩画コンクール展(入選以上の作品展示)	
12月	自主事業「色であそぼう〇〇どうぶつ」の成果展(工程や作品のスライド上映)	
2022年 1月	・ギャラリー・いなげ新春展(サークル講師の作品展) ・新春美術小品展(千葉市教員OBの作品展)	
2月	・企画展で使用(千葉ゆかりの作家展) ・千葉市民ギャラリー・いなげ収蔵作品展	
3月	旧神谷伝兵衛稲毛別荘紹介動画上映	

(5) 地域連携事業

① 稲毛あかり祭「よとぼし」特別夜間公開 ※開催中止

② いなげお話し会 ※開催中止

③ 第5回いなげ八景水彩画コンクール(公募)

*千葉市在住・在勤者を対象にした一般部門と小学生・中学生部門を設け、いなげをテーマにした水彩画を公募し入選者を表彰した。(応募 一般部門54点、小学生・中学生部門46点)

応募期間 4月24日(土)～10月31日(日)

作品展 11月13日(土)～28日(日)



④ 音声ガイドで巡るいなげ八景

*ガイドブックを参考に、いなげ八景の一つ一つの場所でポッドキャストを使用した音声ガイドを聞きながら稲毛の街歩きをした。9人参加。



② 展示会場として活用

a 「千の葉の芸術祭」では1階、2階、地下室を第一線で活躍するアーティスト2人の写真展(横湯久美・金川晋吾)の会場として使用し、好評を博した。



b 2月の「千葉ゆかりの作家展」では別荘を第2会場として使用した。



(4) ミニ企画展(ロビーを整備・活用した展覧会)

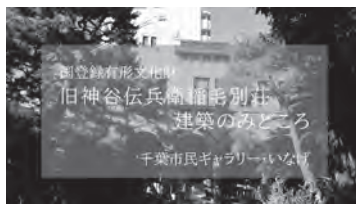
月	内容	
4月	江戸の面子と昭和のめんこ	
5月	千葉市民ギャラリー・いなげスタッフ展	
6月	海月岳人展	
7月	企画展で使用(世界児童画展)	
9月	山岸翔作品展	

②	教職員を対象とした画材研修会	8/4(水)	大塚義孝(べんてる株式会社)	16	
③	教職員実技研修会	8/5(木)	宮本善紀(中学校講師)	8	
④	夏休み子ども美術講座	8/8、9(日、月)	佐藤央育	16	
⑤	秋休み子ども美術講座	10/9、10(土、日)	Namiki(デザイナー)	14	
⑥	秋のスケッチ会	10/30(土)	NARAMIX	13	
計				80	

(3) 別荘活用事業

① 旧神谷伝兵衛稲毛別荘紹介動画上映

*旧神谷伝兵衛稲毛別荘の紹介動画を作成し、11/13(土)～28(日)の間、別荘1階の洋間で動画を繰り返し上映した。また、誰もが自由に視聴できるようにYouTubeで配信した。



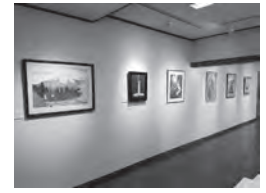
④ 第5回いなげ八景水彩画コンクール展
11月13日(土)～28日(日) (入場者859人)

「いなげお話し会」にて地域住民と共に選定された「いなげ八景」に因み「いなげ八景水彩画コンクール」を開催。広く公募した水彩画の中から入選作品を展示した。



⑤ ギャラリー・いなげ新春展
2022年1月4日(火)～16日(日) (入場者523人)

千葉市民ギャラリー・いなげを拠点に活躍する地域の優れた作家15人による小品展。多様なジャンルの作品を展示した。



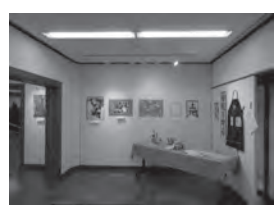
⑥ 千葉ゆかりの作家展 濱田清展
2月3日(木)～20日(日) (入場者1,142人)

千葉在住の濱田清の45年にわたる画業を振り返る大規模な作品展。
ギャラリー棟では作家が長年制作を続けてきた詩情あふれる大作、旧神谷伝兵衛稲毛別荘では画業のきっかけとなった房総民話や神話絵本などの展示を行った。



⑦ 近隣学校児童生徒作品展
2月3日(木)～20日(日) (入場者1,286人)

千葉市民ギャラリー・いなげの近隣学校に通う児童生徒の日ごろの学習成果を作品として展示した。



(2) 講習会・イベントの開催

講座名等		開催日	講師	参加者数(人)	
①	春のスケッチ会	4/24(土)	佐藤 央育(美術家)、 NARAMIX(美術家)	13	

令和3(2021)年度 千葉市民ギャラリー・いなげの活動

I 指定管理受託事業

1 展示事業

(1) 展覧会 (7件、入場者6,293人)

① 世界児童画展千葉県展

2021年7月27日(火)～8月1日(日) (入場者624人)

世界の子どもたちの優秀作品と千葉県内入選以上の作品約250点を展示。
千葉市からは小中併せて10校参加。



② 千葉市中学校美術部展

8月11日(水・祝)～22日(日) (入場者633人)

市内中学校美術部合同展で19校が参加。日頃の活動
成果を発表した。



③ 海の記憶を伝える稲毛アーカイブ展

8月21日(土)～9月12日(日) (入場者1,226人)

千葉市の取組みである「千の葉の芸術祭」の一環として実施。海岸の埋立と共に大きく変化を遂げてきた稲毛の歴史に関する写真や様々な資料を、地域住民の方々の記憶を通して伝える展示を行った。

会期中は千葉市民ギャラリー・いなげが約10年にわたって収集した写真や、地域住民の思い出話について、写真提供者との出会いや、企画展の見所を通して伝えるトークイベントも開催した。



II 自主事業

(1) 講師派遣

a 講師派遣 (10件)

講座名(主催者・場所)	開催日	回数	講師
① 吉田博講演会(パラミタミュージアム)	4/11(日)	1	西山純子(上席学芸員)
② 武蔵野美術大学企画展関連イベント参加作家クロストーク(武蔵野美術大学)	6/12(土)	1	森啓輔(学芸員)
③ 川瀬巴水講演会(大田区立郷土博物館)	9/5(日)	1	西山純子
④ 芸術文化政策特論(武蔵野美術大学)	9/6(月)～12/20(月)	13	森啓輔
⑤ 千葉経済大学公開講座「オープンアカデミー」(千葉経済大学)	10/9(土)	1	宮本勇治(事務長)
⑥ あざみ野コンテンツポリリーvol.12「対木裕里 ばらばらの速度」関連イベント 対談(横浜市民ギャラリーあざみ野)	10/30(土)	1	森啓輔
⑦ 例会卓話(千葉中央ロータリークラブ)	11/11(木)、 2022年3/14(月)	2	山梨絵美子(館長)
⑧ 芸術文化政策特論II(武蔵野美術大学)	12/6、13、20(全て月)	3	森啓輔
⑨ Art collective 目[mé] 講演会(大阪大学COデザインセンター)	12/10(金)	1	畑井恵(学芸員)
⑩ 武蔵野芸術大学公開講座2021「べらべらの彫刻」についてべらべら語る会(武蔵野美術大学)	2022年1/23(日)	1	森啓輔

b 各種委員等 (4件)

委員名等(主催者)	開催日	回数	講師
① ホルベインスカラシップ審査会(ホルベイン画材㈱)	7/20(火)	1	畑井恵
② 印西市文化財審議会(印西市教育委員会)	7/21(水)、2022年3/15(火)	2	西山純子
③ 福島県立美術館収集評価委員会(福島県立美術館)	開催中止	1	西山純子
④ 松戸市美術品等選定評価委員会(松戸市教育委員会)	3/30(水)	1	西山純子

(2) イベント事業

イベント名等(場所)	開催日	出演及び協力	参加者数(人)
① 新春の獅子舞(1階さや堂ホール)	2022年1/15(土)	登渡神社登戸神楽囃子連	61
② 千葉交響楽団メンバーによるコンサート「弦楽四重奏が奏でるジャポニズムの世界」(1階さや堂ホール)	2022年2/26(土)	小泉百合香・田口史織・高田美樹子・海老澤洋三(千葉交響楽団)	56
計			117

(3) 地域連携事業

＊引き続き科学館との相互割引を実施したほか、観光協会、商工会議所等との情報共有を強化。また、新たな取組みとして、そごう千葉店と展覧会の相互広報協力と会員割引を開始した。

利用者数(科学館から美術館への来館) 122人

(4) スポンサーシップ制度(寄附)

＊法人・個人を問わず、美術館及び芸術の発展を支援したい方に、スポンサーとして参加できる制度を創設し、美術を愛する方々の輪を広げた。

寄附者 74件(2,062,500円)

*学芸員が「千の葉の芸術祭実行委員会」の実行委員として、「千の葉の芸術祭」の企画運営に参画した。また、コロナ禍での開催であり、美術館が「千の葉の芸術祭」の写真芸術祭の展示会場となったことから新型コロナウイルス感染症防止対策等協力を行い、安全安心な開催に努めた。

(7) 広報

a ホームページ、SNSの活用

*前年度リニューアルしたホームページを使いやすいように改善し、アクセスしやすいように整備した。また、引き続きSNS(ツイッターやインスタグラム)を活用し、新規層の開拓に努めた。

ツイッターでは展覧会の見どころやイベントについての情報発信により、前年度比で表示数(インプレッション数)は5,497,468回、フォロワー数は1,368人増加し、年度末時点でフォロワー数は8,226人となり、大幅に増やすことができた。

b マスコミとの連携

c 有料広告

d 月刊誌・ウェブ媒体への情報提供

e 市のメディアの活用

f 展覧会スケジュールの制作、配布

(令和4年度分年間スケジュール、2022年3月)

g 美術館ニュースの発行

[施設使用許可][施設維持管理業務][経営管理業務]

(1) 開館日・開館時間

次の休館日を除く通年開館とした。

- ・毎月第1月曜日(祝日法の休日にあたるときは、その翌日)
- ・メンテナンス対応日(電気点検のための停電日等)
- ・年末年始(12月29日～1月3日)

施設名	開館・利用可能時間
展示室(常設展示室を含む)、子どもアトリエ、図書室、市民ギャラリー	午前10時～午後6時(金・土曜日は午後8時まで)
さや堂ホール、講堂、講座室、市民アトリエ1・2、ワークショップルーム	午前10時～午後9時

[新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う貸出時間の変更]

- ・4月1日～9月30日の間、貸出時間を午後8時までとした。

(2) 施設貸出業務

施設貸出使用状況

施設名	使用件数(日/コマ)	使用(%)
1 市民ギャラリー	163日	32.00
2 講座室※	242コマ	23.18
3 講堂※	259コマ	24.81
4 さや堂ホール※	394コマ	37.74
5 ワークショップルーム※	169コマ	16.19
6 市民アトリエ1※	391コマ	37.45
7 市民アトリエ2※	127コマ	12.16

※1日3コマ(10:00～13:00、13:00～17:00、17:00～21:00)

(3) 託児ルームの活用

*「ちばしび託児サービスデー」を各企画展の会期中に実施。

企画展名称	実施日時	利用人数(組)	特記
大・タイガー立石展	5/22(土)	1	
平木コレクションによる 前川千帆展	7/25(日)	3	
	9/4(土)	-	中止
福田美蘭展 千葉市美コレクション遊覧	11/23(火・祝)	5	
ジャポニスム―世界を魅了した浮世絵	2022年1/15(土)	4	
	2/26(土)	-	中止
計		13	

(4) 美術館ふれあい会議 ※開催中止。

(5) 千葉市美術館評価委員会 ※開催中止。

(6) 新たな文化プログラムとの連携

藁科英也「獨歩 北大路魯山人の作陶と古典復興の時代(2)」

令和2(2020)年度 千葉市美術館の活動

令和2(2020)年度 市民ギャラリー・いなげ 企画展及び施設の利用者

e 外部機関誌等への執筆 (8件) *2021年度内刊行分

- ・ 染谷美穂「鳥文斎栄之の肉筆画における署名書体と印章について：花押、署名、印章の使用期間と、合作、狂歌合・俳諧集の挿絵等からみる草書体署名「鳥文斎栄之画」の使用意図」『浮世絵芸術』182巻、2021年7月20日、pp.5-33
- ・ 染谷美穂「栄之と歌麿—交差する美人像—」『哲学』第148集(林温教授 退職記念号)、2021年10月23日、pp.143-177
- ・ 田辺昌子「享保-宝暦 筆彩から版彩の時代へ」『平木浮世絵コレクション大全 論考・解説編』 2021年5月5日、pp.15-19
- ・ 田辺昌子「美の十選 外国人が愛した浮世絵」日本経済新聞 2022年3月23日～
- ・ 松尾知子「浦上玉堂を伝えた人と言葉 春琴の役割から」『浦上玉堂関係叢書 浦上玉堂父子の藝術』浦上家史編纂委員会編・発行 学藝書院制作発行 2021年5月30日 pp.525-551
- ・ Matsuo Tomoko(松尾知子), Translation by Akiko Takesue, “The ‘Place’ of Netsuke in the History of Art in Japan” (Akiko Takesue, “The Reception of Netsuke in the West since Japonisme (Notes Accompanying the Translation of Matsuo Tomoko’s “The ‘Place’ of Netsuke in the History of Art in Japan”) *JORUNAL OF JAPONISME* 7 (2022) 、Mar.22, 2022、pp.50-87
- ・ 森啓輔「川内理香子」『VOCA展2022 現代美術の展望 新しい平面の作家たち』「VOCA展」実行委員会、公益財団法人日本美術協会 上野の森美術館、2022年3月、pp.032-[033]
- ・ 山梨絵美子「「発見された日本の風景 美しかりし明治への旅」によせて」『視る 京都国立近代美術館ニュース』516号、2022年2月28日、pp.2-5

5. ミュージアムショップ運営

ミュージアムショップ売上人数 16,648人

6. 友の会運営

a イベント ※開催中止。

b 会員数 (2022年3月31日現在) 一般・ライト会員 1,492人

② アーティストプロジェクト報告書

『つくりかけラボ03 武藤亜希子|C+H+I+B+A ART シェアばたけ』

編集・発行：千葉市美術館 2021年10月

畑井恵「はたけをたがやし、たねをまく一表現にふれる方法への手がかり」



③ アーティストプロジェクト報告書

『つくりかけラボ04 飯川雄大|デコレータークラブ—0人もしくは1人以上の観客に向けて』

編集・発行：千葉市美術館 2022年2月

服部浩之「美術館の潜在力を拡張するプロジェクト」

飯川雄大・畑井恵、杉原環樹(執筆・編集)「アーティストインタビュー」

畑井恵「いつかどこかであなたがカニに出会えるように一信じ続ける態度が形になるとき」



④ アーティストプロジェクト報告書

『つくりかけラボ05 松本力|SFとりはうたう ひみつを』

編集・発行：千葉市美術館 2022年3月

松本力「最後までつくりかけであること」

山根佳奈「(新型コロナウイルス感染症の変異株が……)」



d 定期刊行物

① 美術館ニュース『C' n』 第98～101号 (計32,000部発行) (PDFをホームページ上でも公開)



98号 (2021年4月3日発行)



99号 (2021年6月28日発行)



100号 (2021年9月17日発行)



101号 (2021年12月24日発行)

② 千葉市美術館研究紀要『採蓮』 第24号 (700部発行) 2022年3月

染谷美穂「一八八〇年代から一九一〇年代フランスにおける浮世絵美人画の需要—栄之と歌麿を中心に—」

③ 『福田美蘭展 千葉市美コレクション遊覧』

編集：田辺昌子・畑井恵(千葉市美術館)

編集補助：染谷美穂・井吉紀子・顧可(千葉市美術館)

発行：千葉市美術館

山梨絵美子「凝り固まった視覚を解きほぐす装置—福田美蘭の作品」

田辺昌子「古を思い、今を見つめる人—千葉市美術館浮世絵コレクションと福田美蘭」

福田美蘭「図版解説」

「福田美蘭年譜」、「参考文献」、「主な収蔵先」



④ 『ジャポニズム—世界を魅了した浮世絵』

編集：千葉市美術館

執筆：田辺昌子・山根佳奈・染谷美穂(千葉市美術館)、クリスティン・ギヴィスコス(ラトガーズ大学 ジーマリ美術館)、アンナ・チェルニシェヴァ(プーシキン美術館)、ユリア・クレショヴァ(モスクワ大学・慶應義塾大学)

翻訳：まい子・ベア、ユリア・クレショヴァ、染谷美穂

発行：千葉市美術館



田辺昌子「ジャポニズムを通して浮世絵を視る」

クリスティン・ギヴィスコス「ジマリー美術館のジャポニズム作品—重要な版画コレクション」

アンナ・チェルニシェヴァ「国立A・S・プーシキン造形美術館(プーシキン美術館)収蔵のニコライ・ニコラエビッチ・ゼデラーとアンナ・バヴロヴナ・ソモヴァ=ゼデラーの版画について」

染谷美穂「コラム1 ジャポニズムがもたらしたもの—写楽が「天才絵師」として評価された経緯から—」

ユリア・クレショヴァ「コラム2 20世紀ロシア美術に貢献した3人の芸術家」

山根佳奈「コラム3 アメリカのジャポニズムと木版画」

「絵師解説」、「浮世絵用語解説」、「参考文献」、「ヨーロッパにおける浮世絵受容およびジャポニズム関連年表」

b 展覧会の出品目録等

*企画展・常設展ごとに制作し、会場で配布したほか、千葉市美術館ホームページ上にPDFを掲出。

c 活動報告書等

*「つくりかけラボ」の報告書。印刷物として配布したほか、千葉市美術館ホームページ上にPDFを掲出。

① アーティストプロジェクト報告書

『つくりかけラボ02 志村信裕「影を投げる」』

編集・発行：千葉市美術館 2021年7月

畑井恵「投げ合う影の行く末」

志村信裕・佐藤慎也・畑井恵(進行)、白坂由里(構成・文)「関連トーク インスタレーションの新しい種。プロジェクト空間をどうつくるか」



d ボランティアスタッフの育成

自ら企画立案し、周囲を巻き込みながら活動を実らせていくといった、主体的に活動できるボランティアを育成する。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により活動の内容が限られたが、オンラインでの自主勉強会の実施や、常設展示及び企画展でのおすすめの作品について、ギャラリー・トークに代わる来館者向け配布物を作成するなど共に検討した。

e 市民との協働

登録ワークショップ・パートナー制度を設けた中で、市民と美術館の協働を進めていくにあたり、制度への関心を幅広い世代の市民にアピールするための手法として、オンラインの活用などを検討した。

(2) 出版活動

a 展覧会図録(4冊)および掲載論文等

① 『大・タイガー立石展 TIGER Tateishi: The Retrospective』

構成：工藤健志(青森県立美術館)、滝口明子(うらわ美術館)、平野到(埼玉県立近代美術館)、牧野裕二(高松市美術館)

編集：菊地真央(埼玉県立近代美術館)、庄子真汀・森啓輔・藁科英也(千葉市美術館)

英訳：小川紀久子

発行：千葉市美術館、青森県立美術館、高松市美術館、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館



榎木野衣「積算される不二タイガー立石の「立石×3」世界」

篠原資明「ニタリア国トラ夢譚」

市毛富美子(聞き手：菊地真央)「タイガーとの小さな旅」

工藤健志「もう一度、「観光芸術研究所」を勘考する」

平野到「イタリアと巡りあつて」

滝口明子「幕間より」

牧野裕二、平野到、滝口明子、工藤健志「主要作品解説」

「文献目録」、「年譜」

平野到「あとがきにかえて」

② 『平木コレクションによる 前川千帆展』

編集：西山純子(千葉市美術館)

展示編集協力：公益財団法人平木浮世絵財団(佐藤光信・森山悦乃・松村真佐子)

発行：千葉市美術館

佐藤光信「前川千帆展の開催に寄せて」

西山純子「前川千帆一本版画の仕事を中心に」

森山悦乃「前川千帆と温泉一版画浴泉譜の世界」

松村真佐子「コラム 前川千帆と年賀状—平木コレクションを中心に」

「年譜」、「主要参考文献」



⑦	「たくさんのふしぎ」特集展示	4/17(土)～2022年3/31(木)	2,030
⑧	きくちちき《どうぶつ》資料展示	11/20(土)～2022年3/31(木)	2,671
〈イベント〉			
⑨	ワークショップ「おもいで色見本帳」をつくろう(講師：書架 Lab.)	7/24(土)	14
⑩	ワークショップ「展覧会カタログ大解剖座談会」(講師：丸山晶崇)	2022年2/13(日)	9
⑪	ワークショップ「ガリ版でつくるリトルマガジン」(講師：神崎智子)	2022年3/6(日)	10
〈鑑賞教育プログラムの実施〉			
⑫	みる・しる・できるびじゅつプログラム内「よむよむびじゅつ」	開催中止	—
計			29,406



④「あのと読むんだ、あの本が」



⑨「おもいで色見本帳」をつくろう



b 10階美術専門図書室の運営

専門的な調査・研究を目的とした来館者に対応し、専門図書、貴重書の閲覧の場所として運営。

c 利用者数(4階および10階) 8,773人

d 図書の選定・購入 雑誌・図書の購入数 3,005冊

4. 調査研究事業

(1) 調査研究

a 浮世絵版画の色材に関する研究

ジャポニスム展の開催にあわせ、新たに輸出用に浮世絵版画を加工した縮緬絵を視野に入れ、制作年代の問題等、色材のことを絡め、学芸員が「江戸後期の文化・芸能におけるパトロネージュ構造の解明：吉原を中心に」をテーマとした研究会で発表した。

b 亜欧堂田善の研究

江戸時代後期に活躍した洋風画家である亜欧堂田善(1748-1822)について、田善にゆかりの深い福島県立美術館と共同で作品の調査・研究を行った。本年度は須賀川市立博物館・早稲田大学図書館・秋田県立美術館・秋田市立千秋美術館・神戸市立博物館・東京国立博物館・東京藝術大学大学美術館・府中市美術館・神奈川県立歴史博物館・広島県立歴史博物館・立花家史料館等で作品調査を行った。

c コレクション(現代美術)のデジタルアーカイブ

コレクション作品(現代美術)及び関連する写真、印刷物等資料のデジタルアーカイブに関して、常設展の「特集：吉澤美香」の展示作品を撮影し、作家、関係者へのインタビュー調査を行った。作家によるインタビュー映像を含めて詳細な記録を取り、今後のデジタルアーカイブの構築に向けて、それらデジタルデータを有効活用していく。

⑰	あそことば	3/10(木)～4/3(日)		298
⑱	持ち帰りワークショップ「はじめよう、プラカゴのある暮らし。」	3/26、27(土、日)、 4/2、3(土、日)	岩沢兄弟	134

(6) ワークショップルーム(みんなで作るスタジオ)の活用

*企画展・常設展に関連するワークショップをはじめ、親子向けのワークショップ・イベント、パフォーマンスや滞在型の制作活動など、多様なニーズに対応できるスタジオ。「みる・しる・できるびじゅつプログラム」などの学校連携プログラムの会場としたほか、企画展・常設展関連のワークショップ、登録パートナーによるワークショップの会場として活用した。

実施企画 講座等種別	開催日	参加者数(人)
1. 企画展関連イベント・ワークショップ (6件、うちオンライン2件)	5/1 他	55
2. コレクション理解のためのイベント・ワークショップ (5件、うちオンライン4件)	4/1 他	44
3. 親子向けのイベント・ワークショップ (5件)	5/16 他	102
4. 鑑賞教育プログラムの実施 (のべ27校)	5/14 他	920
5. 「つくりかけラボ」関連イベント・ワークショップ	11/5	16
6. ボランティアスタッフによるワークショップ	開催中止	-
7. 中・高校生向けプログラム	1/29	8
8. 中学生の職場体験学習	6/2	2
9. 登録パートナーによるワークショップ (17件、うちオンライン5件)	5/16 他	265
10. びじゅつライブラリー関連イベント (2件)	7/24 他	24
計		1,436

(7) 図書室の管理運営

a 4階美術図書室(びじゅつライブラリー)の活用

美術を中心に多様な図書約4,500冊を常時開架し、幅広い来館者の利用に応える美術図書室として昨年度新設した。子ども向け・若年層向けの選書を強化し、展示室や他の諸室とも連動したイベントの開催により、美術情報の発信・交流基地として地域の文化的環境づくりに努めた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で人数は限られたが、同じフロアにある「つくりかけラボ」とともに、低年齢層や親子連れといった新しい来館者層を一定数獲得することができた。

	実施企画 講座名等	開催日	参加者数(人)
〈選書・特集コーナーの設置〉			
①	企画展関連図書特集コーナー	4/1(木)～2022年3/31(木)	9,497
②	常設展関連図書特集コーナー	4/1(木)～2022年3/31(木)	9,497
③	武藤亜希子氏による選書	5/20(木)～7/4(日)	1,647
④	現代作家による選書コーナー 「あのと時読んだ、あの本が」	10/16(土)～12/26(日)	1,669
⑤	常設展関連図書特集「元永定正のえほん」	2022年1/1(土)～3/31(木)	1,806
〈書籍や資料等による展示企画の実施〉			
⑥	「図書室で新たな出会いを生む「余白しおり」をつくろう 余白書店 in 千葉市美術館」	4/1(木)～6/30(水)	556



b 企画関連事業

	事業名	開催日等	講師	参加者数(人)
〈つくりかけラボ03 C+H+I+B+A ART シェアばたけ〉				
①	オープンワークショップ 「きみの実をつくろう」	4/15(木)～7/4(日)		1,144
②	アーティストワークショップ 「p+l+a+n+t」	4/25(日)、5/4、30(火・祝、日)	武藤亜希子	45
③	アーティストワークショップ 「ぐるぐる+ひょうたん」	5/16(日)	武藤亜希子	15
④	アーティストワークショップ 「ぐるぐる+花」	6/13(日)	武藤亜希子	14
⑤	アーティストワークショップ 「このみ+きのみ」	6/27(日)	武藤亜希子	7
〈つくりかけラボ04 デコレータークラブ—0人もしくは1人以上の観客に向けて〉				
⑥	パラパラアートブックラリー「猫の小林さんのパラパラブックをつくろう!」	7/4(日)～10/3(日)		1,173
⑦	ガイドツアー	9/11、18、25、10/2 全て(土)	飯川雄大	54
〈つくりかけラボ05 SF とりはうたう ひみつを〉				
⑧	スズメの目撃情報シート	10/16(土)～12/26(日)		323
⑨	宇宙巣箱のSFラジオ局：すこしふしぎな話収集シート	10/16(土)～12/26(日)		205
⑩	アーティストトーク	10/24(日)	松本力	6
⑪	アニメーションワークショップ「SF(スズメフィクション)」	11/5(金)	松本力、VOQ(音楽家)	16
⑫	宇宙巣箱のSFラジオ局：すこしふしぎな話 録音(ラジオDJ体験)	11/23(火・祝)～12/26(日)		37
⑬	VOQ+松本力 ライブパフォーマンス	12/11(土)	VOQ(音楽家)、市川平(特殊照明作家)、松本力	25
〈つくりかけラボ06 キメラ遊樂園〉				
⑭	キミラ遊び	2022年 1/13(木)～4/3(日)		2,962
⑮	岩沢兄弟のキメラ遊樂園マルシェ	2/27(日)	ゲスト：岩沢兄弟+Tokyo Laser lab、ゴキチカ、デイリーポータルZ編集部、どじらば、HELLO GARDEN、ひつじシール、ミッケ 演奏・DJ：おきあがり赤ちゃん、Rent:A*Car(いわさわたかし・保田憲一)、どいちゃん(元OMCHANTONE)、田中元子 a.k.aオイラー、DJ Foomin 協力：café de saizan、盛	250
⑯	アーティストワークショップ「なんか変? キメラランドの地図を作ろう!」	3/6(日)	岩沢兄弟 協力：atelier なないろ	32



③ つくりかけラボ05

松本力 | SFとりはうたう ひみつを

2021年10月16日(土)～12月26日(日)

招聘作家：松本力(アーティスト) (入場者2,355人)

テーマは「SF」。アーティストの松本力は、人間の社会生活からみたスズメたちとの共生に注目。人間の世界とスズメの世界は、それぞれどのような集合をもって重なり合っているのか。会場では、そのひみつを「スズメ・プロジェクト」の関数として、私たちの身の周りにある少し不思議なイメージや話を集め、「宇宙巣箱のSFラジオ局」や音声コンテンツ、スズメ目撃情報マップ、アニメーションなどいくつかのかたちでインスタレーションに組み込んでいった。



④ つくりかけラボ06

岩沢兄弟 | キメラ遊物園

2022年1月13日(木)～4月3日(日)

招聘作家：岩沢兄弟(クリエイターユニット)

(入場者3,226人)

「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛ける岩沢兄弟が、美術館の中に「キメラ遊物園」をオープンした。「キメラ遊物園」とは、いろいろな人の「アイデア」やたくさんの種類の「もの」がかけ合わさって、思いもよらない何かが生み出される期間限定のファクトリー。遊物園を訪れたみんなのちょっとした困りごとや、こんなものがあつたらいいな、という気持ちにに応じて、いたずら心いっぱいの岩沢兄弟が「もの」との遊び方を考えた。



(5) 子どもアトリエ(つくりかけラボ)の運営

「コミュニケーションがはじまる」、「五感でたのしむ」、「素材にふれる」、いずれかのテーマに沿った作品作りが可能なアーティスト1組を、3ヶ月を1クールとして招聘する事業。令和3年度は新型コロナウイルス感染症対策に留意しつつ、「参加・体験」のしほみを工夫しながら、4本の企画を実施した。リピーター育成のためのスタンプカード「つくりかけパスポート」は新たに499枚配布し、837回押印した。

a 実施企画 (4件 入場者数9,934人)

① つくりかけラボ03

武藤亜希子 | C+H+I+B+A ART シェアばたけ

2021年4月15日(木)～7月4日(日)

招聘作家：武藤亜希子(現代美術家) (入場者1,985人)

「素材にふれる」をテーマに空間をつくりかえた。会場にはたくさんの実や草花が集まる「シェアばたけ」が登場。訪れた多くの人々が関わり、皆で畑を耕すように時間をかけて育てていった。「きみの実をつくろう」のワークショップを会期中いつでも開催。

カラフルな素材を使って自分だけの実をつくり、会場に飾り、「はたけ」は毎日変化していった。作家と一緒に、カラフルな素材をつかって「シェアばたけ」にくわえる植物や実をつくるアーティストワークショップも開催。



② つくりかけラボ04

飯川雄大 | デコレータークラブ—0人もしくは1人以上の観客に向けて

2021年7月14日(水)～10月3日(日)

招聘作家：飯川雄大(現代美術家) (入場者2,368人)

「五感でたのしむ」をテーマに、美術館の建物全体を利用した大規模なインスタレーション作品を展開した。「デコレータークラブ」とは、海藻や小石を身につけて姿を変えるカニのこと。このカニを発想の原点に、鑑賞者の気づきや反応を誘うさまざまな仕掛けを施し、訪れる人びとの関わりを経て会場が変化していった。



- c 鑑賞リーダー(少人数グループでの鑑賞) ※実施中止。
 *規模を縮小して鑑賞リーダー学習会を実施した他、新鑑賞プログラム「みる・しる・できる びじゅつプログラム」における鑑賞リーダー活動の準備として、鑑賞教育の受入現場の見学や、各プログラムの詳細を学ぶための研修を実施した。
- d ボランティアスタッフによるワークショップ ※開催中止。
- e ボランティアのスキルアップ
 - ① 美術館のコレクションに関するボランティアの知識向上
 担当学芸員より常設展示作品のキャプション・解説データを資料として毎月提供した。
 - ② 自主的な研修・勉強会の開催
 現代アートを楽しむ会 3回
 コレクション勉強会 8回
 オンラインギャラリートーク勉強会 5回
 もくもく会 2回
- f ワークショップサポーターの募集、人員の育成
 *募集せず(対面式のワークショップが開催できなかったため)

(4) 地域との連携によるアウトリーチプログラム

- a 千葉アートネットワーク・プロジェクト(通称WiCAN)
 WiCANプロジェクト・ワークショップ
 (君の中にいる)ヒーロー ～a hero (lies in you)～
 2022年2月20日(日)～3月13日(日)に4回開催
 講師:山本高之(アーティスト) ファシリテーター:WiCANプロジェクトメンバーの大学生(千葉大学)
 主催:千葉大学教育学部芸術学研究室、千葉市美術館
 参加者数:小学生1名(事前申込)、大学生18名
- b 近隣大学との連携
 - ①千葉大学普遍教育教養展開科目『展示をつくる』『博物館実習』共通ガイダンス (受講者数10人)
 実施日 2021年5月8日(土)
 - ②千葉大学普遍教育教養展開科目『展示をつくるA』、『博物館実習B』企画展示 ※実施中止。
- c 県内の美術館・博物館との連携 ※連絡会議の開催は中止。
 *近隣美術館連絡会加盟館(千葉市美術館、千葉県立美術館、DIC川村記念美術館、佐倉市立美術館、成田山書道美術館)の活動

g 講師の派遣による講座 ※実施中止。

h 美術館公式ツイッター、インスタグラムの運営

*年間を通じて、広報目的だけでなく、教育普及的視点でも活用した。

(2) 学校等教育機関との連携による教育普及活動と団体利用の促進

a 鑑賞教育プログラム「みる・しる・できるびじゅつプログラム」 (23校、920人)

(旧事業名「小・中・特別支援学校鑑賞教育推進事業」)

*学校からの来館について、新設の常設展示室・子どもアトリエ等を活用したプログラムを用意して対応した。前年度まで小学校4年生以上を受け入れ対象としていたが、プログラム刷新にともない低年齢層の受け入れも行った。受け入れにあたっては、借上バスによる送迎も継続して実施した(送迎バスによる鑑賞教育 14校、655人)。公共交通機関を使つての来館にも同様のプログラムで対応した。感染症対策として、受け入れ人数の制限やボランティアによるサポートの中止、実施内容の一部変更を行った。

b 千葉市図工・美術担当教職員一日研修 ※実施中止。

c 美術科教員との連携

2021年11月17日(水) 千葉県教育研究会美術科研修 (参加者16人)

d 中学生の職場体験学習

1校2人受入

e 博物館実習 (実習生13校16人)

2021年8月23日(月)、10月4～6日(月～水)、11月1、2、4日(月、火、木)、12月6～8日(月～水) (10日間)

f インターンシップの受入 ※該当なし。

(3) 市民ボランティアの養成と協働

*感染症対策で中止となったギャラリートークに代わる活動を模索するため、「福田美蘭展」「ジャポニスム展」について、展覧会学芸員とボランティアによる展覧会に関する意見交換の場をオンラインで設けた。

a ボランティア人数・養成 (令和3年度のボランティア数 52人)

・6期ボランティア研修 実施日：6月7日、10月17日、2022年3月2日

・全期対象鑑賞リーダー研修 実施日：10月29日(オンライン開催)、11月5日、29日、12月20日、3月17日、23日

・企画展関連研修 実施日：10月15日、20日、1月28日

b ギャラリー・トーク ※実施中止。

*対面での活動は中止としたが、ギャラリートークに代わる活動として、常設展示室用作品ガイド「わたしのイチオシ」7～18号、企画展用作品ガイド「ボランティアと一緒に笑おう」2回を制作、受付にて配布した。

③⑥	「時の蘇生・柿の木プロジェクト」 植樹式関連ワークショップ「柿の木モビールをつくろう」	2/19(土)	田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)	22	
③⑦	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「トルコブルーの一輪挿し」	2/20(日)	羽山加奈子 (陶芸家)	16	
③⑧	常設展関連ワークショップ 「ちばしび工房 エッチング、はじめての銅版画体験」	2/23 (水・祝)	渕沢照晃 (銅版画家)	15	
③⑨	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「カラダを通して味わうアート vol.5」*	2/27(日)	高橋直裕(演劇ワークショップファシリテーター)	9	
④⑩	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「どんどん進め!パオと一緒に大冒険!〜不思議なインクでオリジナルトートバッグを描こう〜」*	3/12(土)	FLT(ワークショップクリエイター)	6	
④⑪	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「マスキングインクと水彩〜春を祝う・光の表現を楽しむアート〜」	3/20(日)	美エイジング®協会 代表 桜井まどか(アートセラピスト)	25	
計				9,840	

*はオンライン方式により運営。

e 夏休み子ども向け鑑賞プログラム ※実施中止。

f 中・高校生向けプログラム

	講座名等	開催日	講師	参加者数(人)
①	ミュージアムグッズを企画しよう!	2022年 1/29(土)	大澤夏美(ミュージアムグッズ愛好家)、丸山晶崇(デザイナー)	8

26	「福田美蘭展」関連エディター・ラー プログラム(あらわる★ミカタ案内人) 「アナがくほどミテみたら」	11/27 (土)	齊藤佳代(エディ ター／鑑賞ファシ リター)	12	
27	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「おうちでARTめりえ ～身近な画材や素 材で自由に楽しもう～」*	11/28 (日)	美エイジング®協会 代表 桜井まどか(ア ートセラピスト)	21	
28	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「ダンス×アソビ～ダンスなあそびを発明し よう! クリスマス ver.」	12/5(日)	長瀬陽子(ダンサー・ DANCE ASOBU CREW 主宰)	29	
29	「福田美蘭展」関連エディター・ラー プログラム(あらわる★ミカタ案内人) 「ずらしの鑑賞、ずらしの創作」	12/11 (土)	白井隆志(アートエ ディター)、夏川真 里奈(アートエディ ター)	12	
30	ミュージアムショップ連携企画 「エントランス・ギャラリー vol.3 末永史尚 『覚え、ないまぜ』」関連コミュニケーシ ョン・プログラム「壁ぎわポッドキャスト『エン トランス・ギャラリー』に目をむける 公開 収録～ご質問にお答えします!～」	12/12 (日)	末永史尚(現代美術 家)、庄子真汀(当館 学芸員)	—	
31	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「メリークリスマス☆ぴよんからのおくりも の～不思議なインクでクリスマスソックスに 描こう～」	12/18 (土)	FLT(ワークショップ クリエイター)	7	
32	「ジャポニズム展」関連コンサート 「ジャポニズムをめぐる音楽～2台のパーゼ ンドルファートと共に～」	2022年 1/22、23 (土、日)	川口成彦(ピアノ)、 中江早希(ソプラノ)	129	
33	「ジャポニズム展」関連ワークショップ 「空育『JAL折り紙ヒコーキ教室』」	2/5(土)	折り紙ヒコーキ協会 認定指導員(JAL職 員)	45	
34	さや堂パフォーマンスプログラム 「あり得た(る)かもしれないその歴史を聴 き取ろうとし続けるある種の長い旅路、特 に日本人やオランダ人、その他もろもろに 関して」	2/11、12 (金、土)	mamoru(レクチャー、 倍音笛)、So Oishi (DJ)、河合真人(声 明)	49	
35	「時の蘇生・柿の木プロジェクト」 「柿の木植樹式」	2/19(土)	宮島達男(現代美術 家)、林勇気(映像作 家)、柿の木プロジェ クト実行委員会	45	

⑮	「福田美蘭展」関連エデュケーター・ラリープログラム(あらわる★ミカタ案内人) 「目の見えない白鳥さんと一緒に楽しむ美術鑑賞プログラム」	10/16 (土)	佐藤麻衣子(エデュケーター／プログラムコーディネーター)、白鳥健二(全盲の美術鑑賞者)	10	
⑯	「福田美蘭展」関連エデュケーター・ラリープログラム(あらわる★ミカタ案内人) 「けむそう会? 〜あなたのもやもや、みんなでもくもく」	10/31 (日)	小田久美子(エデュケーター)	38	
⑰	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「カラダを通して味わうアート vol.4」*	10/31 (日)	高橋直裕(演劇ワークショップファシリテーター)	6	
⑱	ミュージアムショップ連携企画 「エントランス・ギャラリー vol.3 末永史尚『覚え、ないまぜ』」	11/2(火) ～12/22 (水)	末永史尚(現代美術家)	2,281	
㉒	「福田美蘭展」関連エデュケーター・ラリープログラム(あらわる★ミカタ案内人) 「みるみる『ミカタツール』」	11/13 (土)	藤田百合(エデュケーター)	4	
㉓	ミュージアムショップ連携企画 「エントランス・ギャラリー vol.3 末永史尚『覚え、ないまぜ』」関連コミュニケーション・プログラム「壁ざわポッドキャスト『エントランス・ギャラリー』に目をむける 公開収録 ～千葉市美術館の学芸員さんについて～」	11/14 (日)	末永史尚(現代美術家)、西山純子(当館上席学芸員) 他	—	
㉔	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「ストールを泥染めしてみよう」	11/16 (火)	祈織-INORI- 小塩敦子(染色家)	9	
㉕	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「陶器で鏡餅をつくろう!」	11/21 (日)	羽山加奈子(陶芸家)	18	

⑨	「江戸絵画と笑おう」展関連イベント「えどわんグランプリ2021」* ※オンラインで併催	7/13(火) ～9/12 (日)	田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)	2,898	
⑩	「江戸絵画と笑おう」展関連オンラインワークショップ 「うきうき浮人形一つくって 浮かべて あそぼう」*	7/13(火) ～9/20 (月・祝)	田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)、池田陽子(当館広報嘱託員)	1,021	
⑪	「江戸絵画と笑おう」展関連 お楽しみ動画「どこでもえどわら!」*	7/13(火) ～9/20 (月・祝)	松岡まり江(当館学芸員)、田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)、池田陽子(当館広報嘱託員)	513	
⑫	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「毎日使える小皿づくり」	7/18(日)	羽山加奈子(陶芸家)	14	
⑬	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「マスキングインクと水彩 ～夏の花・光の表現を楽しむアート～」	8/1(日)	美エイジング®協会 代表 桜井まどか(アートセラピスト)	24	
⑭	「前川千帆展」関連ワークショップ 「手の中で動きます!ばらばらマンガを作ってみよう」	8/22(日)	あしたのんき(アニメーション画家)	16	
⑮	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「あおげ! 救え! ピヨとつくる夏祭り! ～不思議なインクでオリジナル扇子を描こう～」*	8/28(土)	FLT(ワークショップクリエイター)	10	
⑯	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「木版画を楽しむ ～創作への第一歩～」	9/7、14 (共に火)	宮山加代子(木版画作家)	337	
⑰	「福田美蘭展」関連立ち寄りワークショップ 「むくむくカード」	10/2(土) ～12/19 (日)	監修: 藤田百合(エド育ケーター)、運営: 田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)	703	

d イベント・ワークショップ (41件、9,523人)

	講座名等	開催日	講師	参加者数(人)	
①	常設展関連オンラインワークショップ 「ふいて・ころかし・にじませて～いろであそぼう」*	4/1(木) ～4(日)	石橋陽子(美術作家・アトリエまるさんかくしかく主宰)	20	
②	ミュージアムショップ連携企画「エントランス・ギャラリー vol.2 清水裕貴」	4/6(火) ～5/16(日)	清水裕貴(写真家／小説家)	1,394	
③	ミュージアムショップ連携企画「エントランス・ギャラリー vol.2 清水裕貴」関連イベント「夢の遺失物写真館」	5/1(土) ～5(水・祝)	清水裕貴(写真家／小説家)	18	
④	「大・タイガー立石展」関連オンラインワークショップ「おうちでポーズを決めて、ドット絵風なデジタル必殺技カードにしよう!」*	5/1(土) ～30(日)	田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)	7	
⑤	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「ダンス×アソビ ～ダンスなあそびを発明しよう!～」	5/16(日)	長瀬陽子(ダンサー・DANCE ASOBU CREW 主宰)	31	
⑥	「大・タイガー立石展」関連ワークショップ 「美術館でポーズを決めて、ドット絵風なデジタル必殺技カードにしよう!」	6/19(土)	田口由佳(当館学芸員)、上田美里(当館教育普及嘱託員)	6	
⑦	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「泥から染めるべんがら染め」	6/22(火)	祈織-INORI- 小塩敦子(染色家)	11	
⑧	〈登録パートナーによるワークショップ〉 「カラダを通して味わうアート vol.3」*	6/27(日)	高橋直祐(演劇ワークショップファシリテーター)	9	

3. 教育普及事業

*コロナウイルス拡大防止のため、開催形態を大幅に変更したものはその旨を記し、中止したものについても記載した。

(1) 展覧会および美術全般に関する解説・講座・講演会等の実施

(ア)展覧会場における解説(ギャラリー・トークおよびレクチャー) *ギャラリートークの開催は予定せず。

(イ)展覧会に関連する講座・講演会・イベント等

a 企画展関連の講演会・イベント (2件、115人)

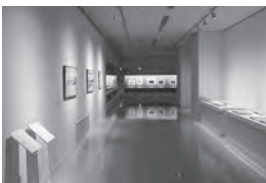
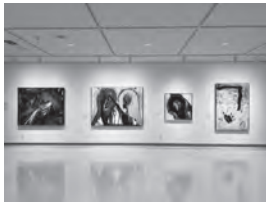
	イベント名等	開催日	講師	会場	参加者(人)
〈前川千帆展〉					
①	講演会「前川千帆と温泉へ行く一版画 浴泉譜の世界」	7/25(日)	森山悦乃(公益財団法人平木 浮世絵財団主任学芸員)	11階講堂	35
〈ジャポニスム―世界を魅了した浮世絵〉					
②	講演会「ジャポニスムと浮世絵」	2022年 2/20(日)	及川茂(日本女子大学名誉教 授)	11階講堂	80

b 市民美術講座 (7件、415人)

	イベント名等	開催日	講師	会場	参加者(人)
①	「極私的タイガー立石論」	5/22(土)	薬科英也(当館上席学芸員)	11階講堂	53
②	「サトウ画廊コレクションから見るタイガー 立石」	6/26(土)	森啓輔(当館学芸員)	11階講堂	58
③	「現代美術の一傾向―引用 黒田清輝 の作品を例に」	10/23(土)	山梨絵美子(当館館長)	11階講堂	43
④	「イメージを楽しむ―浮世絵と見立・やつ し」	11/6(土)	田辺昌子(当館副館長兼学芸 課長)	11階講堂	53
⑤	「ミカタ案内人のチャレンジャーエデュケー ターによる鑑賞ワークショップの実践紹 介」	12/12(日)	畑井恵(当館学芸員)	11階講堂	42
⑥	「ジャポニスムを通して浮世絵を視る」	2022年 2/6(日)	田辺昌子(当館副館長兼学芸 課長)	11階講堂	92
⑦	「ジャポニスムとアメリカの画家たち」	2/27(日)	山根佳奈(当館主任学芸員)	11階講堂	74

c 鑑賞補助ツールの制作と活用 (6件、2,522人)

	展覧会名等	内容	対象	利用者数(人)
①	大・タイガー立石展	とらをさがせカード	3歳以上	212
②	千葉市美術館コレクション選 (常設展)	はっけんツール	全年齢	84
		ふかめるガイド	小学生中学年～	149
③	美術館探検隊	探検のしおり(館内マップ)	全年齢	557
④	前川千帆展	センパンさんのほのぼの版画ワールド へようこそ	小学生低学年～	300
⑤	福田美蘭展	千葉市美コレクション遊覧 「ミカタツール」	小学生中学年～ 高校生	370
⑥	ジャポニスム―世界を魅了した浮世 絵	「ジャポニスムタイムズ」 ワークシート	小学生中学年～	850
計				2,522

⑨	12/7(火)～26(日) (20日間) (3,566人)		特集 渡辺華山／ 武士の粹／ 戦争の周辺 	
⑩	2022年 1/4(火)～2/6(日) (34日間) (6,488人)	布施コレクション ～版画の楽しみ 	新春の寿ぎ 虎・とら・トラ 	特集 書一第二のジャポニスム 
⑪	2/8(火)～3/6(日) (27日間) (13,679人)		冬の楽しみ 	 
⑫	3/8(火)～4/3(日) (27日間) (1,219人)		花づくし  	

④	7/7(水)～8/1(日) (26日間) (3,029人)	特集 寺崎武男 	納涼と祝祭 	特集 杉本博司 
⑤	8/3(火)～9/5(日) (34日間) (3,634人)		祝祭／ 躍動する体 	 
⑥	9/7(火)～ 10/3(日) (27日間) (3,730人)	特集 深澤幸雄 	秋の風情／ 震災と復興  	
⑦	10/5(火)～31(日) (27日間) (3,421人)		秋の風情／ 見立てとやつし／ オマージュあるいはパロディー 	特集 吉澤美香   
⑧	11/2(火)～12/5(日) (34日間) (5,100人)	房総ゆかりの作家たち 自画像と人物像 	特集 渡辺華山／ 顔・顔・顔 	

(2) 常設展(12件)

20年度より5階に「コレクションルーム」が設置され、通年で所蔵作品の公開が可能となった。収集方針ごとのコーナー設置で、〈房総ゆかりの作家・作品〉は1〜2ヶ月ごと、〈近世・近代の日本絵画と版画〉は原則毎月、〈1945年以降の現代美術〉は3ヶ月ごとに展示替えを行った。

「千葉市美術館コレクション選」

	会期 (開催日数) (入場者数)	コーナー展示 テーマ、特集名		
		〈房総ゆかりの作家・作品〉	〈近世・近代の日本絵画と版画〉	〈1945年以降の現代美術〉
①	2021年 4/7(水)〜5/5 (水・祝) (29日間) (3,889人)	新収蔵記念 中川一政 	春を愛でる／ 物語を描く 	特集 サトウ画廊コレクション よりータイガー立石とともにー 
②	5/7(金)〜6/6(日) (31日間) (3,058人)	特集 石井光楓  	薫風／ 行楽と旅  	
③	6/8(火)〜7/4(日) (27日間) (8,946人)		富士の絶景／ 海と山に遊ぶ  	

⑤ ジャポニスムー世界を魅了した浮世絵

2022年1月12日(水)～3月6日(日) 8・7階企画展示室

19世紀後半から20世紀初めにかけて西洋に輸出された日本の美術工芸品は、ジャポニスムと呼ばれる動向となり、西洋の美意識に大きな影響を与えた。ジャポニスムの展覧会は、これまで主に西洋美術史の観点から企画されてきたが、本展ではこれを浮世絵表現の特性を理解するきっかけとして提示した。当館の所蔵作品や国内外から借用した浮世絵及びジャポニスムの西洋絵画・版画約200点で構成した。

(53日間／入場者18,269人)



⑥ 第53回千葉市民美術展覧会

3月12日(土)～31日(木) 1階さや堂ホール、8・7階企画展示室、9階市民ギャラリー

市民から公募した作品及び千葉市美術協会会員の作品約800点を7部門に分けて展示した。

(20日間／入場者11,633人)



⑦ (同時開催) 千葉市美術館コレクション展

「房総ゆかりの作家たち 特集展示：鈴木鷺湖と石井柏亭・鶴三」

あわせて同時開催として、千葉市美術館コレクションの中から、房総ゆかりの作品を展示するコーナーを設けた。(7階第7・8展示室。)



③ コレクション展

江戸絵画と笑おう 明治の戯画也大活躍!

7月13日(火)～9月20日(月・祝) 7階企画展示室



本展では千葉市美術館のコレクションの中から「笑い」をキーワードとして、現代の私たちにも自然に楽しめる、親しみやすい作品を集めて展示した。犬や猫たちのかわいさがあふれる動物画、ウィットに富む図柄に思わずくすりとさせられる戯画、ユーモアを交えて教義を伝える禅画など、多彩な作品と触れ合う機会を提供した。

(67日間／入場者7,856人)



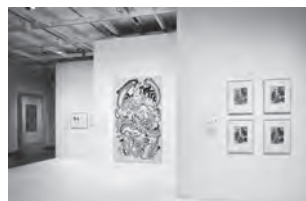
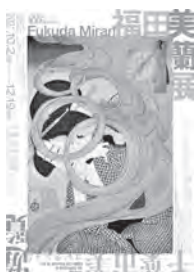
④ 千葉市制100周年記念

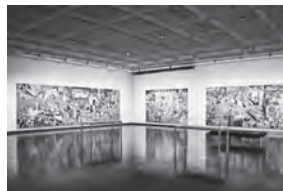
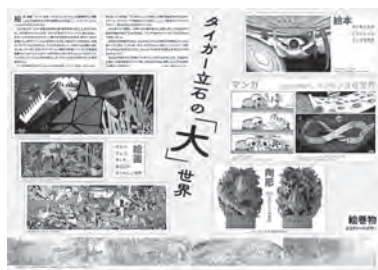
福田美蘭展 千葉市美コレクション遊覧

10月2日(土)～12月19日(日) 8・7階企画展示室

福田美蘭(1963生)は、東京藝術大学を卒業後、最年少での安井賞や国際展での受賞等、国内外での活躍を通して独自の作風を切り拓き、絵画の新たな可能性に挑戦し続けている。本展覧会では、千葉市美術館のコレクションの中から福田自らが選定した江戸から明治時代の美術をきっかけに、新たに創作された作品を中心に展示した。

(74日間／入場者10,409人)





② 千葉市制100周年記念

平木コレクションによる 前川千帆展

7月13日(火)～9月20日(月・祝) 8・7階企画展示室

前川千帆(1888-1960)は、恩地孝四郎・平塚運一とともに「御三家」と称された、近代日本を代表する創作版画家であるが、本展覧会は実に44年ぶりの大回顧展となった。前川は京都に生まれ、漫画家として名を成すかわら木版画を手がけ、清澄な彫摺と躍動感のあるユーモラスな造形により独自の作風を拓いた。その作品は、今なお色褪せない魅力を有している。また近年、彼が日本のアニメーション草創期に少なからぬ役割を果たした事実も掘り起こされている。本展は浮世絵の大コレクションで知られる公益財団法人平木浮世絵財団の所蔵品を中心に、約350点の作品によって前川千帆の版業を総覧した。

(67日間／入場者7,282人)



③	千の葉の芸術祭「CHIBA FOTO」 海辺の記憶を伝える稲毛アーカイブ 写真展	千葉市民ギャラリー・いなげ(2021/8/21 ～9/12)	ジョルジュ・ビゴー《稲 毛海岸》、《稲毛・五月 の節句》	2
④	「千葉市美術館所蔵 新版画一進化 系UKIYO-Eの美」	高島屋・日本橋(2021/8/25～9/12) 高島屋・なんば(2021/9/15～9/27)	小原古邨《小鷺》ほか	118
⑤	「美男におわす」	埼玉県立近代美術館(2021/9/23～11/3) 島根県立石見美術館(2021/11/27～ 12/20)	無款《大小の舞図》ほ か	12 (9)
⑥	「絵になる自然 ～生きとし生けるも のへの賛歌～」	秋田市立千秋美術館(2021/9/25～11/7) ※開催延期による新日程	三熊花顔《蝶類図巻》 (寄託)、岡田閑林《玉 堂富貴孔雀小禽図》 (寄託)	2 (2)
⑦	「バラのすべて」	千葉県立中央博物館(2021/10/9～ 11/28)	諸葛監「白梅小禽図」 ほか	10 (3)
⑧	「曾我蕭白 奇想ここに極まれり」	愛知県美術館(2021/10/8～11/21)	曾我蕭白《林和靖図》	1
⑨	「幻の天才画家 鈴木華邨一甦る花 鳥風月の世界」	逸翁美術館(2021/10/9～12/12) ※開催延期による新日程	鈴木華邨《太閤に鶴 図》、鈴木華邨画 《Images Japonaise》	2
⑩	「重要文化財指定記念特別展 鈴木 其一・夏秋溪流図屏風」	根津美術館(2021/11/3～12/19)	山本光一《白鷺図》	1
計				160 (14)

b 写真の貸出、撮影等(特別利用) (49件87点)

(3) 所蔵作品の修復等

a 作品の修復等 (3件)

b 作品の額装及びマット装 (52件)

c 作品の写真撮影及び画像デジタル化 (撮影136カット、デジタル化1,097点)

2. 展示事業

(1) 企画展 (6件)

① 千葉市制100周年記念

POP-ARTの魔術師 大・タイガー立石展

2021年4月10日(土)～7月4日(日) 8・7階企画展示室

福岡に生まれた立石紘一(1941-98)は1963年の読売アンデパンダン展でデビューした。その後みずから「タイガー立石」と名乗り、日本のポップ・アートを代表する作家として広く知られた。60年代後半にはマンガの世界でも活躍し、多くの子どもたちが口にした「ニャロメ」ということばは彼が生み出した。60年代末にはイタリアに渡り、10年以上同地を中心に活躍し82年に帰国。85年からは千葉縣市原市に住み、「立石大河亞」を名乗り、協力者たちとともにさまざまな情報を発信した。本展覧会は初期から晩年までの油彩、版画及びマンガや絵本の原画など約200点で構成し、作者の多角的な創作活動を紹介した。

(83日間／入場者14,149人)

- ・ 下村良之介《足の長い鳥》、同《有》、同《〈闘鶏屏風 直〉下絵》、同《赫日》、同《(すずめ)》(以上、下村直美氏寄贈)
- ・ 飯田善國《スープ皿を放りなげる少年》(河合正朝氏寄贈)
- ・ 秋岡美帆《1996年8月21日》、同《光の間 02-5-31-1》(以上、秋岡ソノ氏寄贈)
- ・ 土屋公雄《古代の雨》(市川文江氏寄贈)
- ・ 福田美蘭《薬師寺東塔落慶法要散華／タウ紙》、同《富嶽三十六景 神奈川冲浪裏》、同《雪》、同《瀟湘八景》、同《琴高乗鯉図》、同《松竹梅》、同《雪月花》、同《恵比寿図》、同《石庭》、同《波濤図》(以上、作者寄贈)

寄贈及び購入作品

区分	前年度まで			令和3年度			総収集作品件数		
	寄贈	購入	計	寄贈	購入	計	寄贈	購入	計
千葉市を中心とした房総ゆかりの作家・作品	424	101	525	105	0	105	529	101	630
近世以降の作品	319	890	1,209	39	0	39	358	890	1,248
現代美術・その他	149	348	497	22	1	23	171	349	520
計	892	1,339	2,231	166	1	167	1,058	1,340	2,398

※寄贈には、千葉市からの移管分等を含む

c 寄託 (31件)

石井林響《拾得図屏風》 他

寄託作品

区分	前年度まで	令和3年度		総寄託作品件数
		寄託	寄託解除	
千葉市を中心とした房総ゆかりの作家・作品	91	28	0	119
近世以降の作品	778	1	2	777
現代美術・その他	246	1	0	247
計	1,115	30	2	1,143

※国用品の無償貸与1件を除く

(2) 所蔵作品の貸出、特別利用

a 作品の貸出 (10件160点)

＊令和3年度開催展(以後の巡回展及び開催延期となったものも含む)について記載。

	展覧会名	会場・会期	作品	作品点数 (うち寄託品)
①	「浮世絵風景画 一広重・清親・巴水 三世代の眼」	町田市立国際版画美術館(2021/7/10～9/12) ※開催延期による新日程	川瀬巴水《旅みやげ第一集 松島桂島》ほか	8
②	「大・タイガー立石展」	青森県立美術館(2021/7/20～9/5) 高松市美術館(2021/9/18～11/3) 埼玉県立近代美術館・うらわ美術館(2021/11/16～2022/1/16)	立石紘一《ハン》ほか	4

- ・船崎光治郎『御宿 船崎光治郎版画誌Ⅰ』(持丸和久氏寄贈)
- ・明石哲三《母子の馬》、同《赤い牛》、同《けしの花》、同《三津海岸》、同《南の島》、同《(題名不詳)》、同《(題名不詳)》(以上、近桂一郎氏寄贈)
- ・田中一村(撮影)《(写真)》(新山宏氏寄贈)
- ・宮嶋美明《いつかはやってくる》、同《砕》、同《腑分》、同《花》(以上、宮島かをり氏寄贈)
- ・高橋規矩治郎《水辺》、同《埋立地帯 1》、同《埋立地帯 (2)》、同《漁港》、同《鳶舞う浜》(以上、高橋光規氏寄贈)
- ・田岡春径《(遊ぶ子供)》、同《稲毛の松林(稲毛公園より)》、椿貞雄《夕やけの富士》、神谷紀雄《鉄絵銅彩椿文大鉢》(以上、千葉市役所秘書課より移管)
- ・新井卓《向こう側の鏡》(作者寄贈)
- ・宇佐美雅浩《宇佐美正夫 千葉 2021》、同《Mandala-in Chiba》(以上、作者寄贈)
- ・金川晋吾《個人と他人 INDIVIDUAL AND OTHERS》、同《個人と他人 INDIVIDUAL AND OTHERS》、同《個人と他人 INDIVIDUAL AND OTHERS》(以上、作者寄贈)
- ・北井一夫《街路樹 千葉市》、同《街路樹 千葉市》、同《街路樹 千葉市》、同《街路樹 千葉市》、同《街路樹 千葉市》(以上、作者寄贈)
- ・蔵真墨《千の葉のひとびと TikTok撮影していたネパール出身の専門学校生 千葉公園 2020》、同《千の葉のひとびと 道場に向かう途中の兄妹 まちなか 2021》、同《千の葉のひとびと ハラルショップにいた青年 西千葉 2020》(以上、作者寄贈)
- ・佐藤信太郎《Geography》、同《Geography》、同《Boundaries》、同《Boundaries》(以上、作者寄贈)
- ・清水裕貴《コールドスリープ》(作者寄贈)
- ・檜橋朝子《Chibaminato, 2019》、同《Chibaminato, 2020》(以上、作者寄贈)
- ・本城直季《small planet 幕張メッセ》、同《small planet ZOZOマリンスタジアム》、同《industry JFEスチール》、同《small planet 稲毛海浜公園プール》、同《small planet 千葉駅》、同《small planet 千葉市中央区》、同《small planet 千葉市美浜区稲毛海岸》、同《small planet 千葉市若葉区富田町》、同《small garden 稲毛第二小学校》、同《small garden 稲毛第二小学校》、同《small garden 稲毛第二小学校》、同《small garden 稲毛第二小学校》、同《small garden 平山小学校》、同《small garden 平山小学校》、同《small garden 平山小学校》、同《small garden 弥生小学校》、同《small garden 弥生小学校》、同《small garden 弥生小学校》、同《small garden 弥生小学校》(以上、作者寄贈)
- ・横湯久美《その時のしるし 呪術的試み》、同《その時のしるし からっぽを着る》、同《その時のしるし からっぽを抱く》、同《その時のしるし》(以上、作者寄贈)
- ・吉田志穂《空白と考古学》、同《空白と考古学》(以上、作者寄贈)
- ・歌川豊国《立美人図(山東京山賛)》、歌川豊春《鍾馗図》、(無款)《金太郎図》、初代歌川豊国画貼付／三代歌川豊国署名《四代目沢村宗十郎の梅の由兵衛》、歌川国久《歌川国貞肖像》、三代歌川豊国《歌川豊春自画之写》、歌川国貞《豊国先生四十三像》、歌川国輝《三代歌川豊国像》、(歌川豊国硯)、(歌川派印章)、歌川国峰《立雛図》、久保田米僊《鍾馗図》、九代目市川團十郎《市川團十郎の暫》、歌川国峰《騎龍観音》、同《山内一豊図》、同《暫》(以上、海堀周造・立田佳子氏寄贈)
- ・石渡江逸《鶴見の観音》、同《(横濱)柳橋の月》、同《むさし野郊外風景(徳丸にて)》(以上、石渡慎子氏寄贈)
- ・日和崎尊夫《題不詳》、同《星のいとなみ》、同《星のたたかい No.1》、同《星の幻想》、同《対話》、同《詩画集『卵』より 1.見つめる…》、同《詩画集『卵』より 2.砲煙の…》、同《KALPA 夜》、同《海淵の薔薇》、同《酒鬼》、同《Pierrot》、同《花》、同《魚のカーニバル》、同《メルヘン》、同《異星》、同《殖》、同《海花》、同《KALPA 生命》、同《OPACA》、同《哀花》(以上、日和崎紈子・星児・陽児・光児氏寄贈)
- ・野見山暁治《誰にも分からない》、同《そっとしておこう》、同《知らない景色》(以上、作者寄贈)

令和3(2021)年度 千葉市美術館の活動

目次

I 指定管理受託事業

[企画提案業務]

1. 美術品等の収集・保存・管理
2. 展示事業
3. 教育普及事業
4. 調査研究事業
5. ミュージアムショップ運営
6. 友の会運営

[施設使用許可][施設維持管理業務][経営管理業務]

II 自主事業

I 指定管理受託事業

1. 美術品等の収集・保存・管理

(1) 作品の収集

a 購入 (1件)

- ・福田美蘭「千葉市美コレクション遊覧シリーズ」

b 寄贈 (166件)

- ・板倉鼎《(題名不詳・自画像か)》、同《(題名不詳・海)》、同《房州布良》、同《(題名不詳・花)》、同《(題名不詳・花 バラ)》、同《(題名不詳・緑のショールを巻く女性)》、同《(題名不詳・赤い服の女性)》、同《(黒衣の女か)》、同《(黒衣の女か 下絵)》、同《立てる少女巴里にて／立てる少女》、同《立てる少女巴里にて／立てる少女 下絵》、同《「立てる少女」関連素描(女性)》、同《「立てる少女」関連素描(立てる婦人像)》、同《「立てる少女」関連素描(女性)》、同《「立てる少女」関連素描(立てる婦人像)》、同《「立てる少女」関連素描(女性)》、同《「立てる少女」関連素描(蔓草)》、同《「立てる少女」関連素描(草)》、同《「立てる少女」関連素描(蔓草)》、同《「立てる少女」関連素描(草)》、同《「立てる少女」関連素描(蔓草)》、同《「立てる少女」関連素描(草)》、同《「立てる少女」関連素描(葉)》、同《「立てる少女」関連素描か(立てる少女像)》、同《「立てる少女」関連素描か(鉄柵の部分)》、同《(題名不詳・戸外で椅子にかける赤い服の須美子)》、同《(題名不詳・道路工事か)》、同《(題名不詳・風景 遠方に海)》、同《(題名不詳・風景 川)》、同《紫陽花》、同《ダリヤとグラジオラス》、同《(題名不詳・花 アネモネ、マーガレット等)》、同《窓際》(以上、神崎眞子氏・板倉剛氏寄贈)
- ・菅谷元三郎《山中竹樹像》(山中暁氏寄贈)

令和3(2021)年度 千葉市美術館の活動

令和3(2021)年度 市民ギャラリー・いなげの活動

令和3(2021)年度 利用者数